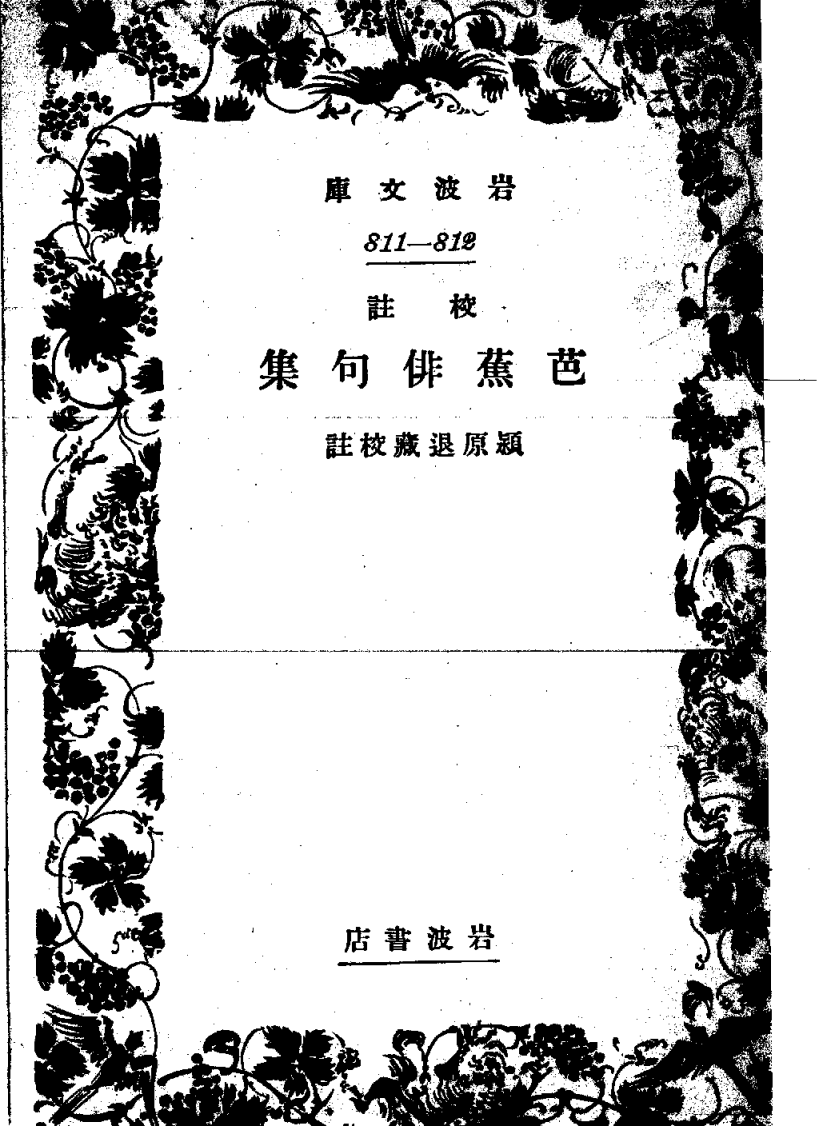




庫 文 波 岩

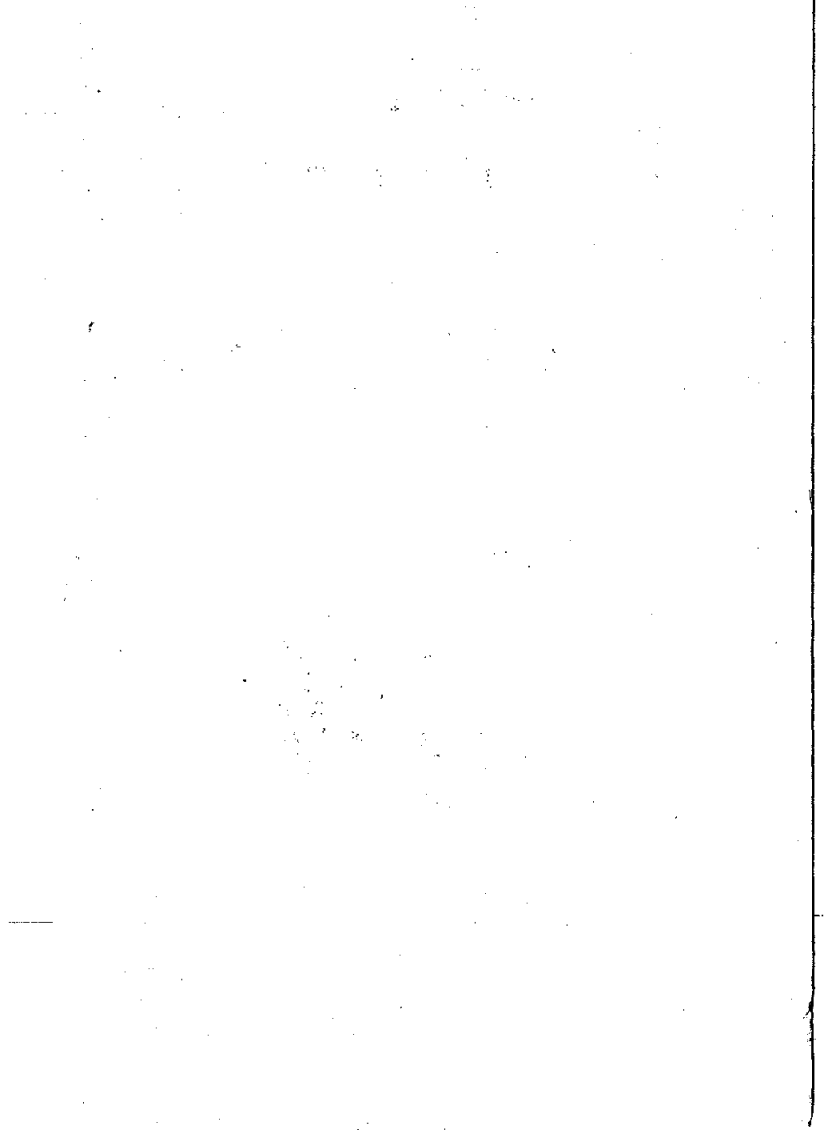
811—812

註 校

芭 蕉 俳 句 集

額 原 退 藏 校 註

岩 波 書 店



庫 文 波 岩

811-812

註 校

集 句 俳 蕉 芭

訂校藏退原額



店 書 波 岩

昭和七年秋

阿蘇内牧温泉を讀了

目次

春

新年

元日	三
今朝の春	三
千代の春	三
花の春	四
浦の春	四
宿の春	四
春立つ	五
春	五
歳旦	五
筆始	六
蓬萊	六
蘭采	六
門松	七
松飾	七

時候

庭籠	七
若夷	七
子日	七
若菜	七
二月	八
春の夜	八
春の暮	八
行く春	八
夏近し	九
天文・地理	九
霞	九
陽炎	一〇
糸遊	二

人事

春の雨	二
臘月	二
凍解	三
初午	三
退塾會	三
水取	三
雛	三
草の餅	三
み干	三
畑打	三
種芋賣	三
菜摘	四
動物	四

植物

猫の戀	一四
鰯祭魚	一五
鰯	一五
雲雀	一五
燕	一六
雛子	一七
蹄雁	一七
雀子	一八
鳥の巢	一八
白魚	一八
蛙	一九
蝶	一九
田螺	二〇
梅	二〇

柳……………五
 椿……………五
 初櫻……………五
 櫻……………六
 花……………三
 桃……………三
 藤……………三

夏

時 候

四月……………五
 五月……………五
 六月……………五
 暑……………五
 夏の夜……………五
 秋近し……………五
 天文……………五
 五月雨……………五
 梅雨……………五

山吹……………五
 菜の花……………五
 薔園……………五
 若草……………五
 春草……………五
 菰若葉……………五
 芦若葉……………五

地 理

雲の峰……………五
 蕨風……………五
 涼……………五
 夏の月……………五
 清水……………五
 泉……………五
 夏山……………五
 夏野……………五
 夏の海……………五

人 事

更衣……………五
 菰佛……………五
 夏籠……………五
 襦……………五
 棕……………五
 田植……………五
 鷺舟……………五
 土用干……………五
 氷室……………五
 納涼……………五

萩若葉……………五
 鬼助……………五
 鹽……………五
 養……………五
 芹……………五
 野老……………五
 濁活……………五

簞……………五
 扇……………五
 蚊屋……………五
 夏座敷……………五
 夏衣……………五
 夏羽織……………五
 寄ざし……………五
 心太……………五
 道明寺……………五
 竹酔日……………五

土筆……………五
 海苔……………五
 糠唐辛子……………五
 糠茄子……………五

初秋		一〇四
今朝の秋		一〇四
文月		一〇五

時 候

残暑		一〇五
冷		一〇五
身に入む		一〇五
肌寒		一〇五
夜寒		一〇六

秋の暮		一〇六
秋の夜		一〇七
暮秋		一〇七
行く秋		一〇八

野分		一一三
稻妻		一一〇
天の川		一一〇

天 文

袋角		七六
鰯		七六
鮎		七六
時鳥		七七
閑古鳥		七八
老鶯		七八
行々子		七八
水鰯		七八
塘		七八
鰻牛		七八
蟬		七八
螢		七八

秋

動 物

蛭		八〇
蚊		八〇
蟹		八〇
植物		八〇
卵花		八〇
麥		八〇
の子		八〇
若葉・青葉		八〇
茂		八〇
夏木立		八〇
木下闇		八〇
花摘		八〇
牡丹		八〇

杜若		八〇
菖蒲		八〇
聖母		八〇
紫陽花		八〇
撫子		八〇
仙の花		八〇
椎の花		八〇
栗の花		八〇
楊の花		八〇
合歡の花		八〇
紅粉の花		八〇
瓜の花		八〇
瓜		八〇
眞桑瓜		八〇

茄子		八〇
蜜餞		八〇
夕顔		八〇
蓮		八〇
桑の實		八〇
藤の實		八〇
蓀		八〇
蓀		八〇
一つ葉		八〇
青松葉		八〇
夏草		八〇
雜		八〇

雜

秋風	二五	人事	七夕	二五
初月	二五		星合	二五
三日月	二五		魂祭	二五
名月	二七		葛夢	二六
けふの月	二八		相摸	二六
月見	二八		捨扇	二六
十六夜	二八		駒迎	二六
月	二八			
後の月	二八			
露	二八			
露	二八			
秋の霜	二八			
秋の空	二八			

磯		四〇
賣の市		四〇
御選宮		四〇
稻刈		四〇
鹿		四一
雁		四一
鶉		四一
水啄		四一
秘雀		四一
歸燕		四一
渡鳥		四一
四十雀		四一
かじか		四一
江蛇		四二
蜻蛉		四二
蛭虫		四二
虫		四二
きりくす		四二
寛馬		四三

動物

散柳	一五	植物	鶯頭	一五
一葉	一五		草の花	一五
紅葉	一五		蔦	一五
萩	一五		鬼灯	一五
菰	一五		楓	一五
薄	一五		...	...
菊	一五		...	...
木槿	一五		...	...
朝顔	一五		...	...
罌	一五		...	...
女郎花	一五		...	...
野菊	一五		...	...
秋海棠	一五		...	...
芭蕉	一五		...	...
芙蓉	一五		...	...
鶯頭	一五		...	...

冬

時候

小春	一七五
寒さ	一七五
寒	一七五
師走	一七五
年の暮	一七五
小晦日	一七五

天文

次	一七五
初時雨	一七五
時雨	一七五
冬の	一七五
霜	一七五
初雪	一七五
雪	一七五
雪見	一七五
雪丸げ	一七五
雪	一七五

地理

凍	一七五
木枯	一七五
冬の目	一七五
水	一七五
枯野	一七五

人事

神の留守	一七五
夷講	一七五
御命講	一七五
冬籠	一七五
燗酒	一七五
口切	一七五
火爐	一七五
圍爐裏	一七五
火桶	一七五
炭	一七五

植物

千鳥	一七五
干鮭	一七五
河豚	一七五
海鼠	一七五
落葉	一七五
露花	一七五
枯草	一七五
枯蘇	一七五
枯尾花	一七五
冬牡丹	一七五
水仙	一七五
寒菊	一七五
寒梅	一七五
探梅	一七五
大根	一七五
冬菜	一七五

動物

埋火	一七五
頭巾	一七五
蒲團	一七五
夜着	一七五
紙子	一七五
鉢叩	一七五
節季候	一七五
厄拂	一七五
榎拂	一七五
餅搗	一七五
年忘	一七五
年取	一七五
年の市	一七五
夢葺	一七五
賽菱刈	一七五
鷹	一七五
鴨	一七五

雜

雜

三三

雜

二四

目

附 錄

一、考證の部

二九

次

春

新年	三九
時候	三三
天文	三三
人事	三三
動物	三四
植物	三六
雜	三三

夏

時候	三六
天文	三六
地理	三四
人事	三四
動物	三五
植物	三五
雜	三六

秋

時候	三六
天文	三六
地理	三六
人事	三六
動物	三六
植物	三六
雜	三六

冬

時候	三六
天文	三六
地理	三六
人事	三六
動物	三六
植物	三六
雜	三六

二、誤傳の部

二七九

例言

一、本書は芭蕉の作として今日知られて居る俳句の中、確實と認められるもののみを採集し、これを四季類題別に分類排列したものである。

一、所收の句は二三止むを得ないものを除く外、すべて直接その出典とした原本につき、全く原形のまゝに随つた。但し濁點だけは便宜施す事としたが、原本に既に濁點を施してあるものは右傍に「マ、」と附記して區別しておいた。

一、出典を二つ以上記した句は、その最初にあげたものの原形に随つて居る。

一、頭註は特に句形の異同、詞書の有無等について比較を容易ならしめるやうに努めた。なほ右について特に注意すべきものは、頭註によらず本文に並記したものもある。

一、享保以前に刊行されたものは、出典としてなるべく書名だけでも註記する事にしたが、その以後は重要な異同あるものだけに止めた。

一、附録の考證の部には、諸書に芭蕉の作として傳へられて居るが、なほ十分確實とし難いものを参考のため掲げた。その中*印を附したものは、比較的確實性に富み、本文中に入れてもよい程度のものであるが、姑く疑を存する事にした。

一、附録の誤傳の部には、諸書に芭蕉の作として傳へられて居るが、實は誤傳であるものを参考のため掲げた。作者名を記した方が正しいのである。

一、要するに本書は芭蕉俳句集の本文として最も信憑すべきものたらしめる事を目的とした。しかし勿論遺漏錯誤等も少からぬ事と思ふ。特に考證の部の句の如きは、今後の研究によつて、或は確實な出所が明にされ、或は當然削除されるであらう。

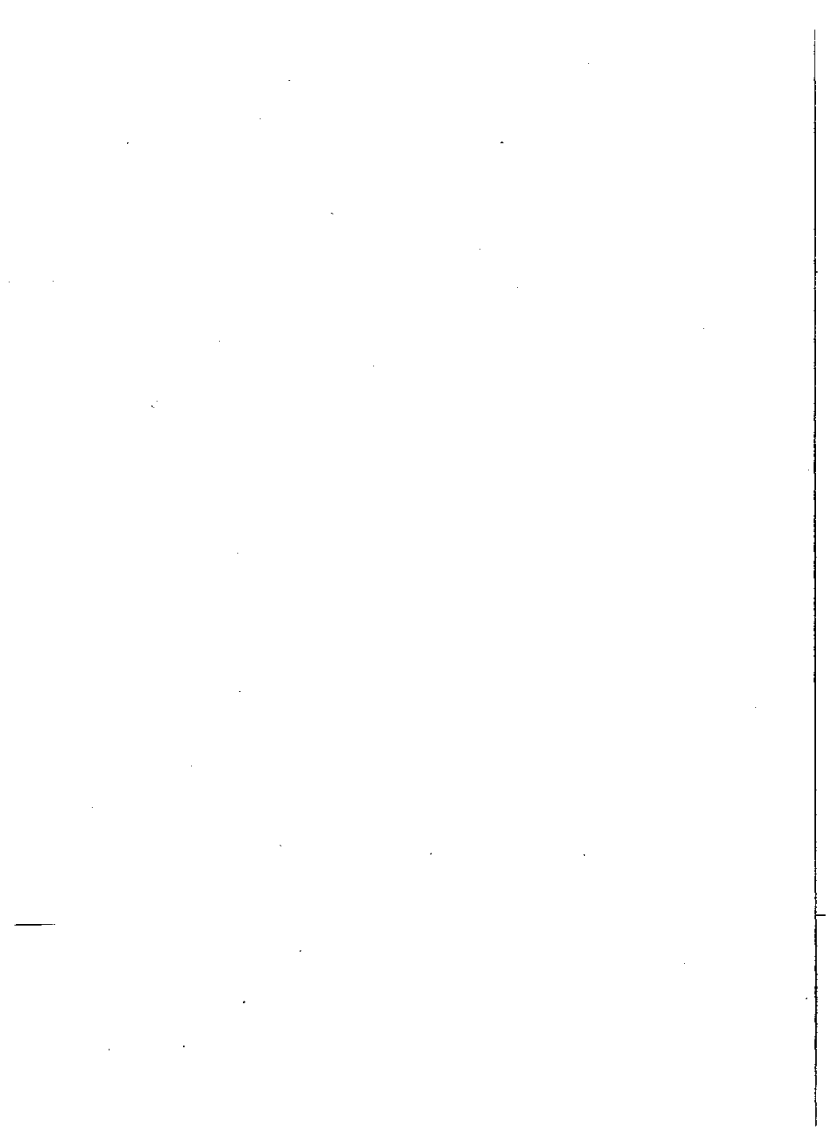
一、本書には出典とした書籍の五十音順刊行年表をそへて、ほゞ作句年代を知るに資し、又俳句の五十音順索引も添へる豫定であつたが、頁數の都合上遺憾ながらこれを省いた。

一、本書の編纂に當つて、先輩學者の研究に負ふ所は甚大である。謹んで感謝の衷を捧げる。また本書の編纂出版上幾多の忠言を賜はつた小宮豊隆氏、並びに本書に出典としてあげた俳句の大部分を貸與された川西和露氏、その他本書に引用した書籍の閲覽を許された多くの藏書家諸氏の好意を厚く謝する。

昭和七年三月二十四日

額 原 退 藏

芭蕉俳句集



芭蕉 俳句 集

○元日は——續深川には
「試筆」と前書あり○元日は——杉風眞蹟芭蕉
翁像畫賛には「さらしなの
月を想像で」と前書あり

春

新年

元日やおもへば寂し秋のくれ

(名) 深の川

其年越し歳旦

元日は田毎の日こそ戀しけれ

(木曾の藩・寛政版更科紀行)

元日に田ごとの日こそこひしけれ

(泊) 船集

庭訓の往來誰が文庫より今朝の春

(江戸賣小路)

誰やらが形に似たりけさの春

(續) 虚塵

誰やらが姿に似たりけさの春

(泊) 船集

天鐸^(てんたく)や京江戸かけて千代の春

(當) 世男

芭蕉俳句集

○二日にも——この句笈の小文(本文参照)・柱脚・泊船集(元日はひるまで寝てもちくひはづしぬ)と前書にも出づ

○薦を着て——この句かくれどと及び花窓に懸する其角の句の前書中にも見え、なほ芭蕉句選には「誰人が薦着ています花の春」、芭蕉翁消息集には「何人が就着ています花の春」とある

○うたがふな——芭蕉翁眞蹟集に「ふたみ」と前書して出づ

○發句なり——ばせを鹽に「貞享年中の吟葉堂其角と三つもの有り」とある

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春

(蘭野)

空の名残おしまむと舊友の來りて酒興じけ

るに元日の晝まで伏て曙見はづして

二日にもぬかりはせじな花の春

(篇突)

都ちかき所にとしをとりて

薦を着て誰人います花のはる

(其船集)

湖水のほとりに春を迎へて

薦を着て誰人います花の春

(卯辰集)

二見の圖を拜み侍りて

うたがふな潮の花も浦の春

(いつを昔泊船集)

發句なり芭蕉桃青宿の春

(ばせを鹽)

○春たちて——この句笈の小文〔「初春」と題す〕泊船集にも出づ

○於春春——句選年考所引による

○くれく——芭蕉句選拾遺に下五「佗言哉」

○此發句は云々——この前書は撰者越人の文

○年立や——芭蕉句選に「とし立や新年ふくべ米五升」、三冊子・芭蕉翁發句集に「春立や新年ふるき米五升」

春立とわらはも知やかざり繩

（歌香物）

風麥亭にて

春たちてまだ九日の野山かな

（初蝶）

於春春大なる哉春と云々

（向之岡）

元日

くれく——て餅を木魂のわびね哉

（天和二年
錢旦發句帳）

歳旦

此發句は芭蕉江府船町の露に倦深川泊船堂に入ラれしつぐる年の作なり堂のうち茶碗十ヲ菜刀一枚米入るゝ瓢一ツ五升の外不入名を四山と申候

似合しや新年古き米五升
年立や新年ふるし米五升

（鶴尾冠）
（泊船集）

○年くや——この句小文
摩猿舞師・陸奥衛・泊船集
にも出づ

○大津繪の——この句柱
懸・端突(湖頭の無名庵に
春をむかふ時三日閉口顯四
日)と前書・瓜作(正月三
日都に出るとて)と前書。
陸奥衛にも出で、句形勸進
腰に同じ。又小松原には前
書なく中七「筆のはじめや」
○蓬萊に——この句伊達
衣・端突(うづれの春にや
おぼえず)と前書・皮懸辨・
泊船集・陸奥衛・卯花山・宇
陀法師・木葉濱等にも出づ

年くや猿に着せたる猿の面(蘭 聯 子)

鶏旦

年くや猿に着せたる猿の面(翁 草)

元日や狙にきせたる狙の面(類 柑 子)

三日口を閉て題正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛(勸 進 集 帳)

正月四日ヲ題ス

大津繪の筆のはじめや何佛(蓮 の 實)

鳩の海邊に年をこえて三日嘴を氷ス

大津繪の筆のはじめやなに佛(小 文 庫)

蓬萊に聞ばや伊勢の初便(巖 猿)

餅を夢に折結ふしだの草枕(東 日 記)

○餅を夢に——眞蹟短冊に
「元朝心感有」と題せり

○幾霜に——茶集に「また
のはるはあむにありて」と
前書して出づ

○年は人に——茶集に
「年や人にとられていつも
わか夷」

○齒霜に——この句萬
子・泊船集にも出づ。なほ眞
蹟に上五「はまくり」とせ
るものあり。

山家に年を越て

誰ぞ齒朶に餅おふ牛の年
誰ぞ餅に齒朶をふ丑の年
門松やおもへば一夜三十年
幾霜に心ばせをの松かざり

仁徳天皇

高き屋にのぼりてみればとの御製の有が

たさを今も猶

寂慮にて賑ふ民の庭竈
年は人にとらせていつも若夷
子日しに都へゆかん友もがな
蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉

(孤松・甲子
吟行・茶集)

(二幅半)

(六百番俳句合)

(貞享三年
其角歳旦姫)

(庭竈)

(千宜理記)

(芭蕉集
芭蕉句選拾遺)

(若菜)

○はだかには——この句箋の小文・箋日記にも出で共に三五頁の「何の木」の句と共に、前者には「伊勢山田」、後者には「奉納二句」と題す。又泊船集には「二月十七日神路山を出るとて西行のなみだをしたひ増賀の信をかなしむ」と前書せり

○田家云々——雪丸げにはこの前書なし。なほ次の句と共に奥細道拾遺参照

時 候

二月十七日神路山を出ルとて

はだかにはまだ衣更着のあらし哉

(其 箋)

初 瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

(箋の小文)

春の夜は櫻に明て仕廻けり

(類・梅・草)

田家にはるのくれをわぶ

入あひのかねもきこえずはるのくれ

(雪丸げ)

鐘つかぬ里は何をか春のくれ

(雪丸げ)

行春にわかの浦にて追付たり

(箋の小文)

千じゆといふところにて舟をあがれば前途

○行はるや鳥啼——泊船集にも出づ。安達太郎根には下五「月に涙」

○行春を——泊船集には前書なくて出づ

○大比枝や——泊船集に「此句は翁の吟なるよしある人にきゝぬ實否はしらずしるしぬ」といつてゐる

三千里のおもひむねにふさがりて幻のちま

たに離別のなみだをそぐ

行はるや鳥啼うをの目は泪

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける

行春をあふみの人とおしみけり

なつちかし其口たばへ花の風

天文・地理

大比叡やしの字を引て一霞

大比枝やしを引すてし一かすみ

奈良に出る道のほど

(鳥の細道)

(猿蓑の奥)

(猿蓑)

(横山麓)

(江戸廣小路)

(泊船集)

○春なれや——泊明集・枕
かけ・宇陀法師にも出で句
形小文庫に同じ

○丈六に——小文庫・泊船
集にも出で、小文庫には伊
賀新大佛記あり。今略した
が笈の小文の本文と共に参
照すべし

○かげろふに佛——三冊子
に「丈六の」と二句作つて、
丈六の方に定めたところ

○かげろふの我肩に——こ
の句雪丸げには「元祿二仲
春略山旅宿にて」雪の薄に
「元祿二仲春」と前書して出
づ

○柴胡——さいこ、藥草。
糸とは芽出しの細いのをい
ふか。又原の書損じといふ
説もあり、芭蕉句選には「柴
胡の原の」とある

春なれや名もなき山の薄霞

(甲子吟行)

南良ごえ

春なれや名もなき山の朝がすみ

(小文庫)

枯芝やや、かげろふの一二寸

(笈の小文)

かれ芝やまだかげろふの一二寸

(泊船集野)

丈六にかげろふ高し石の上

(笈の小文)

そのとし阿波といふ所の大佛に詣して

丈六のかげろふ高し石の上

(笈日記)

かげろふに佛つくれ石のうへ

(三冊子)

かげろふの我肩にたつ紙衣哉

(伊達衣)

かげろふや柴胡の糸の薄曇

(泊船集)

室の八鳥

○奉納——熱田三歌仙には
「笠寺にて」と前書す。なほ
この句芭蕉句選拾遺には
「笠寺や簀ももらす五月雨」
とあり

糸遊に結つきたるけぶりかな
(尊九げ)
入かゝる日も糸ゆふの名残かな
(初九菰げ)

奉納

笠寺やもらぬ窟も春の雨
(熱田三歌仙)

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉
(夏の小文)

はる雨の木下にかゝる雫かな
(泊小船文)

春雨や蓬をのぼす艸の道
(草の道)

不性さやかき起されし春の雨
(猿蓑・泊船集)

春雨や蜂の巢つたふ屋ねの漏
(炭船集)

春雨や簀吹かえす川柳
(篠麥)

花の顔に晴うてしてや朧月
(鹽山井)

○凍解て——後出「露凍て」の句参照

芭蕉俳句集

○神垣や——この句笈の小文・笈日詠「おなじ春ならんなにがし寺に詣して」と支考の前書あり。泊船集「いせにて」と前書にも出づ

○ねはん會や——三冊子・芭蕉翁發句集に上五一「瀧佛や」

○水とりや——小文庫には「二月堂氷取」と題す。なほ芭蕉翁繪詞傳・芭蕉翁發句集等には中七「こもりの僧」とあり

○太裏雛——内裏雛の誤。この句芭蕉句選には下五「御字か」とよ

苔清水

凍とけて筆に汲干す清水哉

(小) 船文 集座

人事

二月吉日とて是橘が剃髮入醫門を賀す

はつむまに狐のそりし頭哉

(末) 船若 集葉

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像

(彌) 野

ねはん會や皺手合る珠數の音

(泊) 船若 集葉

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の杵の音

(甲) 子 吟 應行

太裏雛人形天皇の御宇とかや

(高) 江戸 廣小 集路

○草の戸も——笈日記には
なほ「今はまことにすまず
なりてかなし」と句の後に
記してある。又泊船集には
「深川の草庵を出たまふと
て」と前書す。なほこの句
中七芭蕉翁發句集に「住か
ゆる代ぞ」

○青柳の——この句は遠
衣・陸奥衛・泊船集にも出づ
○畑打——この句芭蕉翁全
傳には「荒木村白髭の社に
て」と前書あり

草の戸も住替る代ぞひなの家

(奥の細道)

むかし此叟の深川を出るとて此草庵を俗な
る人にゆづりて

草の戸も住かはる世や雛の家

(笈日記
船)

富花月

艸庵に桃櫻あり門人にキ角嵐雪有

兩の手に桃とさくらや草の餅

(桃
船の
實)

上巳

龍宮もけふの鹽路や土用干

(六百番發句會)

青柳の泥にしだるゝ鹽干かな

(炭
俵)

畑打音やあらしのさくら麻

(花
櫛)

午ノ年伊賀の山中

○猫のつま——無尾髭・み
つの顔にも出で共に上五
「猫の妻」とあり

○まとふどな——熱直なの
意

春興

種芋や花のさかりに賣ありく

（己が光）

種芋や花のさかりを賣ありく

（泊船集）

芋種や花の盛を賣ありく

（今日の昔）

芋種や花のさかりに賣ありく

（根無草）

摘けんや茶を風の秋ともしらで

（芭蕉東日遊記）

動物

猫のつまへついの崩よりかよひけり

（六百番終句合）

猫の戀へついの崩より通ひけり

（江戸廣小路）

まとふどな犬ふみつけて猫の戀

（茶の草子）

またふ人な犬ふみつけて猫の戀

（菊の道）

○妻めしに——泊船集にも
前書なくて出づ。又續鏡に
は中七「やつるゝ比か」とあ
り
○猫の戀やむとき——この
句泊船集・陸奥衛にも出づ

○鶯や柳の——この句浮世
北・泊船集・陸奥衛・亦深川
等にも出づ

○永き日も、原中や——こ
の二句續虛栗にも、琴集に
もつゞいて出てゐる。但し
琴集には前書なし

○原中や——この句なほ初
蟬・破曉集・一字幽蘭集等
にも出で、一字幽蘭集には
後土御門院の御製「なく雲
雀空をやおのが道芝に床を
しめても又あがる也」を附
記してある

田家に有て

妻めしにやつるゝ戀か猫の妻
猫の戀やむとき聞きこの朧月
己おのが光あかり

膳所へゆく人に

瀬かたがはの祭見て來よ瀬田のおく
鶯や柳のうしろ藪のまへ
鶯や餅に糞する椽の先

うぐひすや餅に屎する椽の上
うぐひすや餅に糞する椽の上

草庵を訪ける比
永き日も轉たらぬひばりかな
原中や物にもつかず鳴雲雀

草庵を訪ける比

永き日も轉たらぬひばりかな
原中や物にもつかず鳴雲雀

(續 妻)

(己が光)

(花の道)

(續 鶯)

(鶯や柳の)

(未若葉)

(泊船集)

(草庵を訪ける比)

(續 永き日)

(續 原中)

○永き日を——この句陸奥衛・泊船集にも出づ
○雲雀より——この句小文庫（栖去之辨）の文あり、今略す。卯辰集・泊船集にも出で句形端野に同じ

○楠邊——伊勢の地名。この地での吟といふだけの事である
○孟に——この句蝶姿・喪の名残・泊船集にも出で句形笈日記に同じ。但しいづれも「楠邊」の前書なし。なほ砂燕序文参照

題 二句

雲雀ふたつ

永き日を轉りたらぬ雲雀かな
雲雀より上にやすろふ峠かな

（笈日記）
（端野）

臍

峠多武峯より龍崎門へ鶴道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

（笈の小文）

楠邊

孟に泥な落しそむら燕
さゝづきにどろな落しそ飛燕
すゝぼりてごみ焼家に啼燕
壁土の家する木曾のつばめ哉

（笈日記）
（砂燕）
（芭蕉句選拾遺）
（芭蕉句選）
（端野）

高野にて

○父母の——此句箋の小文・新始・泊船集にも出づ

○蛇くふと——この句小文庫・陸奥衛・泊船集にも出で共に前書なし
○うつくしきかほかく——この句は其角の句

○雲とへだつ——芭蕉翁繪詞傳・芭蕉翁正傳・奥細道芭蕉抄等は皆冬扇一路の句形に同じ

父母のしきりに戀し雉子の聲

(晴野)

山居

蛇くふときけば恐ろし雉の聲

(翁道隱)

うつくしきかほかく雉のけ爪かなと申たれば

ば

蛇くふときけばおそろし雉の聲

(花摘)

ひばりなく中の拍子や雉子の聲

(猿蓑・奥衛)

雲とへだつ友かや雁の生き別れ

(冬扇一路)

遁世のとき

雲とへだつ友かや鴈の活わかれ

(もとの水)

東武に赴く時友達の時へ留別

雲と隔つ友にや雁の生わかれ

(芭蕉翁全傳)

芭蕉俳句集

○古巢只——葵集にも出で
 「隣庵の權宗波たびにおも
 わかれけるを」と前書あり
 ○白魚やとらば——芭蕉句
 選拾遺・芭蕉翁發句集に「白
 魚も取ば」
 ○明ぼのや——この句實は
 冬季の吟である
 ○おなじ比にや——この前
 書は支考の文

○雪薄し——笈日記に「此
 五文字いと口おしとて後
 に明ぼのともきこへ侍し」
 とある

○海上に云々——この詞書
 は木因の文章である

、雲とへだつ友かよ鴈の生別れ

(ばせを翁略傳)

雀子と聲鳴かはす鼠の巢

(泊船集)

桑門宗波行脚せんとたび立けるを送る

古巢只あはれなるべき隣かな

(續深川)

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき

(東日記)

明ぼのやしら魚しろきこと一寸

(甲子吟行)

曙や白魚のしろきこと一寸

(孤松)

おなじ比にや濱の地蔵に詣して

雪薄し白魚しろき事一寸

(笈日記)

海上に遊ぶ日は手づから蛤をひろふてしら

魚をすくふ逍遙船にあまりて地藏堂に書次

雪薄し白魚しろき事一寸

(續下文集)

○鮎の子の——この句續猿蓑・泊船集にも出で共に「留別」と題す

○山吹や——葛の松原に其角が山吹といふ五文字を風いた話が見える

○野中の日影——泊船集にはこの前書なし

桑名にて

雪薄し 鮎白きこと一寸

（熱田三歌仙）

常陸下向に江戸を出る時送りの人に

鮎の子の 白魚送る 別かな

（伊達衣）

蜆子の畫讃

白魚や 黒き目を明々法の網

（蘭雪・泊船集）

古池や 蛙飛こむ水のをと

（春の日・鮎含・泊船集）

古池や 蛙飛んだる水の音

（庵）

山吹や 蛙飛込水の音

（曉山集）

野中の日影

蝶の飛ばかり野中の日かけ哉

（蓑日集）

君や蝶我や莊子が夢心

（百歌仙）

○もろこしの——句選拾遺
に「貞元（貞享元年）莊子ノ
贅贅也」と註してある
○てふの羽の——句選拾遺
に「句集ニ作木亭にてト有」
と註す

○此梅に——泰納貳百韻の
發句

起よく我友にせんぬる胡蝶
物好^{スネ}や句はぬ草にとまる蝶

拜莊周尊像

蝶よく唐土の俳諧問

もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶

てふの羽の幾度越る塀のやね

袖よごすらん田螺の海士の隙をなみ

植物

盛なる梅にす手引風も哉

此梅に牛も初音と鳴つべし

我も神のひさうやあふぐ梅の花

（己が光・蝶姿）
（葉集・泊船集）

（京都二重曲）

（俳傳遺墨）

（芭蕉句選拾遺）

（芭蕉句選拾遺）

（芭蕉句選拾遺）

（鐘山井）

（江戸雨吟集）

（蘭連珠）

○るすにきて——芭蕉句選拾遺に「淺草或人の巻にて」と前書し、下五「垣根哉」○旅からす——鳥の道に「此句は翁いつの比の行脚にか伊賀の國にてとしの始にいへる句なり」と註し、又芭蕉翁全傳には「ある人のもとに屏風の畫を見て」とあり、この句なほ泊船集・四山集にも出づ

○梅白し——この句孤松集に「梅林」笈日記に「訪山隠」熱田三歌仙に「みやこにあそびて題秋風子之梅林」と前書して出づ。又花林燭（享保二年刊、秋風追善集）には「山家梅林にて」と題し秋風の題「杉菜に身磨る牛二ツ馬一ツ」の句出づ○忘るなよ——初蟬に「此句はある門人に遣れける也」と註す。なほ此句を勸進帳に漁父の作とするは誤である

あるひとのかくれがをたづね侍るにあるじは寺に詣でけるよしにてとし老たるおのこ獨庵をまもりぬけるかきほに梅さかりなりければこれなむあるじがほなりといひけるをかのおのこよそのかきほにてさぶらふと云をきゝて

るすにきて梅さへよそのかきほかな
旅がらす古巢はむめに成にけり

（葉集）

（鳥の道）

梅林

梅白し昨日や鶴をぬすまれし
忘るなよ藪の中なるむめの花

（甲子吟松）

（初蟬）

門人何がしみちのくに下るを馬のはなむけ
したまひて

忘るなよ藪の中なる梅の花

（泊船集）

○里の子等——茶集には「里梅」と前書し「さとのこよ」、芭蕉句選には「子供らよ」

○あこくその——句選拾遺に「貞五辰風菱方にて會の時也」と註す

○手鼻かむ——芭蕉句選拾遺に「同年（貞享五）山家と有當地、當地は伊賀上野也」と頭註あり

○菟藟の——小文庫に「いかなる事にやありけむ去來子へつかはすと有り」と前書がある

ひととせみやこの空にたび寝せしころみち
にて行脚の僧にしろ人になり侍るにこのは
るみちのおく見にゆくとてわが草庵をとひ
ければ

またもとへやぶの中なる梅花

里の子等梅折のこせ牛の鞭

あこくそのこゝろもしらず梅の花

手鼻かむ音さへ梅の匂ひ哉

手鼻かむをとさへ梅の盛哉

伊賀の城下にうにと云ものありわるくさき

香なり

香にゝほへうにほる岡の梅のはな

菟藟のさしみもすこし梅の花

（茶集）

（前後開）

（芭蕉句選拾遺）

（卯辰集）

（後の旅）

（有栖庵集）

（小文庫集）

○藤の本に「胡來亭」と前書あり。是は其父弘氏のゆへなり。此道の風流に名あるべしと記してある。
○御子良子の出づ。その本文を照すべし。

序のちれんわが此道に入らぬ初年は元禄二年の冬多きけの年如月かの翁きたり人曾良などひきまきたりむねは翁よろこびてげたりむねは翁よろこびてげたりほことをもろこびてやならざれば燈台の花まで時雨で残る句附てうればさやばに臨るの句附てうればさやば北の海といふ發物をさへしこへてあれいぞかしと言つて出てあはれな中七「奥米蕉翁發句集」にある

○梅若菜「乙州が江戸へ起るも出で」と前書せし（赴の韻）とき」と前書あり

○山里は「この句泊船樂・衆の名残にも出で又芭蕉翁金襴には『露木子の食』」と前書あり

續代民部雪堂に會

梅の木に猶やどり木や梅の花

(笈の小文)

網代民部の息に逢て

梅の木になをやどり木や梅の花

泊驥
船
集野

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もと床し梅の花

泊痕
船
集

のうれんの奥物ゆかし北の梅

(菊の塵)

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅

泊筵
船日
集記

餞乙勗東武行

梅若菜まりこの宿のとり汁

泊猿
船
集

山里は萬歳おそし梅の花

（雙
日
記）

○人も見ぬ——この句續後
 葉・陸奥衛・泊船集にも出づ
 ○春もや——この句續後
 葉・染川・泊船集・陸奥衛・千
 句・夏・月・淡雪・古渡集
 等にも出で、又枇杷園隨筆・
 白雄夜話によれば芭蕉の自
 筆讀で紅梅にこの句を讀し
 てゐる由である

○梅が香や——この句續後
 草稿(李自由筆)・忘れ梅・鮫
 櫓にも出づ

○うめがゝにのつと——こ
 の句笠日記(本文参照)・篇
 突・泊船集・梅櫻・芋頭等
 にも出づ

○梅が香に昔の——後の旅
 に句の後に「何某新八身ま
 かりける一周忌にち、梅丸
 がもとへ文通なりこれを見
 るに猶夢のごとくにして哀
 也」と書添へてある。なほ
 泊船集にはこの前書と共に
 新八一周忌のことを述べて
 ある

卓袋月待に

月まちや梅かたげ行小山伏

(芭蕉集・月待)

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

(己が光)

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

(芭蕉子)

梅が香やしらゝおちくぼ京太郎

(柿表紙)

むめがゝにのつと日の出る山路かな

(炭俵)

竹内一枝軒にて

世にゝほへ梅花一枝のみそさどい

(墨吉物題)

何某新八去年の春みまかりけるをちゝ梅丸

子もとへ申つかはし侍る

梅が香に昔の一字あはれ也

(笠日記)

一歳夢のごとくにして猶俳たちさらぬ歎の

○梅がゝや——續蓬菊に
「此句は楚舟亭におはした
る時始めてまみへたる人
に對してとのはし書有」と
記してある

ほどおもひやる計にい

梅が香にむかしの一字哀也

(後
旅の
集)

梅がゝや見ぬ世の人に御意を得る

(續
寒
菊)

むめが香に追もどさるゝ寒さかな

(菫
小
田)

梅咲てよろこぶ鳥のけしきかな

(芭蕉句選拾遺)

此杵の折と名付るものは上ツがたにめでさ
せたまひ目出度き扶桑の奇物となれり汝い
づれの山より生出て何國の里の賤が礎のか
たみ成ぞやむかしは横槌たり今は花入と呼
で貴人頭上の具に名を改といへり人またか
くのごとし高に居て驕るべからずひきゝに
有てうらむべからず唯世の中は横槌なるべ
し

此槌のむかし椿か梅の木か

(芭蕉句選拾遺)

○かぞへ來ぬ——一字幽蘭集に「杜甫 聞柳尋花到野亭」と註してある。この句なほ蘭蓀・泊船集にも出で共に前書なし

○はれ物に——小文庫に「此の句浪化子のありそ海にさはる柳のしなへかなと去來が書誤りて入集しはべるとて常に此ことをくやみぬるまゝこのつみでとなしぬ」とある。然るに字陀法師には「はれ物にさはる柳」の方を正しとし、先師自筆の短尺を證として小文庫を誤りだと難じてゐる

梅柳さぞ若衆哉女かな

(武藏類集曲)

緩歩

かぞへ來ぬ屋敷くの梅やなぎ

(二字幽蘭集)

餅雪をしら糸となす柳哉

(柳山井)

あち東風や面々さばき柳髪

(柳山井)

うぐひすを魂にねむるか嬌柳

(泊船類集)

吹度に蝶の居なをる柳哉

(わたまし抄)

はれ物にさはる柳のしなへかな

(有陀法師集)

はれ物に柳のさはるしなへかな

(小文庫)

八九間空で雨ふる柳哉

(木枯・綴集)

八九間空に雨降柳哉

(陸奥集)

春興

○最中の——泊船集に「さ
づれの集か咲みだすとあり
ぬ」と句の後に註してある
○初さくら——芭蕉句選拾
遺にも出で「貞五當庵藥師
寺月次會」と註す

春の雨いと静に降てやがて晴たる頃近き
あたりなる柳見に行けるに春光きよらか
なる中にもしたゝりいまだおやみなけれ
ば

八九間空で雨ふるやなぎかな
傘に押わけみたる柳かな
うぐひすの笠おとしたる椿哉
富士に行椿にかくれ家に出づ
落さまに水こぼしけり花椿
咲みだす桃の中よりはつ櫻
最中の桃の中よりはつさくら
菅社の邊藥師寺の會に
初さくら折しもけふは能日也

(花はさくら)

(炭俵・泊船
集・陸奥集)

(磯
泊船集)

(反故集)

(反故集)

(小文庫)

(泊船集)

(芭蕉翁傳)

○貝に似ぬ——この句續猿蓑・泊船集・記念題・四山集にも出で、又芭蕉翁全傳には「續猿蓑草稿吟味のころ句の仕かた人の情などの事土芳云ひ出て」と前書がある

貞に似ぬ發句も出よ初さくら (初 鰯)

姥櫻さくや老後の思ひ出 (佐夜中山)

初瀬にて人々花みけるに

うかれける人やはつ瀬の山さくら (續 山井)

いと櫻こやかへるさの足もつれ (續 山井)

風吹ば尾ほそうなるや犬櫻 (續 山井)

目の星や花をねがひの糸櫻 (千宜理記)

植る事子のどくせよ兒櫻 (續 連珠)

雨降ければ

草履の尻折てかへらん山櫻 (江戸蛇の鮒)

逢故人

命二つ中に生たる櫻哉 (孤 松)

○水口にて——熱田三歌仙には「二十年を経て古友に逢ふ」

○命ニツ——菊の香に「此句は貞享の作なり野ざらし記行に出づ其比の句初蛭にも數多出せり云々」と言つて句の時代をよく知らねば翁の變化流行の次第が分らぬことを論じて居る

○奈良七重——孫甘介我は「あやめ草」にこの句を才麿の作だと論じて居り、又續山井(寛文七年刊)にも「名所や奈良は七堂八重櫻如貞」の句が見える。しかし宇陀法師・古今抄等にも芭蕉の句としてあげてあるから今これに従つて採録した

○さま／＼の——泊船集には前書なく「此句故郷にてなるよし」と註す

○よし野にて——笈日記には「乾坤無住」と前書あり、その本文参照すべし

水口にて二十年を経て故人に逢ふ

命ニツの中に生たる櫻哉

(甲子吟行
熱田三歌仙)

水口にて廿年を経て故人にあふ

命ニツ中に活たる櫻哉

(菊の香
泊船集)

やまざくら瓦葺もの先ふたつ

(笈日記
泊船集)

山ざくら瓦葺もの先ふたつ

(芭蕉
芭蕉)

奈良七重七堂伽藍八重ざくら

(泊船集
宇陀法師)

おなじ年の春にや侍らむ

故主君蟬吟公の庭前にて

さま／＼の事おもひ出す櫻かな

(笈日記・笈の
小文・泊船集)

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せふぞ檜の木笠

(笈の小文
笈日記)

○木の下に——花端・泊船
集・木の本・古今類集等
は上五「木の下に」とあり、
浪花・龍火・陸奥・衡等は「本
の下は」とある

芳野山の花見んとて伊賀の國より旅立申さ
れしに尾州の杜國を同行にて筆をとりて檜
の木笠の裏に戯れられしとぞ

芳野にて櫻見せうぞ檜の木笠

(泊船集)

扇にて酒くむかげやちる櫻

(笈の小文)

扇子にて酒くむ花の木蔭かな

(駒さくら)

櫻がりきとくや日々に五里六里

(笈の小文)

山家

鶴の巢に嵐の外の外さくら哉

(鶴尾草)

鶴の巢にあらしの外の外さくらかな

(鶴尾草)

花見

木のもとに汁も鱈も櫻かな

(ひまこ)

○うらやまし——浮世の北には「是はばせを庵の規武の深川より越のしらねにおくり申されし奉納の句也」と書添へてある。なほ布遊かたの序文参照
 ○加州白山奉納——泊船集には「奉納」とだけ前書あり
 ○とし／＼や——芭蕉句選拾遺に「元四未三月廿三日大坂や次郎太事萬乎別墅さくら見一折有」と頭註あり

花見

木のもとには汁も喰も櫻かな

(渡し船)

似合しや豆の粉めしに櫻狩

(芭蕉句選拾遺)

うらやましうき世の北の山櫻

(北の山 浮世の北)

加州白山奉納

うらやましうき世の北の山櫻

(陸奥 泊船集)

萬乎が別墅一折

とし／＼や櫻をこやす花の塵

(芭蕉翁全傳)

聲よくは諷ふものをさくらちる

(初 便)

聲よくはうたはふものをさくら散

(砂 盤)

聲よくはうたはむものを櫻ちる

(鹿島紀行附録)

山さくら象戲の盤を片荷かな

(百歌仙)

○如意寶珠——「芭蕉庵春
秋」所引に據る

春風にふき出し笑ふ花も哉

（鑷山井）

花の本にて發句望れ侍て

花に明ぬなげきや我が哥袋

（鑷山井）

花にあかぬ嘆やこちのうたぶくろ

（如意寶珠）

宇知山

山邊郡

うち山や外様しらずの花盛

（大和順禮）

きても見よ甚べが羽折花ごろも

（貝おはひ）

先しるや宜竹が竹に花の雪

（江戸廣小路
六百番送句合）

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

（江戸蛇の峠）

盛じや花に坐浮法師ぬめり妻

（東日記）

上野にて

花に酔り羽織着てかたな指す女

（鑷深川）

○櫓の木——この句甲子
 時行・濱萩(短冊のうつしと
 して出してゐる)。後と秋・
 熱田三歌仙等にも出づ
 ○辛崎の——この句藤野・
 陸奥衛にも出で、共に前書
 なし。又泊船集には「湖水
 眺望」明和坂野面紀行には
 「大津尙白亭にて」と前書
 す。なほ雑談集の本文参照
 すべし
 ○観音の——末若葉に「か
 ねは上野か蓬草かと聞えし
 前の年の春の吟也尤病起の
 眺望成べし一聯二句の格也
 句を呼て句とす」と言つて
 ゐる。なほこの句下五芭蕉
 翁發句集には「花魁」

憂テハ方ニ知リ酒ノ聖ヲ 貧シテハ始テ覺ニ錢ノ神ヲ

花にうき世我酒白く食黒し

(建 船 集要)

山家

櫓の木の花にかまはぬ姿かな

(孤 松)

ある人の山家にいたりて

檀の木のはなにかまはぬすがた哉

(曠 野)

唐崎の松は花より朧かな

(曠 山 集松)

湖水の眺望

辛崎の松は花より朧にて

(甲子 吟行)

大津尙白亭にて

辛崎の松は花より朧にて

(雑 談 集)

観音のいらかみやりつ花の雲

(泊 末 船 集要)

○花咲て——芭蕉句選に
「鶴下りて七日花見るふも
とかな」

○花を吸ふ——笈日記に
「鶴も一夜はやどせ声の花」
の句と共に出て、「此二句も
阿叟の時なるよし、此ほと
り（榮名）漂泊の間なるべ
し」と記してある

○花の雲、鶴の巢も——二
句續虚栗につゞいて出てあ
る。なほ「花の雲」の句は泊
船集・今日の昔・陸奥衛・荻
集にも出で、共に前書なし
○蝙蝠も——西華集に「此
句はある僧の旅立けるにか
くいはずやと申されしが鶴
羽なくてよからんといは
ずなりぬ」と附記す
○いざ落花——芭蕉翁句解
參考に「法師の箆取たる畫
に」として「いざ落花眼裏の
埃掃捨む」とあり

三月廿日即興

花咲て七日鶴見る麓哉
華ざかり七日鶴見る麓かな

物皆自得

花にあそぶ蛇なくらひそ友雀
花を吸ふ蛇なくらひそ友すゞめ

草庵

花の雲鐘は上野か浅草敷
鶴の巢もみらるゝ花の葉越哉
蝙蝠も出よ浮世の華に鳥
いざ落花眼裏のほこりはらはせん

伊勢山田

(二橋・榮集)

(水の友)

(鶴の原)

(笈日記
集記)

(續虚栗)

(續虚栗)

(西華集)

(百歌集)

○何の木——笈日記・泊船集は句形名月集に同じく、笈日記には「西行のなみだをしたひ嬌賀の信をかなしむ」義蹟には「いせに詣てゝ西上人のなみたのあとをししたひ嬌賀聖のむかしをおもひて」と前書す。なほ花は櫻には笈の小文所出の形は初巻で、「何の木の花としらぬ句ひ哉」が再巻だとし、笈の小文の本文とはちがつた詞書がある。

○花を宿に——初巻に「此句はいが宗無亭にての吟なり」とある。又一巻編「桃青翁正傳記」には「飄竹庵にて」と前書あり。

○猶見たし——この句笈の小文・綴巻（葛城のふもとを過る）と前書。陸奥衛（かづらきの麓を過る）と前書。四季千句（葛城山の華過るに）と前書）にも出づ。

何の木の花とはしらず句哉

（笈の小文）

山行

何の木の花ともしらず句ひかな

（名月集）

伊勢御神前にて

何の木の花ともしれぬ句ひかな

（反故集）

花を宿にはじめ終りや廿日程

（初編）

宗無亭

花も宿にはじめ終りや廿日程

（泊船集）

かづらき山の麓を通り侍る比

猶見たし花に明行神の顔

（僧夫撰）

やまとの國を行脚して葛城山のふもとを過るに
よもの花はさかりにて峯くはかすみ

○さびしさや——この句體
奥衛・泊船集にも出づ

わたりたる明ぼののけしきいとど艶なるに
彼の神のみかたちあしと人の口さがなく
世にいひ傳へ待れば

猶見たし花に明行神の顔

(泊船集)

瀧門

龍門の花や上戸の土産にせん
酒のみに語らんかゝる瀧の花

(笈の小文)

(笈の小文)

あすは檜の木とかや谷の老木のいへる事あ
りきのふは夢と過てあすはいまだ來らずた
ゞ生前一樽のたのしみの外にあすは——と
いひくらし終に賢者のそしりをうけぬ

さびしさや華のあたりのあすならふ
日は花に暮てさびしやあすならふ

(笈日記)

(笈の小文)

芳野

芭蕉俳句集

○しばらくは——芭蕉句選
に「しばらくは花の色なる
月夜かな」

○花の陰——この句後醍醐・
雑談集にも出づ。なほ雑談
集参照すべし
○景清も——この句小文
庫・随興衛・泊船集にも出づ

○紙ぎぬの——この句泊船
集・一帽半にも出づ

花ざかり山は日ごろのあさぼらけ

(小) 泊船文庫

しばらくは花の上なる月夜かな

(初) 醍醐・後名
雑談・泊船集

しばらくは花の上行月夜哉

(不) 知翁

しばらくは花の上にも月夜哉

(河) 内羽二重

大和國草尾村にて

花の陰謠に似たる旅ねかな

(泊) 船集野

景清も花見の座には七兵衛

(翁) 草

かげ清も花見の座では七兵衛

(き) れく

路草亭

紙ぎぬのぬるともをらん雨の花

(笈) 日記

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉

(泊) 船集野

○橋木子云々——芭蕉句選拾遺に「橋木亭にて」と前置し、その下に「藤堂修理公ノ事トナン」と註してある

○洒落堂記——文章略す

橋木子の許にて

土手の松花や木深き殿作り

(芭蕉翁全傳)

洒落堂記

四方より花吹入てにほの波

(白鳥)

四方より花吹入て鳩の蝨

(卯辰集)

洒落堂の記 略之

四方より花吹入て湖うみの海

(泊船集)

四方より花吹入て湖の波

(瀧川の昔)

鐘消て花の香は撞ツク夕哉

(都曲)

いがの國花垣の庄はそのかみ南良の八重櫻
の料に附られけると云傳えはんべれば

一里はみな花守の子孫かや

(猿蓑集)

○一里は——句は字陀法師にも出づ

○此こゝろ——この句讀寒
菊にも出づ。なほ櫻山伏の
序文參照

路通がみちのくにおもむくに

くさまくらまことの華見しても來よ

(茶のさうし)

元祿壬申五月十五日東行ノ餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具

(葛の松原)

此心推せよ花に五器一具

(櫻山臥)

子に飽々と申す人には花もなし

(類柑子)

花を見る是もたぐひか鼠の巢

(佐郎山)

櫻をばなどねどころにせぬぞはなにねぬは

るの鳥のこゝろよ

花にねぬ此もたぐいか鼠の巢

(泊有船瀬集海)

花に寝ぬ是も類か鼠の巢

(藤の實)

肅山子のもとめ晝は探雪なり琴ト笙ト太鼓

○散花や——この句菊の香
(前書なし)・泊船集(この
句零ト太鼓ト笙トかきし繪
の賛也)と註す)にも出づ

○四つごきの——泊船集
(うへのゝ花 詞かきはす
みたはらにあり)と前書。
陸奥衛(東叡山)と前書)に
も出づ

○つもの毛の——此句のぼ
り鶴の序文中に見え「むか
し事吟房獨歩して三よしの
ゝおく山上伊勢鵜野をかけ
し時のなむけに云々」と
ある
○僧事吟餞別之詞——文章
略す

ト讃をのぞまれしに

散花や鳥もおどろく琴の塵

(末若葉)

露沾公にて

西行の菴もあらん花の庭

(泊船集)

うへのゝ花見にまかり侍しに人々幕打さ

はぎものゝ音小うたの聲さまなりけ

るかたはらの松かげをたのみて

四つごきのそろはぬ花見心哉

(良徳)

つるの毛のくろき衣や花の雪

(のぼり鶴)

僧事吟餞別之詞

鶴の毛の黒き衣や花の雲

(芭蕉句選拾遺)

蝶鳥のうはつきたつや花の雲

(そとりの松)

○花見にと——全傳本文參照

○らうさい——弄齋節。江戸時代の初め頃行はれた小唄の一種

○このほどを——此句兼虫庵小集に翁眞蹟の懷紙によりて出せり。又芭蕉翁全傳には「よし野へ旅たつ」と前書あり

○のみ明て——句選拾遺に「元四未尾張ノ人ヨリ淡酒一樽本會のうと茶一種得られしをひるむると門人集ての時のはいかい有」と頭註がある

花見にとさす舟遅し柳原

(芭蕉翁全傳
芭蕉句選拾遺)

世にさかる花にも念佛申けり

(芭蕉句選拾遺)

艶ナル奴今やう花にらうさいス

(木因宛手紙)

艶なるやつこ花見るや誰哥のさま

(芭蕉句選拾遺)

旅立日

このほどを花に禮いふわかれ哉

(芭蕉翁小集
芭蕉句選拾遺)

此比を花に禮言ふ別かな

(芭蕉翁吟百韻
杉風園吟百韻)

のみ明て花生にせん二升樽

(芭蕉句選拾遺)

二日酔ものは花のあるあいだ

(乳跡短冊)

花にいやよ世間口より風のくち

(乳跡短冊)

坦堂和尚を悼奉る

地にたふれ根により花のわかれかな

(花 燈)

○我衣に——初蟬に上五を誤つてゐるので、それを菊の香で更に訂正したのである

○煩へば——夜話狂に「是はばせを翁の句なるよしある人の仰せられしか」と註す。なほこの句芭蕉句選拾遺には中七「餅こそ喰はね」とあり

任口にあふて

我衣に伏見の桃の雫せよ

(狐 経)

伏見西岸寺任口上人に逢て

我がきぬにふしみの桃の雫せよ

(甲子吟行)

伏見西岸寺任口上人にあふて

われ來ぬにふしみの桃の雫せよ

(初 蟬)

ふしみの任口上人にあふて

我衣にふしみの桃の雫せよ

(菊の香)

鳴海潟眺望

船足も休む時あり濱の桃

(船 車 集)

わすらへば餅をも喰はず桃の花

(桃 盛 人)

煩へば餅をも喰はず桃の花

(夜 話 狂)

○草臥て——この句笈の小文にも出づ

○たはむ市——丹波市の誤

○ほろ／＼と——この句騷野・泊船集にも出で共に前書なし。なほ眞蹟自筆體には「きしの山吹とよみけむよしの／＼川かみこそみなやまふきなれしかも一重に咲こぼれてあはれにみえ侍るぞ櫻にもをさ／＼をとるましきや」と前書あり
○山ぶきや笠に——句選拾遺に「元四赤坂の庵にてノ吟也初ノ庵の時不性さの句同時也」と頭註せり。なほ全傳參照

大和行脚のとき

草臥て宿かる比や藤の花

（蕉 譜）

大和行脚のときにたはむ市とかやいふ處にて日の暮かゝりけるを藤の覺束なく咲こぼれけるを

草臥て宿かるころや藤の花

（泊船集）

西河

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音

（笠の小文）

晝讀

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

（蕉 船 集）

山ぶきや笠にさすべき枝の形

（芭蕉句選拾遺）

山吹の露菜の花のかこち顔なるや

（東日記）

○菜畑に——この句木枯し
 菜に「此句も畫賛なるよし」
 と註し、又國の華に「これ
 は大針といふ里の觀音堂奉
 納の句也」と註して出づ

○つゝいけて——熱田三
 歌仙には「旅店即興」と前書
 して出づ

菜畑に花見顔なる雀かな

(其 便)

吟行

菜畑に花見貌なる雀哉

(泊 船 集)

畫の休らひとて旅店に腰を懸て

つゝいけて其陰に干鱈さく女

(泊 船 集)

ひとり尼わら家すげなし白つゞじ

(芭蕉句選拾遺)

圓角扇ニ讃ヲ望テ

前髪もまだ若艸の匂ひかな

(翁 菖)

木曾の情雪や生ぬく春の草

(小 文 集)

草庵會

いも植て門は葎のわか葉哉

(笈の小文)

二乗軒

○藪椿、蓑さへ——泊船集
には二句共夏部に収む

○物の名を——泊船集には
夏部に出してある

藪椿門はむぐらの若葉哉

(後日集記)

此筋にのぞまれて茅屋の繪讃有

むぐらさへ若葉はやさし破れ家

(後の集)

茅舎の畫賛に

蓑さへ若葉やさしや破れ家

(泊船集)

龍尙舎

物の名を先とふ蘆のわか葉哉

(後の小文)

逢龍尙舎

物の名を先とふ荻の若葉哉

(後日集記)

李下芭蕉を送る

ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉

(龍深川)

花は賤のめにもみえけり鬼勘

(龍山井)

○大津に至る——泊船集に
「大津に出る」

○山路来て——この句新山
家・類柑子にも出で共に箱
根での吟として居る。又明
和版野廬紀行には上五「山
路にて」とある

○何とはなしに——蓬萊島
には「何とはなし」

○古畑や——この句響丸げ
にも出づ。又俳諧會我には
「古畑に」

大津に至る道山路をこえて

山路来て何やらゆかしすみれ草

(甲子 吟行)

二度草堂をいで尾陽に來るとき箱根にて

山路来て何やらゆかし堇艸

(鶴尾 冠)

白鳥山

何とはなしになにやら床し堇草

(藤箱物語
熱田三歌仙)

悼呂丸

當歸よりあはれは塚の堇草

(泊船
日船 記集)

古畑や薺摘行男ども

(柱磨・栗集)

よくみれば薺花さく垣ねかな

(頭陀
陀盧 錢葉)

人日

よもに打薺もしどろもどろ哉

(國深 川)

○まふくだ——山伏の類といふ。夫木集「まふくだが修行に出でしかた荷我こそぬれしこのかた荷」

一とせに一度つまると菜づなかな

(泊船集)

石川北鯤生のおとうと山店子我つれづれな
ぐさめんとて芹の食煮させてふかいはまで
持来る青泥坊庭の芹にやあらむと其世の伶
も今さらに覺ゆ

我ためか鶴はみのこす芹の飯

(續深川)

菩提山

此山のかなしさ告よ野老堀

(笈の小文)

菩提山

山寺のかなしさつげよ薺ほり

(笈の
船日記)

雪間より薄紫の芽獨活哉

(翁
草)

まふくだがはかまよそふかつくくし

(花
壁)

あさくさ千里がもとにて

○蛸よりは——芭蕉翁發句
集に「蛸よりも」

○こまかなる——葉集・
芭蕉翁清風集に「春雨や二
葉にもえる茄子種」

苔汁の手ぎは見せけり淺黄椀

（茶の草子）

老傭

蛸よりは海苔をば老の賣もせで

（續虛瑣）

衰や齒に喰あてし海苔の砂

（已が光）

おとろひや齒に喰あてし海苔の砂

（泊今日の昔
船の集）

嚙當る身のおとろひや苔の砂

（西の雲）

此種とおもひこなさじたうがらし

（かくれ里）

百歳子の宅にて歌仙の催

こまかなる雨や二葉の茄子種

（芭蕉翁全集
芭蕉翁遺稿集）

○思ひ出す——鐵箱物語の
本文参照

○奥州云々——芭蕉翁手鑑
には「藤中將さねかたのつ
かはみちより一里ばかり笠
島といふ處にありといへど
さみだれ降つゞきてみちも
いとあしければわりなくみ
過してとわりぬ かさじま
やいづこ五月のぬかり道」
泊船集には「奥州かさじま」
とあり

夏

時候

思ひ出す木曾や四月の櫻狩

(鐵箱物語)

木曾を経て武の深川へくだるとて

思ひ出す木曾や四月の櫻がり

(熱田三歌仙)

奥州名取の郡に入て中將實方の塚はいづく
にやと尋侍れば道より一里半ばかり左りの
方笠島といふ處に有とをしゆふりつゞきた
る五月雨いとわりなく打過るに

笠島やいづこ五月のぬかり道

(續 妻)

中將實方の塚はみちのく名取の郡笠島と云
所にて道より一里ばかり侍るといへど雨し

○目にかゝる——泊船集にも出で「富士」と題せり
 ○六月や——この句はなほ笈日記・或時集・佛の兄・泊船集等に見ゆ

○雪の鮎——續深川に「杉鼠が探茶庵に涼で」と前書有り
 ○水無月や——春草日記にも出で「かゝる鼠流の句は古今にわたりて人の飽まじき也云々」といふ長い説がついてゐる

きりにふりて日もくれかゝりければ

かさ島やいづこ五月のぬかり道

(卯辰集)

笠島はいづこさ月のぬかり道

(奥細道)

箱根の關越て

目にかゝる時やことさら五月富士

(芭蕉翁行狀記)

六月や峯に雲置あらし山

(句兄弟)

嵯峨に籠し比

六月や峯に雲をく嵐山

(陸奥藩)

雪の鮎左勝水無月の鯉

(虚栗)

水無月や鯛はあれども鹽くじら

(萬の松・泊船集・上六社)

みな月はふく病やみの暑さかな

(芭蕉句選拾遺)

晝は猶腹病や煩の暑さ哉

(瓜作・百歌仙)

○曇き日を——五八頁の「涼しきや海にいたる」の句参照

○夏の夜や崩て——笈日記に七二頁所出「飯あふぐ」の句の次に並び出づ。即ち曲翠亭での吟、なほ笈日記本文及び續綴蕉の今宵賦参照

○秋ちかき——この句ゆずり物・初蟬（本節亭にて）と前書・泊船集（大津木節亭）と前書にも出づ

○見馴河——大和國吉野郡

○尋ね——尋ねぬ

暑き日を海にいたり最上川

（奥の細道・島
の道・泊船集）

夏の夜や崩て明しひやし物

（笈日記・泊船
集・ゆずり物）

夏の夜や木魂に明る下駄の音

（續綴日記）

元禄七年六月廿一日大津木節庵にて

秋ちかき心の寄や四疊半

（島　の　道）

天文

五月雨に御物遠や月の良

（續山井
時世）

見馴河

五月雨も瀬ぶみ尋ね見馴河

（大和順禮）

五月雨や龍燈揚る番太郎

（江戸新道
六百番被合）

五月雨に鶴の足みじかくなれり

（東日記）

○笠寺や——千鳥掛に下五
「春の雨」

○自詠——句は笈日記・栞
集にも出でこの前書なし。
又眞蹟に「賓主自ヲ云」と
前書あり

○五月雨に鳩の——この句
栞集にも出で前書なし

○五月雨にかくれぬ——雑
談集・泊船集にも出づ。雑
談集の本文参照

○五月雨は——この句雪丸
げにも出でゐるが前書な
し。又安達太郎根には上五
「五月雨に」

尾州笠寺奉納

笠寺や 痛も もらず 五月雨

(芭蕉句集拾遺)

自詠

髪はえて 容顔蒼し 五月雨

(續
芭蕉句集)

露沾公に申侍る

五月雨に 鳩の 浮巢を 見に行む

(笈
日記)

五月雨に かくれぬものや 瀬田の 橋

(前
後 閑野)

須加川の驛より二里ばかりに石河の瀧とい
ふ有よし行てみん事を思ひ催し侍れどこの
ごろの雨にみかさはりて河を渡る事かなは
ずといひてやみければ

五月雨は 瀧降うづむみかさ哉

(信
夫 題)

兼て耳驚したる二堂開帳す

○五月雨のふり、五月雨を
——二句泊船集にも出づ

○五月雨を——雪丸げには
「大石田高野平左衛門亭に
て」と前書あり

○五月雨や——泊船集に
「袖の花にむかしを」の句と
並び出し、「二句の時月おな
じからずや」と附記せり
○五月雨や真——この句小
文庫・陸奥衛・泊船集・花廬
（正徳三年刊）にも下五は
「桑の煙」とあり

五月雨のふり残してや光堂

（奥の細道）

さみだれを集て早し最上川

（奥の細道）

五月雨を集て涼し最上川

（伊達雪丸げ）

日の道や葵傾くさ月あめ

（旅泊船集）

明日は落柿舎を出んにと名残おしかりけれ

ば奥口の間くを見廻りて

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

（嵯峨日記）

洒落堂頽破

五月雨や色紙へぎ^てたる壁の跡

（難説集）

落柿舎

五月雨や色紙まくれし壁の跡

（英日語）

五月雨や蠶わづらふ桑ばたけ

（蘇）

○五月雨や桶の——眞蹟に
「梅雨」と題し中七「桶の
輪きる」と。又芭蕉句解参考
に「五月雨や桶の輪きれる
夜の音」

○さみだれの——笈日記に
九八頁所出「もさはまだ」の
句の次に並び出づ
○すふ成——隠るなる

さみだれや蠶煩ふ桑の畑 (續 蕨 箋)

五月雨や桶の輪切る夜の聲 (二字斷句集)

大井川水出て島田塚本氏のもとにとどまり
て

さみだれの空吹おとせ大井川 (泊有 船磯 集 海)

さみだれの空吹おとせ大井川 (眞芭 蕉 集 翁)

島田には塚本氏杉本氏などいひて久敷音信
馴し方あればとておぼつかなき五月の空を
はらす

五月雨や雲吹落す大井川 (芭蕉翁行狀記)

さみだれの雲吹おとせ大井川 (笈 日 記)

降音や耳もすふ成梅の雨 (園 山 井)

月山

○雲の峯——この句集の香
 (月)の山にて(下前書)・泊
 船集(月山にて)と前書)に
 も出づ

○本間氏云々——寧院自筆
 句集には「本間丹野に一曲
 を所望して」と前書す

○ひら／＼と——笈日記に
 は次に「運の雲に目をかよ
 はすや面の鼻」の句あり、
 前書は二句に通ず。なほこ
 の句泊船集には「大津丹野
 亭」と前書し句形は笈日記
 に同じ。又篇突にも出づ、
 その本文参照すべし

○湖や——笈日記に「納涼
 二句」として「ささ波や風
 の薫の相拍子」の次に出て
 ゐるから、やはり游刀亭で
 の吟である

雲の峯いくつ崩れて月の山

(花の細道)

本間氏主馬が亭にまねかれしに太夫が家名

を稱して吟草 二句

ひら／＼とあぐる扇や雲の峯

(笈日記)

ひら／＼と上る扇や雲の峯

(鈴草)

本間丹野が家の舞臺にて

ひら／＼とあがる扇や雲のみね

(桃盛)

湖やあつさをおしむ雲のみね

(笈日記 泊船集)

盛信亭にて

風の香も南に近し最上川

(登丸)

有難や雪をかほらす南谷

(奥の細道)

南谷にて

○有難や——花摘廿八日の
條に「此日閑に飽て雲行脚
の折ふし羽黒山於木坊興行
の歌仙をひらく、元祿二年
六月にや」と前書して歌仙
一卷を掲げてある

○羽織は——芭蕉句選に
「はたりや」

○さゞ波や——次に前出の
「湖やあつさをおしむ」の句
あり

有がたや雪を薫らす南谷 (小 弓)

有難や雪をめぐらす風の音 (花 摘)

元祿二六月四日羽黒山本坊におゐて興行

有がたや雪を薫らす風の音 (雪 丸 げ)

丈山之像調

風かほる羽織は襟もつくろはず (小 船 文 庫)

去年の夏又此ほとりに遊吟して游刀亭にあ
そぶとて

納涼二句

さゞ波や風の薫の相拍子 (芭 蕉 船 日 集 記)

小倉山院

松杉をほめてや風のかほる音 (芭 蕉 船 日 集 記)

文鱗生出山の御かたちを送りけるを安置し

芭蕉俳句集

○十八樓ノ記——今日の昔にもその異同あるは、「國て、加島氏、西に重りて、松の一むら、西湖」の數字にすぎぬ。なほ文は本朝文選・蓬萊島にも收む。句のみは泊船集にも出づ

○南もほとけ——句の次に「くだれる世にもと云けむ断りなれや」とある

て

南もほとけ草のうてなも涼しかれ

(續) 涼川

河邊眺望

此あたりに目に見ゆるものみなすゞし

(續) 後集

十八樓ノ記

みのゝ國ながら川に望て水樓ありあるじを賀島氏といふいなば山後にたかく亂山兩に重りてちかゝらず遠からずたなかの寺は杉の一村にかくれきしにそふ民家は竹のかこみのみどりも深しさらし布所く引はえて右にわたし舟うかぶ里人の行かひしげく漁村軒をならべて網をひき釣をたるゝをのがさまゝもたゞ此樓をもてなすに似たり暮がたき夏の日もわするゝ計入日の影も月にかはりて波にむすぼるゝかゞり火の影も

○兩湖——西湖の誤

○ねまる——居るといふ意
の奥羽北陸方言（物類稱呼）○涼しさや海に——泊船集
にも出で前書なし。又雪丸
げには「六月十五日寺島彦
介にて」と前書あり。なほ
五一頁「曇き日を海に」の句
参照

やゝちかく高欄のもとに鵜飼するなど誠に
めざましき見ものなりけらし彼瀟湘の八の
ながめ兩湖の十のさかひも涼風一味のうち
に思ひためたり若此樓に名をいはむとなら
ば十八樓ともいはまほしや

此あたり目に見ゆるものは皆涼し
涼しさを我宿にしてねまる也

尾花澤清風亭にて

すゞしさを我宿にしてねまるなり
涼しさやほの三か月の羽黒山

安種亭より袖の浦を見渡して

涼しさや海にいれたる最上川
汐越や鶴はぎぬれて海涼し

（笈日の記）
今日の日記

（奥の細道）
奥の細道

（病の音・初編）
泊船集

（奥の細道）
三日月日記

（蘆尾集）
蘆尾集

（奥の細道）
類子

○腰長や——泊船集・字陀法師にもこの句形で出てゐる

○海士が家——芭蕉翁發句集・「葉集に「葦が軒」

○涼しさは——笈日記に「世を旅に代かく」の句の次に出でゐる

○雪芝亭——「故郷蘇百回忌」(寛政五年刊)に吳川の句の詞書として「わか祖父雪芝亭に松栽させける時に蕉翁のおはして、涼しさや直に野松の枝の形と吟じ給ひしも元祿七年にして遷化ありし年を同じうし既に百年になれどいまも亭々と軒端に高し。をのづから野松の家と人もいへり」とある

腰長や鶴脛ぬれて海涼し

(春草日記集)

西濱

小鯛さす柳涼しや海士が家

(巻九げ)

閑居をおもひ立ける人のもとに行て

涼しさはさし圖に見ゆる住居哉

(笈日記集)

野水亭にて

涼しさは指圖にも知住居哉

(春草日記)

尾州野水新宅

涼しさを飛驒のたくみが指圖哉

(陸奥衛)

雪芝亭

涼しさや直に野松の枝の形

(笈日記集)

すどしさを繪にうつしけり嵯峨の竹

(墨吉物語)

○夏の月——句選年考所引により「向之圓」を出所とす。この句芭蕉翁發句集には下五「赤坂か」

○蛸壺や——此句陸奥衛・四山集にも出で共に前書なし。又泊船集には「あかしの夜泊」と題して出づ

野明亭

すゞしさを繪にうつし鳧嵯峨の竹

(泊船集)

うら見せて涼しき瀧の心哉

(俳太郎)

松風の落葉か水のをと涼し

(芭蕉句選拾遺)

夏の月御油より出て赤坂や

(向之圓)

御油を出て赤坂までや夏の月

(夏の月)

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

(猿蓑の小文)

須磨

月はあれど留主のやう也須磨の夏

(笠の小文)

卯月の中比須磨の浦一見すうしろの山は青
ばにうるはしく月はいまだおぼろにてはる

○清瀧や——陸奥衛には
「嵯峨に籠し比」と前番して
五〇頁の「六月や峯に雲お
く」の句の次に並び出づ。
なほ一〇一頁「清瀧や波に
散込ム」の句参照すべし

の名残もあはれながらたゞ此浦のまことは
秋をむねとするにや心にもものゝたらぬけし
きあれば

夏はあれど留主のやう也須磨の月
月見ても物たらはすや須磨の夏

(芭蕉
談集)

すま

月を見ても物たらはすや須磨の夏
手を打ば木魂に明る夏月

(小文庫・泊
船集・花の雲)

嵯峨に籠りて

清瀧や浪に塵なき夏の月
大井川浪に塵なし夏の月

(其奥
衛便)
(笈日
記)

地理

さゞれ蟬足はひのぼる清水哉

(續 虛 題)

岐阜山にて

城あとや古井の清水先問む

(笈 治 日 集 記)

那須温泉

湯をむすぶちかひもおなじ岩清水

(陸 奥 集 街 泊)

温泉大明神の拜殿に八幡宮を移し奉りて兩

神一方に拜れ給ふ

湯をむすぶちかひもおなじ石清水

(雪 丸 げ)

結ぶより早齒にひゞく泉かな

(郡 曲)

夏山に足駄を拜む首途哉

(奥の細道)

畫 讚

かさ着て馬に乗たる坊主はいづれの境より
出て何をむさぼりありくにやこのぬしのい

○馬ほくく——水の方に
 「此句泊船集に冬野哉とあ
 やまれるゆへこゝにしろ
 す」と註し、泊船集にも「こ
 の句夏野かなともある人申
 されし」と書添へてある。
 なほ一葉集所載の歌仙には
 「夏馬の運行我を繪に見る
 心かな」とある

へる是は予が旅のすがたを寫せりとかやさ
 ればこそ三界流浪のもゝ尻おちてあやまち
 することなかれ

馬ほくく——我をゑに見る夏野哉

(永の友)

馬ほくく——我を繪にみる枯野かな

(泊船集)

その比ならん落梧のぬしおさなき者を失へ
 る哀をいたみて

もろき人にたとへむ花も夏野哉

(芭蕉
船日記
集記)

陸奥にくだらむとして下野國まで旅立ける
 に那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを
 尋て深き野を分人る程に道もまがふばかり
 草ふかければ

秣負ふ人を枝折の夏野哉

(芭蕉
船集
集荷)

松島は好風扶桑第一の景とかや古今の人の

○しまぐや——句解參考
に中七「千く」に碎けて。
一串抄「松島や千々に碎て
夏の海」

○一つぬひで後に——芭蕉
翁眞蹟集に「行脚のころ」と
前書す。この句なほ瞻野・
秋津島・前後園・泊船集に出
づ

○一つ脱てせなに——小文
庫に「前書されて見えず」と
前書がある

風情この島より思ひをよせてこゝろを盡し
たくみをめぐらすおよそ海のおも三里計に
てしまぐの島々奇曲天工の妙を刻みなせ
るがごとくおのく松生しげりうるはしさ
花やかさはいはんかたなし

しまぐや千くにくだきて夏の海

(芭蕉句選吟)

人事

一ツぬひで後に負けぬ衣がへ

(夏の小文)

旅行

一つ脱てうしろにおひぬ衣更

(續別座敷)

一つ脱てせなに負けり衣がへ

(小文庫)

奈良にて

○粽結ふ——この句蓮の
實・陸奥衛・泊船集等にも出
で泊船集には「物がたりの
すがたも一集にはあるべき
ものとして去來が穢みのに還
はされしよし給はりぬ」と
附記し、三冊子にも同様の
事を記してある

○田一枚、風流の——二句
泊船集に「奥州しら河の關
こえて」と前書して出づ

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉

(陸奥・泊船集
箋の本文)

うらみの瀧にて

しばらくは瀧に籠るや夏の始

(奥の細道)

笈も太刀も五月にかざれ帟幟

(奥の細道)

端午

あすは粽難波の枯葉夢なれや

(六百番終句合)

粽結ふかた手にはさむ額髪

(猿蓑)

清水ながるゝのやなぎはあし野々さとに有
て田の畔に残る此所の郡司戸部某の此柳見
せばやなど折く／＼の給ひ聞へたまふをい
づくの程にやと思しをけふ此柳の蔭にこそ
立寄侍りつれ

田一枚うへてたちさる柳かな

(奥の細道)

○風流の——此句なほ猿蓑に「しら川の關こえて」陸奥衛に「須ヶ川等躬興行」と前書して出づ

○世の旅に——此句なほ香草日記には「荷分亭にて」、今日の昔には「なごやにて」芭蕉翁行狀記には「名護屋にて」、泊船集には「尾州に入ての吟とかや」と前書ありて出づ

風流の初やおくの田植うた

(奥の細道)

みちのくの名所く心におもひこめて先關屋の跡なつかしきまゝにふるみちにかゝりていまの白河も越えぬ頼ていはせの郡にいたりて乍單齋等躬子の芳扉を扣彼陽關を出て故人に逢なるべし

風流のはじめや奥の田植哥

(信夫漫)

いぬの夏荷兮亭

世を旅に代かく小田の行戻り

(ゆずり物)

去年元祿七年前の五月なるべし尾張の國に入て舊交の人くゝに對す

世を旅にしろかく小田の行戻り

(笠日記)

行くて尾州荷兮が宅に汗を入

世を旅に代かく小田の行戻り

(隱奥)

○柴つけし——芭蕉句選拾遺にも出で「元七戊辰田氏に遊ての事也」と註してある

○西か東か——雪丸げには「白川關」と前書して出づ

○早苗にも——雪丸げにも出で前書なし

○早苗とる——小文庫には文字摺石の文が句の前にあり、奥の細道の本文とは多少異同がある。今その文略す

猿雖宅にて

柴つけし馬のもどりや田うへ樽

(芭蕉翁全集)

岱水亭影待に

雨折く思ふ事なき早苗哉

(木曾の猿)

しら河の關をこゆるとてふるみちをたどるまゝに

西か東か先早苗にも風の音

(信夫摺)

奥州今のしら河に出る

早苗にもわがいろ黒き日數哉

(泊船集)

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

(奥の細道)

しのぶもぢずりの石はみちのくふくしまの驛にありて往來の人の麥くさを取てこのいしをこゝろみけるを里びとも心うくおも

○もち摺石は——この前書
花の曇も全く同じく、只「誠
に風流の」だけ異なる

○手ばなせば——「送別」と
題してある
○おなじ所にて——此句の
前に「岐阜にて おもしろ
うさうしさばくる 鶴岡哉
貞室」の句がある。泊船集
には「岐阜にて」と前書す

ひて此谷にまろはし落しぬ石の面はしたさ
まにふしたれば今はさるわざする事もなく
風雅の昔にかはれるをなげきて

早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺

(卯屋集)

もち摺石はふくしまの驛東一里ばかりに山
口と云處に有さと人のいひ傳へ侍るは往來
の人の此石試むと麥草をあらし侍るをにく
みて此谷に落し入侍るよし今はちがやの中
に埋れて石の面は下さまになり侍るとかや
誠風流のむかしにおとり侍るぞいとほいな
く覺侍る

早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺

(花綱の代筆)

手ばなせば夕風やどる早苗哉

(俳諧古選)

五月乙女にしかた望まんしのぶ摺

(雪丸の奥細道拾遺)

おなじ所にて

○面白て——この句なほ青
 蘼・渡し舟・初蟬(上五を、お
 もしろう)と誤り出したの
 で更に菊の香で「面白うて」
 と直してゐる(雀の森(美
 濃岐阜にて)と前書す)等
 にも出づ

○面白うてやがてなかるゝ
 —菊の香に「此句晋子が
 所持の翁の自筆には」とあ
 つて前句と別にあげてあ
 る。「なかるゝ」は「泣かる
 ゝ」か

○千子——去來の妹。元祿
 元年五月歿

○かけて置——句選拾遺に
 「松舟園書」有」と頭註あり
 ○風流亭——奥細道拾遺に
 は「新庄風流亭にて」

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉

(續 船 集野)

鵜舟も通り過る程に歸るとて

面白てやがてかなしき鵜ぶね哉

(箋 日 記)

おもしろくてやがてかなしき鵜飼哉

(蘭 立 案 内 志 加 志)

面白うてやがてなかるゝ鵜ぶねかな

(菊 の 香)

千子が身まかりけるをきゝてみのゝ國より

去來がもとへ申つかはし侍ける

無き人の小袖も今や土用干

(蕉 詩・泊船集)

かけて置拂子は智慧の土用ぼし

(芭蕉句選拾遺)

風流亭

水の奥氷室たづぬる柳哉

(巻 九 げ)

さ夜の中山にて

○百里來たる——句選拾遺
に「元二山岸半殘」歌仙
有」と頭註せり

芭蕉 俳句
○忘れずば——西宮紀行に
「芭蕉翁をとし子に戯し
て」とある。又泊船集に「風
濕を睡別ス」と前書して出
づ

芭蕉 俳句
○唐破風の——芭蕉句解に
は「唐破風や日影かげろふ
夕すゞみ」とあり

○瓜作る——芭蕉句選拾遺
にも出で前書なし
○あつみ山や——寛永九げに
「出羽酒田の湊伊東不玉亭
にて」泊船集に「淵庵不玉
亭」と前書あり

命也わづかの笠の下すゞみ

（芭蕉集全傳）

山岸半殘が會

百里來たりほどは雲井の下涼し

（芭蕉集全傳）

百里來たるほどは雲井の下涼し

（芭蕉句選拾遺）

忘れずば佐夜の中山にて涼め

（西宮紀行）

破風口に日影やよはる夕涼

（三日月日記）

唐破風の入日や蒔き夕涼

（流川集）

すみける人外にかくれてむぐら生しげる古

跡をとひて

瓜作る君かあれなと夕すゞみ

（芭蕉集）

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

（東海道・泊船集・松尾芭蕉）

江上之晩望

○ゆふばれや——陸奥衛に
は「西行さくら」と題し、雪
丸げには前書なく句のみ出
づ

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

(遠尾集)

淵菴不玉亭にて

あつみ山や福浦かけてゆふ涼み

(鳥の道)

あつみ山吹浦かけて夕すゞみ

(類詠
柑
子寒)

西行樓

西行法師

へ象潟の樓はなみに埋れてはなの上こ

ぐ蜚のつり船

花の上漕とよみ給ひけむ古き櫻もいまだ蜚

満寺のしりへに残りて陰波を浸せる夕晴

いと涼しかりければ

ゆふばれや櫻に涼む波の花

(遠
尾
集)

四條の川原すゞみとて夕月夜のころより有
明過る比まで川中に床をならべて夜すがら
さけのみのくひあそぶをんなは帯のむす

○いかめしく——泊船集に
「いかめしく」とある、「い
まめかしく」の誤か

○飯あふぐ——此句水がら
し集・泊船集にも出で前書
なし

○晝寐の臺や——芭蕉翁發
句集に「晝寝のごさや」

○鐘鈴——頭陀袋に「芭蕉
翁に此句をたづねしに御笑
候程に扱は御句かといひ傳
へ侍る」と記してある

びめいかめしくおとこは羽織ながう着なし
て法師老人ともに交補やかぢやのでしこま
でいとまえばほにうたひのゝしるさすがに
都の氣しきなるべし

川かぜや薄がききたる夕すゞみ

(己) 船が 集光

四條河原涼

川風や薄柿着たる夕涼み

(卯) 辰 集

曲翠亭にあそぶとて田家といへる題を置て

飯あふぐかゝが馳走や夕涼

(亥) 日 肥

皿鉢もほのかに闇の宵涼み

(其) 木 が ら し 便

晋の淵明をうらやむ

窓形に晝寐の臺や、簾

(癸) 船 猿 集

簾喰ふたる坊主哉

(癸) 陀 袋

○翻もて——桃紙に「是は盤新法師みづから背向の像をかきて世の中をうしろになして山里にそむきはてゝや蟻のころもでと待るを見て殊勝さにかくいへる也」と附記す。なほこの事葉虫庵小集にも見ゆ

○團扇とつて——三冊子に「此句集どもうちわもてと五文字して下の五文字後むきせなかつきと有後改るかこの句盤繁の後むきの像の譬也」とある

盤齋背むきの像

團もてあふがん人の背つき

(笈日集記)

起倒子が許にて盤齋老人のうしろむける自

畫の像に

團扇もてあふがむ人のうしろつき

(數箱物語)

團もてあふがん人のうしろむき

(桃紙葉虫庵小集)

團扇とつてあふがん人の後むき

(三冊子)

伊賀の高畑氏市隱亭にて

富士の風や扇に載て江戸みやげ

(芭蕉集全傳)

近江蚊屋汗やさゞ波夜の床

(六百番狂句合)

無常哉脂燭の烟破れ蚊屋

(平澤氏短冊帖)

秋鴉主人の佳景に對す

○夏衣——翁草には「旅行」と題す

○別ればや——句解參考に「習邪」と題し上五は「別るゝや」とあるのが正しいと説いてゐる

○清瀧の——泊船集に「清瀧や波にちりこむ青松葉」の次に「清瀧の水くませてやとこてんとありしは野明に引きすすてさせたまふ笠日記に水くみよせてといふはあやまりなるよし」とある

山も庭もうごき入るや夏坐敷 (雪丸 げ)

卯月の末庵に旅のつかれをはらすほどに

夏衣いまだ虱をとりつくさす (甲子 吟行)

卯月のはじめ庵に歸りて旅のつかれをはらす程に

す程に

なつ衣いまだ虱を取つくさす (小文 庫)

別ればや笠手に提て夏羽織 (白 馬)

青ざしや草餅の穂に出つらん (泊船 集)

野明亭

清瀧の水波よせてとこてん (笠 日記)

清瀧の水くませてやとこてん (泊船 集)

不卜亡母追悼

芭蕉俳句集

○ふらずとも——陸奥衛にも出で、前書なし。笈日記には「是は五月の節をいへるにやいと珍し」と註してゐる。又水の友（享保九年刊、正秀退善集）によればこの句で竹青堂（正秀）の稱號を祝したとある。

○おなじく——前の句に「養替」と題してある。なほ木がらしに「此句より竹うゆる日の季と成しも翁の晩作也」と註してある。

水むけて跡とひたまへ道明寺

（江戸廣小路）

畫^テ竹自讃

ふらずとも竹植る日は養と笠

（末若郷）

畫讃

竹 木因亭

降すとも竹植る日は養と笠

（笈日記）

おなじく

降らずとも竹植る日や養と笠

（木がらし）

竹酔日

ふらずとも竹植る日は養と笠

（泊船集）

動物

芭蕉俳句集

○鎌倉を——この句一字幽
 蘭集・陸奥衛・泊船集・寄延
 にも出で皆葛の松原と同じ
 形である

奈良にて故人に別る

二俣にわかれ初けり鹿の角

(讀
船
集)

舊友に奈良にてわかる

鹿の角先一節のわかれかな

(笈の小文)

經賣いかなる人を酔すらん

(泊
船
集)

鎌倉をいきて出けん初經

(萬の松原)

かまくらは活て出けむはつかつほ

(芭蕉乳頭集
頼相子)

美濃、國にて辰のとし

またたぐひ長良の川の鮎鱈

(己が光)

貞享五年夏日

○あへる——おへるの誤

名にしあへる鵜飼といふものを見侍らむと
 て暮かけていざなひ申されしに人々稲葉
 山の木かげに席をまうけ盃をあげて

○今は——「蕉集に「いまだ」

○郭公まねくか——この句武藏曲・初蟬「まねくや」と誤り出したので世に「菊の香」で「まねくか」と訂してゐる。泊船集等に出で、又

のぼり鶴には「自盡讃」と題して「右翁所持の文巻にあり承々して朝更家にかへす」と註してある

○郭公なき——「蕉集には「ほとゝぎすなく」とぶぞいそがはし」

又やたぐひ長良の川の鮎なます
〔芭蕉 船日集記〕

岩躑躅染る泪やほとゝぎす
〔續山井〕

しばしまもまつやほとゝぎす千年
〔續山井〕

またぬのに菜賣は來たが時鳥
〔六百番後句合〕

ほとゝぎす今は俳諧師なき世哉
〔萬島紀行附錄〕

郭公まねくか麥のむら尾花
〔後雙六・蕉集〕

清く聞ゝ耳に香焼て郭公
〔虛藥・泊船集〕

ほとゝぎす正月は梅の花咲り
〔虛藥〕

時鳥むつきは梅の花さけり
〔芭蕉翁其蹟集〕

郭公正月は梅の花ざかり
〔泊船集〕

郭公なき——飛ぞ鬧はし
〔泊船集〕

さし棹書たる扇に

○須磨のあまの——泊船集
に「此詞書は須磨紀行に見え侍る是は須磨の妻の處、鳥を追とて矢を放ちけるに源平のむかしもおもはれて時じたまふなりけり」と附記してある

○きえ行方や——泊船集に
「聞行かたや」と誤り出す

○高久角左衛門云——
「もゝ上草」には「みちのく一見の桑門同行二人那須の篠原をたづねて殺生石みんと急ぎ侍る程にあめ降出ければ先此處にとゞまり候」
「雪の藩」には「下野國高久角左衛門宅にてみちのく一見の……殺生石見んと急侍る程に……留り候」

鳥さしも竿や捨てんほとゝぎす (千鳥掛)

須磨のあまの矢先に鳴か郭公 (笈の小文)

須磨の蟹の矢さきに啼や郭公 (泊船集)

ほとゝぎす消行方や島一ツ (笈の小文)

あかし

ほとゝぎすきえ行方や鳥ひとつ (小文庫)

日光山に上りうらみの瀧にて

郭公うらみの瀧のうらおもて (今とりの愁)

ほとゝぎすうらみの瀧のうらおもて (俳諧管我)

高久角左衛門に宿るみちのく一見の桑門同行二人那須の篠原を尋て猶殺生石見んとこへける程に雨降ければ先このところに留て

落くるやたかくの宿のほとゝぎす (雪九げ)

○田や麥や中にも夏の時鳥」
「田や麥や中にも夏の時鳥」

○野を横に——この句、
蕉・露突・泊船集等にも出で
又勸進帳に「奈須のゝはら
にて」、陸奥衛に「行旅」と前
書あり

○京に居て——反故集・廣
野集・泊船集等の句形は
一字幽蘭集に同じ

田や麥や中にも夏のほとゝぎす

(雪丸
奥細道拾遺)

麥や田や中にも夏はほとゝぎす

(もゝ上草)

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

(奥細道)

橘やいつの野中の郭公

(卯辰集)

ほとゝぎす大竹籜をもる月夜

(嵯峨日記)

ほとゝぎす大竹原を漏る月夜

(笈
泊然日記集)

落柿舎閑居 嵯峨日記に見えたり

ほとゝぎす大竹籜をもる月ぞ

(小父庫)

京にても京なつかしやほとゝぎす

(己
陸奥衛光)

旅寓

京に居て京なつかしや時鳥

(一字幽蘭集)

寄夏艸一

○時鳥啼や——陸奥衛・泊船集にも出で前書なし

○杜鵑鳴音や——泊船集には「ある人の一周忌に」と前書して出づ

○郭公聲横たふや——この句をいろ／＼に案じた事について、筑日記所載菊口宛の芭蕉の手紙を参照すべし。また露突にも兩句の論がある

芭蕉俳句集

○木がくれて——この句泊船集・陸奥衛・露突にも出づ

時鳥啼や五尺のあやめ草

(伊 達 衣)

不卜一周忌琴風興行

杜鵑鳴音や古き硯ばこ

(陸 奥 衛)

郭公聲横たふや水の上

(蘆の實・泊船集・千句塚)

深川

題鵑聲や横とふ水の上

(陸 奥 衛)

一聲の江に横ふやほとゝぎす

(筑日記 突肥)

ほとゝぎす横たふ聲や水の上

(翁 興)

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

(炭 俣)

烏賊賣の聲まぎらはし杜宇

(韻藻・泊船集)

あけぼのやまだ朔日にほとゝぎす

(芭蕉句選拾遺)

竹の間のいばら見せしやほとゝぎす

(破壁宛手紙)

○うき我を——草庵集に
「此句あまたの集に見へ侍
れど自筆にてかく前書の有
を見侍しなり」と附記す。
なほこの句續養・泊船集・篇
突にも出づ

○うぐひすや——この句別
續養・陸奥衛・泊船集にも出
で、又枯尾花に「四度び結
びつる深川の鹿を又立出る
とて」としてこの句を影け
てある

○白川に云々——雪丸げに
はこの前書なく下五「問ふ
ものを」

○おなじ津——大津

西行のよめる

山ざとにこは又たれをよぶこ鳥ひとりす
まんと思ひしものを

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

(草庵集)

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

(續養日記)

伊勢の國長島大智院に信宿す

うきわれをさびしがらせよ秋の寺

(眞蹟)

うぐひすや竹の子簾に老を鳴

(巖谷)

能なしの寝たし我をぎやうくし

(續養日記)

白川に住何云へ文をつかはすはしに

關守の宿を水鶏にとはふもの

(伊達衣)

おなじ津なりける湖仙亭に行て

此宿は水雞もしらぬ扉かな

(芭蕉日記)

○水鶏なくと——この句ゆ
ずり物・四山集にも出で、
ゆずり物には「戊の五月隱
士山田氏の亭にとめられ
て」と前書あり

○此境云々——後れ馳には
「須磨にて」と前書す。陸奥
衛・泊船集には全く前書な
し

湖仙亭にて

此宿は水鶏もしらぬとぼそ哉

(新代笠)

露川が等さやまで道おくりて共にかりねす

水鶏なくと人のいへばやさや泊り

(有船磯集海)

隱士山田氏の亭にとめられて

水鶏啼と人のいへばや佐屋泊

(笈日記)

這出よかひやが下のひきの聲

(奥の細道
猿蓑・泊船集)

這出よ飼屋が下の墓

(四季千句)

此境はひわたるほどいへるもこの事に

や

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石

(猿蓑・泊船集
陸奥)

梢よりあたに落けり蟬のから

(六百番俳句合)

○杉風生云「——芭蕉には「門人杉風子夏の料とてかたばらを調じ送りけるに」と前書し、中七「よきぬのきたり」とあり

○いでや——芭蕉句選には「行や我よき布着たり蟬衣」

○頓て死ぬ——桃の實に「此句人上渡世天通轉變にもかゝれる名句ならんと世こそつていひ侍りぬ」と言つてゐる。又東西夜話に芭蕉が幻住庵にあつた頃秋之坊が一夜の夢を結び、その歸る時この一句を與へて薦まで見送つた由が見える

杉風生夏衣いと清らかに調じて送りけるを

いでや我よききぬ着たり蟬衣

(續 深川)

稻葉山

撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲

(淡 日 集記)

閑さや岩にしみ入蟬の聲

(奥の細道 集)

さびしさや岩にしみ込蟬のこゑ

(初 船 集)

淋しさの岩にしみ込せみの聲

(木がらし)

頓て死ぬけしきは見えす蟬の聲

(猿 集)

無常迅速

頓てしぬけしきも見へず蟬の聲

(卯 辰 集)

頓て死ぬけしきも見へず蟬の聲

(桃の實・青蓮 集)

聲にみななきしまふてや蟬のから

(芭蕉句選拾遺)

○己が火を——この句泊船集・東華集にも出で、東華集には錯綜顛倒之法の例として支考の説が見える
 ○うき人の——九四頁「権の花の心にも」の句参照
 ○わが宿は——芭蕉翁俳句集に「わが宿は蚊の小さきも馳走哉」

愚にくらく棘をつかむ螢哉

(東日記)

木曾路のたびをおもひ立て大津にとどまる

比先せたの螢を見に出て

此ほたる田どの月にくらべみん

(三つの顔)

艸の葉を落るより飛螢哉

(泊いつを昔集)

勢田の螢見

ほたる見や船頭酔ておぼつかな

(旗蕉)

ほたる火や船頭酔ておぼつかな

(泊船集)

己が火を木々の螢や花の宿

(己が光)

晝見れば首筋赤きほたる哉

(芭蕉句選)

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

(泊頭燈集)

わが宿は蚊のちひさきを馳走也

(小文庫)

○梅こひて——この句なほ
新山家・初蝶集にも出づ

○蚤が茶臼——當時の童謡
「蚤が茶臼をせたら賣うて
富士のお山をちよいと越え
た」による

○蚤虱——此句謡謡に「宿
山中」「陸奥衛に「舊家舎」と
前書して出づ

我宿は蚊のちいさきを馳走かな

(泊船集)

延寶四辰のとし故郷に歸るとて

山の姿蚤が茶臼の覆ひかな

(芭蕉集全句選)

不二の山蚤か茶臼の覆かな

(鐘鹿賦)

蚤虱馬の尿する枕もと

(奥の細道)

蚤虱馬のばりこくまくらもと

(泊船集
今日)

植物

圓覺寺の大願和尚今年陸月の初遷化し給ふ
よしまことや夢の心地せらるゝに先道より

其角が許へ申遣しける

梅こひて卯花拜むなみだ哉

(甲子吟行)

○五七の日——其角の母の
遺善である

○卯の花やくらき——この
句千句塚・陸奥衛・泊船集・
土大根等にも出づ

芭蕉俳句集

○甲斐の云々——泊船集に
「甲斐の國山家にたちより
て」

○一日く——この句蛙蟻
日記の原本(寶曆版)には前
の「麥の穂や」の句の傍に細
字で書いてある

五七の日追善會

卯花も母なき宿ぞ冷じき

(續康稟)

卯の花やくらき柳の及ごし

(景 依)

いざともに穂麥喰はん草枕

(甲子吟行)

行脚の客にあふて

いざともに穂麥くらはん草枕

(孤 松)

甲斐の山中に立よりて

行駒^{コマ}の麥に慰むやどり哉

(甲子吟行)

甲斐にて

行駒の麥になぐさむやどりかな

(小 文 庫)

麥の穂や涙にそめて啼雲雀

(嵯峨日記)

一日く麥あからみて啼雲雀

(嵯峨日記)

○麦の穂を——この句泊船集・芭蕉翁行狀記にも出で句形有磯海に同じ。尙ほ陸奥衛の本文参照

○繪のすまひ——泊船集のこの下五は誤である
○うきふしや——小督屋敷での吟

○青葉して——泊船集には前書なし

人々川さきまで送りて餞別の句を云其かへし

麦の穂を便につかむ別かな (有磯海)
 麦の穂を力につかむ別哉 (陸奥衛)
 たかうなや雫もよゝの篠の露 (續連珠)
 竹の子や幼き時の繪のすさみ (嵯峨日記)
 たけのこや稚き時の繪のすさび (猿蓑)
 竹の子や稚き時の繪のすまひ (泊船集)
 うきふしや竹の子となる人の果 (嵯峨日記)
 若葉して御めの雫ぬぐはゞや (笈の小文)

幾年計先にや侍らんこの宮古の西大寺に詣して

青葉して御目の雫拭ばや

(笈
泊船集
集証)

○雲岸寺の云々——この詞書奥細道の本文と二三異同あり。句は小文庫・泊船集（共に「佛頂禪師の庵をたぐく」と所書）・伊達衣（「雲岸寺佛頂禪師舊跡」と所書）にも出づ

あらたうと青葉若葉の日の光

（奥の細道）

日光山にて

たふとさや青葉若葉の日のひかり

（初鰯）

あらたふと木の下闇も日の光

（も、上草）

雲を根に富士は杉なりの茂かな

（續連珠）

嵐山藪の茂りや風のすじ

（嵯峨日記）

城主の君日光御代参勤させ給ふに扈從ス岡

田氏某によす

篠の露袴にかけししげり哉

（後泊船集）

雲岸寺のおくに佛頂和尚の山居

堅横の五尺にたらぬくさのいほ

むすぶもくやし雨なかりせば

松の炭して岩にかきつけ侍しといつぞや聞

○幻住菴記——風俗夕選にも出づ。本文略す。なほこの句卯辰集に「石山のほとりにかりなる庵をしつらひて」陸奥衛に「石山に籠ると」と前書して出づ
○須磨寺に——續有磯海に「此句は湖南の丈艸幾とせ袖底におさめられしを此たび我洲集結縁にとて文通の中に載して送られ侍る云」と記してある

へ給そのあと見むとて雲岸寺に杖を引ば人
くすゝんでともにいざなひわかき人おほ
く道の程うちさはぎておぼえずかの禁にい
たる山はおくある氣色にて谷道はるかに松
杉くろく藪したゝりて卯月の空今猶寒し十
景づくる所橋渡りて山門に入る扱かのあと
はいつくの程にやとうしろの山によぢのぼ
れば石上の小庵岩窟にむすびかけたり妙禪
寺の死關法雲法師の石室を見るがごとし

木啄もいほはやぶらず夏木立

(鳥の細道)

幻住菴記

先たのむ椎の木も有夏木立

(旅の船集)

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

(旅の美文)

須磨の浦一見の時

須磨寺に吹ぬ笛きく木下やみ

(續有磯海)

○するが地——駿河路の誤炭俵に「此句は山田よりの便に」と書添へてある。なほ芭蕉翁遺稿集には「するがの國に入て」と、泊船集には「するが路」と前書し出てづ

○牡丹藥分て——熱田三歌仙には「ふたゝび熱田に草鞋をときて林氏桐葉子の家にあるじとせしにまたおもひたちてあづまにくだとて」と前書あり

○花の蜜——別座鋪の原本「花の蜜」とあり、今改む。この句なほ陸奥衛・泊船集・四山集等に出て

するが地や花橘も茶の匂ひ

(炭俵・別座・陸奥衛)

二たび桐葉子がもとに有て今や東に下らんとするに

牡丹藥ふかく分出る蜂の名残哉

(甲子吟行)

むかし此國より武にくだるとて人々に留別す

牡丹しべを分て這出る蜂の名残哉

(笈日記)

桐葉にかきつけてたびける句

牡丹藥分て這出る蜂の名残哉

(織精物語・熱田三歌仙)

牡丹藥深く這出る蜂の別れ哉

(夢の跡)

贈桃隣新宅 自畫自讃

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

(別座敷)

杜若にたりやにたり水の影

(四山井)

○杜若語るも——芭蕉翁全傳に「つゝの國大江の岸にやどる」と前書して出づ

○あやめ生り——みつの鰯には「あやめ生けり軒の鰯のしやれ鰯」

○俗士に云々——この前書句選拾遺に頭註してある

○仙臺に——奥の細道の本文とは異同あり

杜若われに發句のおもひあり

(千鳥掛)

大坂にてある人のもとにて

杜若語るも旅のひとつ哉

(笠の小文)

山崎宗鑑が舊跡

有がたきすがた拜まん杜若

(泊船集)

手のとゞく水際うれしかきつばた

(芭蕉句選拾遺)

あやめ生り軒の鰯のされかうべ

(江戸廣小路)

葛蒲生けり去年の鰯の鰯體

(芭蕉里)

俗士にさそはれき月四日吉岡求馬を見るに

五日はや死すよつて追善

はなあやめ一夜にかれし求馬哉

(芭蕉句選拾遺)

仙臺に入てあやめふく日也旅宿に趣き畫工
嘉右衛門と云もの紺の染緒付たる草鞋二足

○白けしに——この句後刷の製葉合「贈杜國子」と前書「初蟬にも出づ。又明和版野ざらし紀行には「白けしにはねもぐ蝶の形りもがな」とあり

餞すさればこそ風流のしれもの爰にいたり

て其實をあらはす

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

(鳥の細道)

あやめ草紐にむすばん草鞋の緒

(泊船集)

杜國におくる

白けしにはねもぐ蝶の形見哉

(甲子吟行)

白芥子や時雨の花の咲つらん

(鷗尾冠)

海士の顔先見らるゝやけしの花

(莢の小麦合文)

紫陽草や帷子時の薄浅黄

(陸奥衛)

紫陽草や藪を小庭の別座鋪

(別座敷敷)

正成之像

鐵肝石心此人之情

なでし子にかゝるなみだや楠の露

(小文庫集)

○柚の花や——芭蕉翁發句
集に「柚の花にむかし忍ば
ん料理の間」

酔て寝むなでしと喚る石の上

(栗
芭蕉句選拾遺)

柚の花やむかし忍ん料理の間

(船
鑑日記)

落柿舎閑居 雜錄日記に見えたり

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

(小
船文庫)

許六が木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花

(種
船歌集)

木曾路を経て舊里にかへる人は森川氏許六
と云ふ古しへより風雅に情ある人々は後に
笈をかけ草鞋に足をいため破笠に露霜をい
とふてをのれが心をせめて物の實としる事
をよろこべり今仕官おほやけの爲には長劍
を腰にはさみ乗かけの後に鎧をもたせ歩行
若黨の黒き羽織のもすそは風にひるがへし
たるありさま此人の本意にはあるべからず

○椎の花の——詞藻にこの句と八四頁の「うき人の旅にも習へ木曾の蠅」とを並べ出し「兩句一句に決定すべきよし申されけれど今滅後の形見にふたつながらならべ侍る」とある

○世の人の——泊船集に「詞がきはもらしめ 細道」として出づ

○どんみりと——泊船集にも出で前書なし

椎の花の心にも似よ木曾の旅

(芭蕉)

栗といふ文字は西の木と書て西方淨土にたよりありと行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用たまふとかや

世の人の見付ぬはなや軒の栗

(芭蕉の細道)

桑門可伸は栗の木のもとに庵をむすべり傳へ聞行基菩薩の古は西に縁有木なりと杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや幽柄心ある分野にて彌陀の誓ひもいとたのもし

かくれ家や目だゝぬ花を軒の栗

(伊達夜)

桑門可伸の主は栗木の下に庵をむすべり

隠家や目にたゝぬ花を軒の栗

(雪丸)

しどけなく道芝にやすらひて

どむみりとあふちや雨の花曇

(芭蕉翁行狀記)

○象潟や雨に——翌九げに
は「六月十七日朝象潟雨降
ル夕止舟にて潟を廻る」と
前書あり
○象潟の雨や——陸奥衛に
は「さきがた」と前書あり。
泊船集にも「象潟」として出
づ

○行すゑは——西華集に
「此句はいかなる時の作に
かあらん翁の句なるよし人
のつたへ申されしが題し
ず」と附記してある
○瓜の花——類柑子の瓜の
一花の文参照
○夕にも——この句佐郎
山・陸奥衛・類柑子（幻住菴
にこもれるころ」と前書）
泊船集等にも出づ

象潟や雨に西施がねぶの花
象潟の雨や西施が合歡花
まゆはきを俤にして紅粉の花

出羽の最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花
行すゑは誰肌ふれむ紅の花
瓜の花雫いかなる忘れ艸
夕にも朝にもつかず瓜のはな
花と實と一度に瓜のさかりかな

美濃に入て

山陰や身を養はん瓜畑

落椿なにがしのまねきに應じて稻葉山の松

（奥の細道）

（奥の細道）

（奥の細道）

（泊船集）

（西華集）

（類柑子）

（藤の實）

（木がら集）

（泊船集）

○朝露に——木がらしには「露聲」と前書せり。なほこの句三草子によれば初め下五「瓜の土」とあつたのを後に「泥」としかへたのだといふ。

の下涼みして長途の愁をなぐさむほどに

山かげや身をやしなはむ瓜畠

(笈日記)

朝露によごれて涼し瓜の土

(種・蕉・木枯・治船集)

去年の夏なるべし去來別墅にありて

朝露によごれて涼し瓜の泥

(笈日記)

あさ露によごれて涼し瓜の泥

(龜川)

人くつどひみて瓜の名所なむあまたいひ

出たる中に

瓜の皮むいたところや蓮臺野

(笈治船日記)

ふりの皮むいたところや蓮臺野

(金比羅會)

闇夜きつね下はふ玉眞桑

(東日記)

初眞瓜四ツにやわらん輪にやせん

(浮世法師の字)

○初眞桑——泊船集に「此句は酒田にての吟なりいづれの集にやら四つにやわらん輪にやせん」とあやまりしるしけり」と附記してある
 ○あふみや云々——柴歌風に出羽酒田本間氏蔵として元禄二年癸亥未興行の歌仙の一部を紹介してある

○柳こり——この句東西夜話・泊船集にも州で東西夜話にはこの句について支考の論がある。

○我に似な——初蝶に「此句は門人槐之酒につかはされし也」とある

○めづらしや——覽丸げにも「羽黒に参籠して後鶴岡にいたり重行亭にて興行」と前書して出づ

初眞桑 たてにやわらん輪に切ん

(泊船集)

あふみや玉志亭にして納涼の佳興に瓜をも
 てなして發句をこふて曰句なきものは喰事
 あたはじと戯ければ

初眞桑 四にや斷ン輪に切ン

(柴歌風)

閏五月廿二日落柿舎亂吟

柳小柳 片荷は涼し初眞瓜

(市の庵)

我に似な二ツにわれし眞桑瓜

(初船集)

羽黒山を出て鶴が岡重行亭

めづらしや山を出羽の初茄子

(初茄子)

七日羽黒山にこもりて鶴が岡に出る

重行亭

めづらしや山を出羽の初なすび

(泊船集)

芭蕉俳句集

○ちさはまだ——泊船集には前書なくして出で「是は島田にての吟婦也」と書添へてある。なほこの句芭蕉翁發句集には中七「青葉ながらや」

○晝顔に——この句類柑子〔祖師の自畫讃〕と前書、曉山集にも出づ。なほ葵集には上五「夕がほに」とあり
○奇香亭——芭蕉翁發句集に「大津真香宅」。尙白菴懷紙には「元祿元歲戊辰六月五日書」とあり

○子どもらよ——この句陸奥衛・泊船集・字匠法師にも出づ

五月雨の雨かぜしきりにおちて大井がは水
出侍りければしまだにとゞめられて如舟如
竹などいふ人のもとにありて

ちさはまだ青ばながらになすび汁

五月雨の雨風しきりにおちて大井川水出侍
りけるにとゞめられてしまだに逗留す如舟
如竹などいふ人のもとにあそびて

ちさはまだ青葉ながらになすび汁

晝顔に米つき涼むあはれ也

奇香亭

鼓子花のみじか夜ねぶる晝間哉
子ども等よ晝良咲ぬ瓜むかん

東武吟行のころ美濃路より李由が許へ文の
をとづれに

(芭蕉翁風讀集)

(笈日記)

(泊船集)

(芭蕉翁俳諧集)

(藤の夏)

○米やすむ——「米鍋やすむ」の誤であらう。前出「産額に米つき涼むあはれ也」の句参照

○蓮の香に——笈日記原本には五五頁所出「ひらく」との句につゞいて出づ、本間主馬亭での吟で、この次に八一所出「此宿は水鷄も」の句が出てゐる。又泊船集にも「ひらく」との句の次に出し、「丹野は能太夫なればかくは申されし也」と附記してある

ひるがほに晝寐せうもの床の山

(讀 船 集)

夕良にみとるゝや身もうかりひよん

(讀 山 井)

夕顔の花に心やうかりひよん

(耳 無 草)

夕良の白^レ夜の^レ後架に昏燭とりて

(武 船 集)

夕顔や酔てかほ出す窓の穴

(槽 船 集)

夕顔にかんびやうむいてあそびけり

(石 磯 集)

ゆふがほに米^レやすむ哀なり

(梁 集)

枝なくて世にかゝはらぬ蓮哉

(熊 野 集)

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

(笈 日 記)

蓮の香に目を通はすや面の鼻

(浮 世 の 北)

丹野^{（マ）}が仕舞の教談に

蓮の香や目より潜^{（マ）}て面^{（マ）}の鼻

(第 草)

○なまぐさし——笈日記の
本文参照

芭蕉 俳句 榮

○藤の實は——泊船集には
秋都に收めてある

○其草庵——泊船集には
「美濃巴百亭」。なほ笈日記
本文参照。同書にはこの句
の次に「貞享五年夏日」と書
添へせり

なまぐさし小なぎが上の鮪の腸
榼や花なき蝶の世すて酒

(笈) 笈日記
(芭蕉) 芭蕉集

關の住素牛何がし大垣の旅店を訪はれ侍り
しに彼ふぢしろみさかといひけん花は宗祇
のむかしに匂ひて

藤の實は俳諧にせん花の跡

(芭蕉) 芭蕉集

其草庵に日比ありて

やどりせむあかざの杖になる日まで

(笈) 笈日記

尾陽巴丈亭にて

やどりせん藜の杖になる日まで

(芭蕉) 芭蕉集

甲斐山中

山賤のおとがい閉るむぐらかな

(芭蕉) 芭蕉集

山路にて

○夏來ても——泊船集に
「あら野には一葉を一ツか
なとあやまりぬ」と附記す

○清瀧や波に散込ム——笈
日記に六一頁所出「大井川
浪に塵なし夏の月」をこの
句に吟じかへたる由見ゆ。
同書本文及六一頁所出
「清瀧や浪に塵なき夏の月」
の句参照すべし

○夏草や——奥細道には中
七「兵どもが」生駒堂・渡
し船には「兵どもの」とあり

なつ來てもたゞひとつ葉の一つ哉

(續) 野

夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉

(笈) 泊船集

清瀧眺望

清瀧や波に散込ム青松葉

(笈) 草・笈日
記・泊船集

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し

(續) 奥・笈・伊
達衣・泊船集

奥州高館にて

夏草や兵共がゆめの跡

(續) 笈

奥州高館にて

なつ草や兵どもの夢の跡

(泊) 船集

さてもそのうち御ざうしは十五と申はるの
比較馬の寺を忍ひ出ぶづまくだりの旅衣は

○世の夏や——雪の流には
「井持昨卜亭に遊て、世の
夏や湖水をたゝむ波の上」
又芭蕉句選拾遺に中七「湖
水に疊む」

るけき四國西國も此高館の土となりて申ば
かりはなみだなりけり

夏草や 兵 共 が 夢 の 跡

(自 馬)

雜

大津にて

世の夏や湖水にうかむ浪の上

(前 後 同)

むさし野は櫻のうちにかくれ出て武隈はあ
やめふく比になりぬかの松みせ申せ遅櫻と
云けむ舉白何がしの名残も思ひ出てなつか
じきまゝに

散うせぬ松や二木を三月ごし

(四季 千句)

武隈の松見せ申せ遅ざくらと舉白といふ

ものゝ餞別したりければ

櫻より松は二本を三月越
櫻より松は二本を三月越

(泊島
船の
集道)

(奥の細道)

○父月や——この句なほ露
 葉・其袋・陸奥千鳥・千句
 塚・雪丸げ等に出で、其袋
 には「北國何トヤライふ崎
 にとまりて所の夷もおし入
 て句をのぞみけるに」雪丸
 げには「直江津にて」と前
 書がある

○鳴海眺望——枕かけには
 「鳴海にて」

○はつ秋や海も——句解参
 考によれば此句はじめは
 「初秋は海やら田やら一み
 どり」であつたのを再案し
 たのである。なほ金蘭集
 には「初秋や海も青田の一
 くもり」・「初秋は海やら田
 やらみどりかな」

○初秋や疊み——この句麿
 野蓀集・小文庫・泊船集・
 俳諧會我・夏の月にも出づ

秋

時
候

文月や六日も常の夜には似す
 文月の六日も常の夜には似す
 張ぬきの猫も知るべし今朝の秋

鳴海眺望

はつ穠や海も青田の一みどり
 鳴海がたや青田にかはる一みどり
 初秋や疊ながらの蚊屋の夜着

立
秋

(奥細道)

(泊船集)

(芭蕉句選拾遺)

(枕かけ)

(鹿島紀行附録)

(西の雲)

○秋來にけり——句解參尋に「秋來にけり耳を尋ねて透聞風」とあつて「此句舊の五文字枕の風と出す集あり。透聞風は再案なり」といつてある。

○牛部屋に——小文庫には「牛部屋に蚊の聲よはし秋の風」

○ひや／＼と——句の解につきて笈日記を參照すべし。この句泊船集に夏部に收む

○野ざらしを——彼の旅にも州で「是は翁そのかみ世をのがれそめて此身はかくてなうち侘てむさし野々草分出つゝものうきあしから山も越たまひしるべなり」と附記せり

○湯の名残——輕原に「此句はばせを翁山中上湯の時やどのあるじ桃妖に書てたぶまへがきありしかどわすれ侍り」と記してある

秋來にけり耳をたづねて枕の風
牛部屋に蚊の聲聞き残暑哉

栗津の庵に立よりしばらくやすらひ給ひ殘暑の心を

ひや／＼と壁をふまへて晝寐哉

(芭蕉翁行狀記)

その後大津の木節亭にあそぶとて

ひや／＼と壁をふまへて晝寐哉

(笈日記)

貞享甲子秋八月江上の破屋をいづる程風の聲そぞろ寒氣也

野ざらしを心に風のしむ身哉

(甲子吟行)

野ざらしを心に秋のしむ身哉

(明和版野蘭記行)

湯の名残今宵は肌の寒からむ

(梓原)

○乳麴の——葛の松原に
「是は曲水亭にて夜寒とい
へる題の發句也云々」とあ
る

○かれ朶に——泊船集に
「秋のくれとは」と前書あり
○死ましなぬ——後の旅に
撰者如行が「といひしは杭
瀬の川のながれに足をすゝ
ぎて、浮雲流水を身にかけ
こゝろにかけて頭蛇やすめ
られし因なり。げにや茶の
羽織袴の木算も此こゝろさ
しよりあふぎそめられけ
り」と註してある

○こちらむけ——笠日記に
「是は湖南の幻住庵におは
す時の作也。君は六十我は
五十といへり。老屋一聚の
前書待りけるがあやまりて
おぼえ侍らず」とあり、又
泊船集に「此句は雲竹がう
しろむきの像に替のぞみけ
るに書て遣はされし」と附
記せり。なほ蝶夢の芭蕉翁
文集参照すべし

入麴の下焼立る夜寒かな

(己) 泊船が
集光

乳麴の下たきたつる夜寒哉

(葛の松原)

愚案するに冥途もかくや秋の暮

(向之関)

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

(東日記)

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮

(彌野・泊船
集・鶴尾冠)

武藏野を出る時野ざらしを心におもひて旅

立ければ

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

(甲子吟行)

死もせぬ旅寐のはてよ秋のくれ

(小文庫)

死よしなぬ浮身の果は穗の暮

(後の旅)

雲竹自畫像

こちらむけ我もさびしき秋の暮

(笠日記
熊記)

○人聲や、此道や——笈日記に「此二句の間のいづれを」と申されしにこの道を行ひとなしにと獨歩したる所誰かその後にしたがひ候半とて是に所思といふ題をつけ云々」とある。なほ枯尾花・露突には「此道や」の句を出してゐる

○秋の夜を——この句半半らし・松濤集「菊月廿一日潮江車廂亭」と前書あり。染川集・泊船集・四山集にも出づ。なほ笈日記の本文参照すべし

○松風や——笈日記の本文に「是はあるじの男の深くのぞみけるよりかきてとゞめ申されし」とある

人聲や此道かへる秋のくれ、

(笈日記集)

此道や行人なしに蘊の暮

(笈日記集)

所思

此道や行人なしに秋の暮

(其便)

所思

此道を行行人なしや秋のくれ

(波路島)

廿一日二日の夜は雨もそぼ降りて静なれば

秋の夜を打崩したる咄かな

(笈日記)

憶老杜

髭風吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ

(虚船集)

松風や軒をめぐつて秋暮ぬ

(笈日記)

大坂茶店四郎左衛門亭にて秋をおしむ

○蛤のふたみに——道のか
げ（寛政五年刊）に芭蕉の
自筆箋としてのせたものに
は「虫の聲もかれん」に松
吹かぜの何くとやらむ」と
前書がある

○翁此所より云々——後の
旅の撰者如行の文である

松風や軒をめぐつて秋くれぬ

（木がらし）

松の風軒を廻つて穩暮ぬ

（翁 芭）

大坂清水茶店四郎左衛門にて

松風の軒をめぐつて秋くれぬ

（泊船集）

姿風の軒をめぐりて秋くれぬ

（俳諧管我）

雪の旅それらではなし秋のくれ

（風木柱）

行焔や身に引まとふ三布蒲團

（泊船集）

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

（奥細道）

おなじくいせの國出るとて

はまぐりの二見へわかれゆく秋ぞ

（其 徒）

翁此所より伊勢へうつり給ふ時我舟にて送

り侍るに

○行秋の猶——この句小文庫・泊船集にも出でなほ猿丸宮集には「乙亥が前途に、行もまた未たのもしや青みつかん」とある

○水學も——芭蕉句選拾遺に「水岬も」と誤つてゐる水學は水を利用する奇術

蛤のふた見へわかれ行秋ぞ

(後の巻)

元祿二とせの秋みの、國大垣よりいせのせんぐうにまうで侍りしふねの中にておくりける人に申たる句

はまぐりのふた見へわかれゆく秋ぞ

(泊船集)

行秋の猶たのもしや青蜜柑

(浮世の北)

行秋や手をひろげたる栗のいが

(笈日記・泊船集・猿蓑)

對伊陽門人

行秋や手をひろげたる栗の毬まり

(陸奥集)

天文

水學も乗物かささん天の川

(江戸唐小路)

○荒海や——この句勸進腰には「いづもさきにて」、泊船集には「出雲さきにて」、其後には「その夜北の海原にむかひて」と前書有りて出づ

○あちごのくに云々——本朝文選所載「銀河序」とは大分異同がある。又雲丸げには「遠徠の國出雲崎といふ所より佐渡が島へ海上十八里となり初秋の薄霧立ちあへず流石に渡も高からざればたゞ手の上の如くに見渡さる」と前書がある

○あの雲は——この句なほいつた昔・陸奥衛・泊船集に出づ
○太疵のもとひ——大疵の基

荒海や佐渡によこたふ天河

(興 寂 遠)

あちごのくに出雲崎といふところより沖の方十八里に佐渡が島見ゆ東西三十里餘りに横折ふしたりむかしよりこのしまはこがね多く涌出で世にめでたき島にて侍るを重罪朝敵の人々の遠流の地にていとおそろしき名に立り折ふし初秋七日の夜宵月入果て波の音とうとうともものすごかりければ

あら海や佐渡によこたふ天の川

(榮 獨)

寄李下一

いなづまを手にとる闇の紙燭哉
あの雲は稻妻を待たより哉

(續 芭蕉 夢 野)

ある智識のたまはくなま禪太疵のもとひ
とかやいとありがたく覺て

○稻妻に——句は浮世の北・やとりの松・泊船集にも見える

○本間主馬——名丹野、大津に住んでゐた能太夫
○獨獨を云々——莊子至樂篇に「獨獨然面臥」

○稻づまや——此句泊船集にも出で「骸骨繪賛に」と書してある

○いなづまや闇——芭蕉翁全傳によれば「文月の比喩離宅にて土芳と二人稻妻の題にて」とある

稻妻にさよらぬ人の貴さよ

(己が光)

本間主馬が宅に骸骨どもの笛鼓をかまへて能する處を畫て舞臺の壁にかけたりまことに生前のたはぶれなどかこのあそびに殊らんやかの獨獨を枕として終に夢うつゝをわかつたざるも只この生前をしめさるゝものなり

稻づまやかほのところが薄の穂

(續 蕉 詞)

丹野がこのめるにまかせて骸骨の繪賛に骨相觀の心を前に書て

いなづまや顔の所がすゝきの穂

(芭蕉翁行狀記)

いなづまや闇の方行五位の聲

(續 蕉 詞 集)

栗津にて

稻づまや海の面をひらめかす

(芭蕉翁俳句集)

○猪も——此句卯辰集・篇突・千句塚・泊船集等にも出づ

○吹とばす——更科紀行の眞蹟によればこの句は「秋風や石吹風すあさま山、吹風あさまは石の野分哉、吹落す石は浅間の野分かな」などがその初案であつた。

芭蕉翁は句集に上五「吹とさす」と誤る

○翻何と——この句原本には意の通として出づ

○猿を聞人——昭和版野崎紀行に「猿を聞捨子を秋の風いかに」

○秋風や——小文庫に「不破にて」と前書あり。なほ句は芭蕉體にも出づ

猪もともに吹るゝ野分かな (あめ子)

吹とばす石はあさまの野分哉 (更科紀行)

秋風の鍵戸の口やとがりごゑ (續山井)

枝もろし緋唐紙やぶる秋の風 (六百番後句合)

蜘蛛何と音をなにと鳴秋の風 (向之園)

猿を聞人捨子に秋の風いかに (甲子吟行)

山行

猿をきく世すて子に秋の風いかに (俳林一字風聞集)

義朝の心に似たり秋の風 (甲子吟行)

不破

秋風や藪も畠も不破の關 (甲子吟行)

西東あはれさひとつ秋の風 (伊勢紀行)

○西東あはれさおなじ——
 後日記の本文には「いづれの時の秋にや去來千子が伊勢まうでの比叢の記かきて深川に送りけるに奥書の姿ありて」泊船集には「これは去來千子いせの紀行書て深川へ送りけるかへりに此句を其おくに書付たまひし也」と註あり。なほあが冠（寛政元年刊）には「東にしあはれさひとつ秋のかぜ」とあり、芭蕉句選には「西東あはれも同じ秋のかぜ」○塚もうごけ——この句雅談集を参照すべし。又陸奥傳にも出で「加州一笑墓に詣」と所書してある

○あか／＼と日は難面もあきの風
 此の句なほ卯辰集・泊船集・陸奥傳・四季千句等に見え、又雪丸げには「旅愁なむさめかねてももうき秋もやいたりぬれば流石目に見えぬ風の音づれもいとさしくなるに殘雪猶やまざりければ」と所書がある

○山中の——この詞書奥の細道の本文と些か異同あり

西東あはれさおなじ秋の風
 身にしみて大根からし秋の風

(後日記)
 泊船集記

(更科紀行)

一笑といふもの此道に好る名のほの／＼と
 聞えて世に知人も侍りしに去年の冬早世したりとその兄追善を催すに

塚もうごけ我泣こゑは秋の風
 塚もうごけ我泣聲は秋の風

(鳥の道・奥細道)
 泊船集

(遠の雲)

途中吟

あか／＼と日は難面もあきの風

(奥細道)

旅行

あか／＼と日は難面も秋の風

(いつを昔)

山中の温泉にゆく程しら根が嶽あとに見な
 してあゆむ左の山際に観音堂あり花山法皇

○石山の——泊船集に「那谷の觀音にて」と下書す。又山中集に見ゆる涼菟の句の前書によれば下五が「秋の霜」となつて居る

○林の風伊勢の——芭蕉句選拾遺に上五「秋かぜや」。

なほ同書の頭註参照

○秋も末——荒小田に「これは翁の吟なりと路邊がかりたるよし備後の國より聞ゆ又伊勢なる人のつたへしは就かへしといふところにて秋風や伊勢の墓原なをすぞしとなん」と附記す

卅三所願禮とげさせ給て後大慈大悲の像を安置したまひて那谷山と付給とかや那智谷汲の二字をわかち侍りしとぞ奇石さまへに古松うへならべて葦ぶきの小堂岩の上に作りかけて勝所の地也

石山のいしより白し秋のかぜ

(芭蕉の撰遺)

加賀山中桃妖に名をつけ給ひて

桃の木其葉ちらすな秋の風

(泊船集)

いせの國中村といふ所にて

秋の風伊勢の墓原猶すぞし

(花摘)

秋も末伊勢の墓原尙淋し

(荒小田)

野水が旅行を送りて

見送りのうしろや寂し秋の風

(三つの町)

○秋風のふけども——小文庫には上五「はつ嵐」

○物いへば——本朝文選・和漢文操參照

○牛部屋に——この句泊船集・星倉・夢の名残・芭蕉體等にも見ゆ。又芭蕉翁發句集には「牛部屋に蚊の聲聞き殘響ぞ」とあり

○秋風に——笈日記・末若葉に嵐嵐を悼む文が出てある、參照すべし

○初月や——古選に「此句湖南有虞蹟謠集傳不錄」とある

秋風のふけども青し栗のいが

座右之銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し穂の風

(小文庫)
泊船集

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風

(小文庫)

悼松倉嵐蘭

秋風に折て悲しき桑の杖

(笈日記・末若葉・泊船集)

たびねして我句をしれや秋の風

(對照紀行)

初月や向ひに家のなき所

(俳諧古選)

三ヶ月や朝良の夕べつぼむらん

(泊船集)

明行や二十七夜も三日の月

(孤松)

(木がらし)
泊船集

○常陸へ云——泊船集に
は「常陸へまかりける船中
に」

○ありとある——泊船集に
「此句いづれの集にやら五
文字と何事のとありぬ」と
註す

いさゝかなる處にたびだちてふねのうちに

一夜を明して曉の空篷よりかしら指出て

あけゆくや二十七夜も三日の月

（芭蕉集）

常陸へまかりける時船中にて

あけぼのや廿七夜も三日の月

（小舟文庫集）

三日

何事の見たてにも似ず三かの月

（曠野）

大曾根成就院の歸るさに

有とあるたとへにも似ず三日の月

（笈日記）

大曾根の成就院にて

ありとあるたとへにも似ず三ケの月

（泊船集）

三ヶ月に地はおぼろ也蕎麥の花

（浮世の北）

○三日月の地は——泊船集に「此句には三ヶ月の記あり今略之」と註す。なほ此句書兄弟(享和元年刊)には「みか月に地はおぼろなり蕎麥の花」とある。

○諸墓——松舟風蘭の墓に附けたのである。泊船集には「初七日諸墓」と前書し「長月三日なりければ也」と附記してある。なほ未若葉の本文参照。

○名月や池を——雑談集に「丁卯のとし芭蕉逝の月みんとて舟催して参りたれば」として此句を載せてある。なほ此句俳林一字幽蘭集・泊船集・葵集等にも見えるが以上の諸書皆中七は「池をめぐりて」とある。又一字幽蘭集には句の據所として家隆の歌「秋の月は池の小舟をさす棹の機めぐりせば有明の月」を引いてある。

三日月の地は朧なりそば菖

(泊船集)

三日月や地は朧なる蕎麥菖

(三日月日記)

九月三日諸墓

みしやその七日は墓の三日の月

(度日船集)

初七墓にまふでて

みしやその七日は墓のみかの月

(未若葉)

武藏守泰時

仁愛を先とし政以去欲爲先

明月の出るや五十一ヶ條

(庭菖)

草庵の月見

名月や池をめぐつて夜もすがら

(雑談集)

名月や池をめぐりて夜もすがら

(孤松の松)

○教賀に有て——泊船集・陸奥衛には「教賀にて」、四幅對には「十五日雨ふりければ」とある。句には異同なし。

○名月は二つ有ても——芭蕉句選・芭蕉新巻には「名月や二つ有ても」。

○堂の換——百歌仙に「寺の様」。

○名月や海に——今日の皆に「此句は欲把西湖比西子、淡粧濃抹也相宜」といへる東坡が作例によられたるべきを草く「看過さむは本意なし」とある。なほこの句中七一葉集には「清水にうかぶ」。

○名月や兒たち——以下三句につき初總に「翁義仲寺にいませし時に、名月や兒たち並ぶ堂の椽とありければ」と此句意にみたずとて、名月や海にむかへば七小町と略じて是も尙あらためんとて、明月や座にうつくしき良もなしといふに其夜の句はさだまりぬこれにて翁の句風雅にやせられし事をしりあるべしと今茲に出しぬ」と

十五日亭主の詞にたがはず雨降

名月や北國日和定なき

(奥細道)

名月は教賀に有て

名月や北國日和さだめなき

(其後)

名月はふたつ過ても瀬田の月

(西の雲)

名月は二つ有ても瀬田の月

(泊船集)

名月や兒たち並ぶ堂の椽

(初修)

名月や海にむかへば七小町

(初日の昔)

明月や座にうつくしき良もなし

(初泊船集・御修)

月見する座にうつくしき良もなし

(卯辰集)

古寺翫月

月見する座にうつくしき顔もなし

(夕顔の歌)

○夏かけて——この句陸奥衛・泊船集にも出で又木曾の路・寛政版更科紀行の杉風の句の前事中にも見える
 ○名月や花かと、明月に麓の——此二句有磯海にはつづいて出でゐる（泊船集にも）
 「しが山中にありて二句」と題し、「名月にふもとの」と「名月の花かと」の二句ついで出てゐるから「伊賀山中にありて」の前書は二句通じて居るのであらう。なほ始めの句、芭蕉句選には「名月の花かとばかり綿島」とある

名月や門へさしくる潮頭

（陸奥の芭蕉）

名月や門にさし來ル潮がしら

（名月月日記）

名月や門にさしくる潮頭

（芭蕉芭蕉集）

名月や門にさし込潮がしら

（泊船集）

良夜吟

夏かけて名月あつきすゞみ哉

（蕨の園）

前書されて見えず

夏かけて名月あつきすゞみ哉

（小文庫）

伊賀山中にありて

名月や花かと見えて綿はたけ

（有磯海）

名月の花かと見へて棉島

（東西夜話）

明月に麓のきりや田のくもり

（有磯海）

○名月の見所——金花傳に
「隠士等裁坊にまみゆ」と註
あり

○木を伐て——芭蕉句選拾
遺には申七「本口見ばや」

○三井寺の——この句其便
には「月は幻住菴にて」、泊
船集には「義仲寺にて」、芭
蕉集には「大津にて」と前書
ありて出づ

名月に麓の霧か田の曇

（篇 突）

名月の夜やおもくと茶白山

（射水川）

重々と名月の夜や茶白山

（さいつころ）

名月となる迄月のはし居哉

（眞 蹟）

たんだすめ住ば都ぞけふの月

（隠山井）

命こそ芋種よ又今日の月

（千宜理記）

木を伐て本口見るやけふの月

（江戸廣小路）

蒼海の浪酒臭しけふの月

（坂東太郎）

於大津義仲菴

三井寺の門たゝかばやけふの月

（雜談集）

三井寺の門たゝかばやけふの月

（西の雲・篇
突・のぼり雲）

武藏野と笠の間なれ今日の月

（眞 蹟）

○雲折々——この句なほ續
鹿葉・泊船集・後れ鶴・千句
塚・東西夜話等にも出で句
形春の日と同一。又東西夜
話にはこの句についての支
考の論がある

○寺にねて——この句鹿島
詣・泊船集にも出づ

○里の子や——芭蕉杉に兩
吟百韻(天明六年刊)には白
筆の短冊によつたとある

けふの今宵寝る時もなき月見哉

(續連勢)

雲折く人をやすむる月見哉

(春の日)

雲おりく人を休める月見哉

(孤松・芭蕉集)

雲おりく人やすまする月見哉

(蒙古物語)

座頭かと人に見られて月見哉

(木が船らし)

鹿島に詣ける比宿根本寺

寺にねて誠がほなる月見哉

(續連勢)

賤の子やいねすりかけて月をみる

(芭蕉歌仙)

里の子や稻すりかけて月を見る

(芭蕉吟百韻)

淺水のはしを渡る時俗あさうづといふ清少

納言の橋はと有一條あさむつのとかける所

也

○あさむつや——晝寝の種に「一年芭蕉越路にいたり古き名所を尋て月の十句を或人かたりけれど過行年月の程經て覺束なし耳の底縁にのこるを三四句しるしといめぬ」と言つて、淺水橋以下玉江・湯尾・燈山・濱の四句を出してある。(後出參照)

○玉江——泊船集には「玉江にて」

○見る影や——泊船集に「此句は阿泉宗房と名のりたまひし比の吟なり。短冊に見え侍りけり」とある

○米くる——笈日記の本文參照

○十六夜も——この句はほ更科紀行・嘯野・小文庫・泊船集・春草日記にも出づ

あさむつや月見の旅の明あけばなれ

(其後・泊船集
金尾・羅句)

淺水橋

あさむつや月見の旅の明はなれ

(晝寝の種)

玉江

月見せよ玉江の芦を刈ぬ先

(晝寝の種)

見る影やまだ片なりも宵月夜

(島泊船集)

十六夜

米くるゝ友を今宵の月の客

(笈日記
泊船集)

いさよひもまだ更科(まろ)の郡哉

(いつを昔)

更科

十六夜月もまださらしなの郡哉

(木曾の歌)

十六夜 三句

○やすくと——この句既望・小文庫・泊船集・堅田集等にも出で既望集には「堅田既望」と題す
 ○十六夜や海老——この句俳林良材・泊船集にも出づ
 ○鎖あけて——この句蘭麝子集にも出づ

○堅田十六夜之辨——文章一篇があるが、今こゝには略した。泊船集には「堅田十六夜之辨二句、今略之小文庫」と前置して此句の次に「やすくと」の句を出してある
 ○十六夜は——泊船集には中七の句形が異つて二句共に出てゐる。

やすくと出ていさよふ月の雲
 十六夜や海老煎る程の宵の闇
 その後浮見堂に吟行して

鎖あけて月さし入よ浮み堂
 やすくと出ていさよふ月見かな

かたゞにて

十六夜や海老を煮る間の宵の闇

堅田十六夜之辨

鎖明けて月さし入れよ浮御堂
 十六夜はわつかに闇の初哉
 十六夜はとり分闇のはじめ哉
 月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿

(箋日記)

(箋日記)

(箋日記)

(未加らし)

(辛卯自筆
類題後句集)

(小文庫)

(泊船集
類題後句集)

(泊船集
類題後句集)

(佐夜中山)

○かつら男——「芭蕉庵春
秋」の所引に據り如意寶珠
を出所とす、原本未見

○移芭蕉辭——「胸中一物
なきを讀とし云々」の文が
ある。今略す

影は天の下てる姫か月のかほ
かつら男すますなりけり雨の月

桑名氏興行渡邊何某の宅にて

詠るや江戸にはまれな山の月
今宵の月磨出せ人見出雲守
實や月間口千金の通り町
武藏野の月の若ばへや松島種

月をわび身をわび拙きをわびてわぶと答へ

むとすれど問ふ人もなしなほわびく

佗テすめ月佗齋がなら茶哥

移芭蕉辭

芭蕉葉を柱に懸む庵の月

(續山井)

(如意寶珠)

(芭蕉翁全傳)

(六百番短句合)

(江戸通り町)

(松島眺望集)

(武藏曲)

(芭蕉句選拾遺)

○馬に寝て——三冊子には「笈記」とほゞ同じ前書がある。同書参照

○月はやし——芭蕉句選拾遺に「貞二梨雪所持題山家雨後月」と題註有り

わが宿は四角な影を窓の月

(小文庫集)

杜牧が早行の残夢小夜の中山に至りて忽驚

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

(甲子吟行)

畫譜 巴丈亭

はつかあまりの月かすかに山の根ぎはいと

闇こまの蹄もたどくしくて落ぬべき事あ

またゝびなりけるに數里いまだ鶏鳴ならず

杜牧が早行の残夢小夜の中山に至ておどろ

く

馬に寐て残夢月遠し茶の烟

(笈日記)

みそか月なし千とせの杉を抱あらし

(甲子吟行)

月はやし梢は雨を持ながら

(鹿島詣)

いもの葉や月待里の焼ばたけ

(鹿島詣)

○あの月に——「月」は誤寫であらう

○越人を云々——いつを皆には次に「いざよひもまた更科の郡哉」の句をつゞけ出してゐる、前書は即ち二句に通じてゐるのである

○俳や——この句更科紀行・雜談集・翁草・泊船集等にも出で、泊船集には「更科競捨之辨今略之小文庫に見へたり」と前書してゐるが、句はやはり「俳や」となつてゐる。なほ雜談集の本文参照

○更科競捨月之辨——文章略す

○月影や——白雜夜話に「月消し四門四州もたゞひとつ」とし、四宗でない事を論じてゐる

○その玉を——芭蕉句選に「その玉を羽黒へかへせ法の月」

あの中に蒔繪書たし宿の月

（更科紀行）

あの月に蒔繪書たし宿の月

（木曾の繪）

越人を供して木曾の月見し比

俳や嫉ひとり泣月の友

（いつをき）

更科競捨月之辨

俳は嫉ひとりなく月の友

（小文庫）

善光寺

月影や四門四宗も只一ツ

（更科紀行）

悼遠流の天有法印

その玉を羽黒にかへせ法の月

（泊船集）

羽黒山別當執行不分叟天有法印は行法いみじききこえ有て止観圓覺の佛智才用ハにほどとしてあるは山を穿石を割て亘虚が力女

朝がたくみを盡して坊舎を築階を作れる青
雲の滴をうけて笥の水とをくめぐらせ石の
器木の工此山の奇物となれるもの多し一山
舉て其名をしたひ其徳をあふぐまことにふ
たゝび羽山開基にひとしきれどもいかなる
天災のなせるにやあらんいづの八重の潮風
に身をたゞよひて波の露はかなきたよりを
なむ告侍るとかや此度下官三山順禪の序追
悼一句奉るべきよし門徒等しきりにすゝめ
らるゝによりてをろく戯言一句をつらね
て香の後に手向侍るいと憚多事になん侍る

其玉や羽黒にかへす法の月

湯尾

月に名を包みかねてやいもの神

覺山

(三山雅集
南谷集)

(蘇我の
泊船集)

○古例をきゝて——泊船集
に「古例をきく」

○月清し——この句奥細
道・泊船集（前書遠夢に同
じ）にも出づ

義仲の寢覺の山か月悲し

濱

（寢覺の
集種）

月のみか雨に相撲もなかりけり

（寢覺の
集種）

元祿二年つるがの湊に月を見て氣比の明神
に詣遊行上人の古例をきゝて

月清し遊行のもてる砂の上

（義
詞）

元祿二年八月十四日教賀の浦に宿をもとめ
て氣比の宮に夜參すむかし二世の遊行上人
この道の泥土をきよめんとてみづから砂を
はこび給ふより砂持の神事とて今の代にも
つたへ侍るとかや社頭神さびたるありさま
松の木の間に月の影もりて信心やゝ骨に入
べし

月清し遊行のもてる砂の上

（同
幅對）

〇月いづこ——草庵集に
「敦賀の驛の屏風に侍り北
國行脚の時の吟なるべし」
と註してある

〇おなじ夜——前に「十五
日雨ふりければ」と題して
「名月や北國日和さだめな
き」の句が出てゐる

氣比の宮へは遊行上人の白砂を敷ける古例
ありてこの比もさる事有しといへば

月清し遊行のもてる砂の露

(其 錢)

中秋の夜は敦賀にとまりぬ雨降ければ

月いづこ鐘はしづみて海の底

(草庵集)

おなじ夜あるじの物語に此海に釣鐘のしづ
みて侍るを國守^{かき}の海士を入れてたづねさせ
給へど龍頭のさかさまに落入て引あぐべ
き便もなしと聞て

月いづく鐘はしづめる海の底

(四 帽 對)

中秋のころ敦賀に止宿雨ふりければ

月いづこ鐘は沈みて海のそこ

(もとの水)

斜嶺亭

戸をひらけばにしに山あり伊吹といふ花

○そのまゝよ——後の旅に
「斜嶺をとりむかへば此
句をとめらる」と句の次
に記してある

○月さびよ——この句泊船
集にも出で「此句の詞書勸
進腰に見えたり」とある

○月さびて——小文庫の前
書も勸進腰と同一で、只「又
立が宅に、其妻の男の、物で
とまめやか、日向守が妻、心
ないまさら」と小異あるに
すぎぬ

にもよらず雪にもよらず只これ孤山の徳
あり

其まゝに月もたのまじいぶき山

(笈
船日
集詠)

戸を開けば西に山あり伊吹といふ花にもよ
らず雪にもよらず只これ孤山の徳あり

そのまゝよ月もたのまじ伊吹やま

(後
の
旅)

伊勢の國又玄が宅へとどめられ侍る比その
妻男の心にひとしくもの毎にまめやかに見
へければ旅の心をやすくし侍りぬ彼日向守
の妻髪を切て席をまうけられし心ばせ今更
申出て

月さびよ明智が妻の咄しせん

(勸
進
腰)

月さびて明智が妻の咄せむ

(小
文
庫)

正秀宮初曾興行の時

○月しろや——芭蕉翁俳句集に下五「宵の内」

○柴の庵と云々——眞蹟に「……西行上人のよませ玉ふよし山家集にのせられたりいかなるあるじにやとこのもしくである草庵の坊につかはしける」とある

○柴の戸の——泊船集にも出で「はしがき小文庫」と註す

○東順傳——文章は今略す

月しろや膝に手を置宵の宿

(芭蕉翁俳句集)

柴の庵ときけばいやしき名なれどもよにこのもしき物にぞ有ける

此うたは東山に住ける僧を尋て西行のよませ給ふよし山家集にのせられたりいかなる住居にやと先その坊なつかしければ

柴の戸の月や其まゝあみだ坊

(小文庫)

九たび起ても月の七ツ哉

(維船談集)

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友

(眞蹟)

深川の五本松といふ處に船をさして

川上とこの川下と月の友

(泊船集)

東順傳

○四隅——ヨスミと訓む

○八月十五日——泊船集に

はこの前書なし。なほ笈日記にはこの句に「名月の佳章は三句待りけるに外の二章は評をくはへて後鑑養に入集す。爰には記し侍らず（下略）」と註してある

○秋もはや——笈日記に

「此句の先篇昨日からちよつふ句なりけるにいかにおもはれけむ月の形にはなしかえ申されし」と言つてある
○畦止亭に云々——泊船集に「大坂畦止亭月下に送兒」

入月の跡は机の四隅哉

〔句元第・本朝文選・泊船集〕

古將監の古實をかたりて

月やその鉢木の日のした面

〔翁との水草〕

八月十五日

今宵誰よし野の月も十六里

〔笈日記集〕

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形

〔笈日記集〕

秋もはやばらつく雨に月の形

〔宇陀法師〕

畦止亭におゐて即興 月下送兒

月澄や狐こはがる兒の供

〔其便〕

玉川にて

飛鮎も月の光りのあまり哉

〔眞原〕

○夜ル竊ニ——東日記に
「後名月」と題す

○橋桁のしのぶは——己が
光に「後の名月石山にまふ
で」と書添へてある。此句は
なほ名月集・泊船集にも出
づ。又句解參考には「丸岡と
永平寺の間船橋といふ所四
十八艘をつなぎて往來のも
のを渡す」と前書ありて、
「橋桁をわたるは月をしの
ぶ哉」

玉川や此上あらば月日貝

（貝 類）

武藏野

むさし野や入方も見へず枝の月

（眞 蹟）

夜ル竊ニ蟲は月下の栗を穿ツ

（東 日記）

木曾の瘦もまだなをらぬに後の月

（木曾の 瘦）

歸庵に十三夜

木曾の瘦もまだ直らぬに後の月

（木曾の 瘦）

田家にやどりて

よめはつらき茄子かるゝや豆名月

此句は芭蕉翁いまだ俗のあらましことせし

比伊賀の國に有てつらねし也

橋桁のしのぶは月の名残哉

（己が 光）

（實の 市）

○露とくく——この句は
尾花・宇陀法師鐘編等にも
出づ

○硯かと——麥林集「櫻貝
けふや二見を蹄花」の前書
中に「かの蕉翁の硯かとひ
ろふやくばき石の露と残さ
れしむかしを感じ」とある

○今日よりや——この句宇
陀法師にも出づ。又芭蕉翁
略傳に上五「さびしさに」

橋桁のしのぶを月の餘波哉

(夢 哉)

露とくく心みに浮世すゝがばや

(甲子 吟行)

二見の浦にて

硯かとひろふやくばき石の露

(芭蕉 句選)

畫 讃

西行の草鞋もかゝれ松の露

(笈 日 記)

同行にわかれいづるとて 行くたふれ
ふすともはぎのはら 曾良 といひ置た
り行ものゝ悲しみ残るものゝうらみ双鳥の
わかれて雲にまよふがごとし予も又

けふよりや書付消さむ笠の露

(鳥 の 細 道)

同行曾良に別れたまふとて

けふよりや書付消さん笠のつゆ

(泊 船 集)

○雲霧の——句選拾遺に
 「甲州よし田」山家に所持ノ
 人ありしを今東武下谷羽志
 なるよし行脚証法より傳寫
 して出ス」と頭註あり

於君崎古吟に

松なれや霧ゑいさらゑいと引ほどに

(芭蕉)

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

(甲子吟行)

崑崙は遠く聞蓬萊方丈は仙の地也まのあた
 り士峰地を抜て蒼天をさへ日月の爲に雲
 門をひらくかとむかふところ皆表にして美
 景千變^ス詩人も句をつくさず才士文人も言
 をたち畫工も筆捨てわしる若貌姑射の山の
 神人有て其詩を能せんや其繪をよくせん歟

雲霧の暫時百景をつくしけり

(芭蕉句選拾遺)

手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜

(甲子吟行)

蝶鳥のしらぬ花あり秋のそら

(芭蕉句選拾遺)

○七夕や秋を——この句泊船集・四山集・星舎にも有磯海と同句形で出で、泊船集には「野竄亭」と前書あり

○ならはむ——泊船集に「ならふ」

○手本——泊船集に「手もと」。なはこの句一翁四哲集には前書は同一で、句は下記の如くあり「杉風家藏七種の巻物に萩の千本とあり百五十年來萩の手本も誤り來れり」と辯じてゐる。なほ勝峯氏の芭蕉俳句異同考には「七かぶの萩の手もとや星の縁〔秋の千草〕・「七株の萩にならはむ星の秋」〔逸書名〕の二句形をあげてゐる

人事

七夕のあはぬこゝろや雨中天

(鹽山井)

七夕や秋をさだむるはじめの夜

(有磯海)

たなばたや穗をさだむる夜のはじめ

(安日記)

合歡の木の葉ごしもいとへ星のかけ

(猿蓑集)

素堂の母七十あまり七としの姪七月七日に
ことぶきする萬葉七種をもて題とすこれに
つらなる者七人此結縁にふれて各また七翌
のよはひにならばむ

七株の萩の手本や星の姪

(韻船寮)

七株の萩の千本やほしの秋

(一翁四哲集)

吊初秋七日兩星

○高水に——暹照が歌は
「七夕にかさねばうとし絹
合羽 杉風」。句は陸奥衛・
箕日記にも出で、箕日記に
は後註あり

○蓮池や——鵜鷹追養集風
の前（寛保二年刊）によれ
ば、芭蕉が尾張鳴海なる千
代倉龜世の庭での吟である
と

○加賀の云々——泊船集に
は「かゝの國を過るとして」

元祿六文月七日の夜風雲天にみち白浪銀河
の岸をひたして烏鵲も橋杭をながし一葉梶
をふきをるけしき二星も屋形をうしなふべ
し今宵なを只に過さんも残おほしと一燈か
ゝげ添る折ふし暹昭小町が歌を吟ずる人あ
り是によつて此二首を採て兩星の心をなぐ
さめむとす

小町が歌

高水に星も旅寐や岩の上

（小）
泊文庫

蓮池や折らで其まゝ玉まつり

（千）
枕島掛

くま坂ざかと云所にて

熊坂が其名やいつの玉祭

（卯）
辰集

加賀の國を過とて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり

（箕）
泊船集記

○鳥部山——泊船集にはこの前書なし。笈日記にはなほ「是もいづれの秋にか待らん人間たゞ一日朝暮鐘聲をへだつといへる世の觀相なるべし」と支考が言添へてある

○尼壽貞が云々——泊船集にはこの前書なし

○甲戌の云々——泊船集には「此句前書續さるみのにありぬ」と註し、又字陀法師にもこのまゝの前書がある、なほ同書參照

加賀の國にて

熊坂をとふ人もなし玉祭り

(續 芭)

鳥部山

玉祭りふも焼場のけぶり哉

(笈 日記 記)

尼壽貞が身まかりけるときゝて

數ならぬ身となおもひそ玉祭り

(泊 船 藏 集)

甲戌の夏大津に侍しをこのかみのもとより
消息せられければ舊里に歸りて盆會をいと

なむとて

家はみな杖にしら髪の墓參

(泊 船 藏 集)

七月十五日

家はみな杖にしら髪の墓まいり

(笈 日記)

家はみな杖にしら髪や墓參

(字陀法師)

○白髮吟——文章略す

○金澤の云々——鳥の道には「金澤の……したひ來れる此風景……」とあり

其日先祖の廟にて

一家みな白髮に杖や墓参り

(芭蕉翁行狀記)

古郷墓

一家皆白髮に杖や墓参

(陸奥翁)

白髮吟 并序

一家みな杖にしら髮の墓まいり

(和漢文操)

むかしきけちゝぶ殿さへすまふとり

(小文章・泊船・蕉・俳諧書我)

むかし聞^ケ秩父殿さへすまひ取

(翁草)

金澤の北杖といふものかりそめに見送りて

此處までしたひ來る所々の風景過さず思ひ

つゞけて折節あはれなる作意など聞ゆ今既

別に望みて

物書て扇引さく餘波哉

(奥の細道)

○松岡にて云々——この前書は北枝の言葉である。その次に「笑ふて驢にきほひ出ばや 北枝となくく申侍る」と北枝の脇をのせてある

○町醫師や——「句解參考」所引に據る

○棧や——芭蕉翁發句集には中七「おもひ出る」

○碓打て——明和版野晒紀行には中七「我にきかせよ」

松岡にて翁に別侍し時あふぎに書て給る

もの書て扇子へぎ分る別哉

（俳風集）

加州北枝に別れたまふとて

もの書て扇子引さく名残哉

（泊船集）

町醫師や屋敷がたより駒迎

（五十番句合）

棧や先おもひいづ駒むかへ

（更科組行）

針立や肩に樋うつから衣

（江戸新道五十番句合）

ある坊に一夜をかりて

碓打て我にきかせよや坊が妻

（甲子吟行）

よしのにて

きぬたうちて我にきかせよ坊がつま

（續野）

よしのゝ奥に一夜あかして

○砧うちて——かしまたちに「白紙のたんさく柳舟庵にとむ」とある

○猿引は——この句、猿舞師・泊船集・今日の昔にも出づ

○升買て——笈日記には「住吉の市に立て」といふ前書があつたと記して居る。なほ同書参照。泊船集には「住よしの市」と題す。又笈の市には「今はむかし芭蕉翁の住吉に詣て九月十三夜たからの市にて」と述べてある

○おがみ——オガミ拜み

砧うちてわれに聞せよや坊が妻

(類虚たち)

聲すみて北斗にひゞく砧哉

(都芭)

猿引は猿の小袖をきぬた哉

(續有難海)

あふみ路を通り侍る比日野山のほとりにて
胡麻といふものに上の絹とられて

剥れたる身には砧のひゞきかな

(芭蕉翁)

住吉の市に立てそのもどり長谷川畦止亭に
おの／＼月を見侍るに

升買て分別かはる月見かな

(墨吉物語)

住吉にて

升買て分別かはる月見かな

(芭蕉翁行状記)

たふとさに皆押あひぬ御迂宮

(雑歌摘集)

宮内はことおさまりて下宮のせんくうおが

○ひいと啼——箕日記の本文参照。金馬雜會には「さる澤の池のほとりにて」と前置あり。なほこの句芭蕉句選には中七「尻聲悲し」とある。

○堅田にて——橋平樂には眞蹟の短冊によつて句をあげてあるが、その前置は「かたにふしなやみて」とある。

み侍りて

たふとさにみなおしあひぬ御迂宮

(泊船集)

人に米をもらひて

よの中は稻かる頃か草の庵

(續深川)

動物

女をと鹿や毛に毛がそろふて毛むづかし

(いねはひ)

ひいと啼尻聲かなし夜の鹿

(箕日記・芭蕉行狀記・泊船集)

びいとなく尻聲悲し夜の鹿

(陸奥千鳥芭蕉集附録)

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉

(猿蓑船集)

病ム鴈のかた田におりて旅ね哉

(枯尾花)

○刈あとか——不覺閑三句
中の一

○稻雀——この句笈日記には一六二頁の「草の戸をしれや」の句に引いて出でゐる。やはり木曾塚での吟であらう

○老の名の——この句木枯・續猿蓑・藤詰庵人日記・泊船集等にも出づ。入日記には芭蕉の手紙の中に見え「保生左太夫三吟に」と前置し「少將の尼の歌の餘情に候」と自ら言つてゐる。この手紙は芭蕉翁遺蹟集中にも收めてある

桐の木にうづら鳴なる塀の内
鷹の目の今やくれぬと啼鶉
鷹の目もいまや暮ぬと啼鶉
(泊猿集)
(龍川集)
(小文庫・泊船集・字記・法師)

田中の法藏寺にて

刈あとや早稲かたゝの鳴の聲
木啄のはしらをたゞく住居かな
稻雀茶の木畠や逃どころ
花に來て花野に歸る燕かな
めにかゝるくもやしばしのわたり鳥
老の名のありともしらで四十から
山中十景 高瀬漁火
いさり火にかじかや浪の下むせび
(夏日記)
(芭蕉句選拾遺)
(西の雲・連日記・泊船)
(芭蕉句選拾遺)
(芭蕉句選拾遺)
(初鰯)
(卯辰集)

○かゞり火に——東西夜話
山中の夜話に「此地に十景あり先師むかし高瀬の漁火といふ題をとりて」としてこの句を出してゐる。なほ同書参照

○聴閑——陸奥千鳥にはこの前書なし。なほ泊船集に「此句いづれの集にかいがばせを菴と前書あれど、是は深川の菴なるべし」と附記してあるが、菴虫庵集に「ある日菴面壁の畫圖一紙懷中よりとり出して是をこの庵の物にせんと終夜かゝれしとてさんに　みのむしのねをきくにこよくさの庵　をしいたゞき則其初五の字をつみてみのむし庵と號すべしといへばよしとなり」とある。なほ同書参照

かゞり火にかじかや浪の下むせび
江鮭ありもやすらん富士の湖
蜻蜓やとりつきかねし草の上

聴閑

菴虫の音を聞に來よ艸の庵

くさの戸ぼそに住わびてあき風のかなしげ
なるゆふぐれ友達のかたへいひつかはしける

菴虫の音を聞にこよくさのいほ
盆すぎて宵闇くらし虫の聲
むざんやな甲の下のきりぐす

加賀の小松と云處多田の神社の寶物として
實盛が菊から草のかぶと同じく錦のきれ有

(東西夜話)

(芭蕉句選拾遺)

(菴日記)

(陸奥集・泊船
陸奥千鳥)

(菴集)

(小文庫
泊船集)

(奥の細道
陸奥千鳥)

○むざんやな——陸奥千鳥
には「太田神社寶物實爲證」と
前書あり。この句字陀法
師にも出づ

○白髪ぬく——あめ子には
髪を髭と誤つてゐる、今正
した。又芭蕉句選には中七
「机の下や」と誤つてゐる
○淋しさや——草庵集にこ
の句について句卒の機軸談
が見える

○海の屋——猿蓑に「病
鴈の」(一四二頁)の次に並
んで出てゐる

遠き事ながらまのあたり憐におぼえて

むざんやな甲の下のきりぐす

(猿蓑集)

多田の神社にまふで、木曾義仲の願書并實

盛がよろひかぶとを拜ス

あなむざんや甲の下のきりぐす

(卯辰集)

白髪ぬく枕の下やきりぐす

(泊船集)

淋しさや釘にかけたるきりぐす

(草庵集)

しづかさやゑかゝる壁のきりぐす

(芭蕉翁消息集)

床に來て躰に入やきりぐす

(木枯念題)

朝なく手習すゝむきりぐす

(夢語庵日記)

猪の床にもいるやきりぐす

(芭蕉句選拾遺)

海士の屋は小海老にまじるいと哉

(猿蓑集)

堅田にて

海士の屋は小海老にまじるいと哉

（泊船集）

植物

庭掃て出るや寺に散柳

（奥の細道）

大聖寺の城外金昌寺といふ所にとゞまる猶
加賀の地也曾良も前の夜此寺にとまりて

終宵秋風きくやうらのやま

と残る一夜の隔千里に同じ我も秋風を悶て
衆寮に臥ばあけぼのゝ空ちかふ讀經の聲澄
まゝに鐘板なつて食堂に入けふは越前の國
へと心ざし少卒にて堂下にくだるを若僧共
紙硯をかゝへ階のもとまで追來るおりふし
柳ちれば

○題掃て——東西夜話に
「なにがし金昌寺といふ寺
は先師一夜の秋をわびて庭
はきて出ばや寺にちる柳と
いへる其柳のあともゆかし
云々」と見える

○我宿の——「此句は風雲
のもとよりものかりにおこ
せたるに書込ておくられし
とぞ」と附記せり

○萩原や——泊船集に「萩
はらや一夜はやどせ山の犬
この句讀みなしぐりの比也
また 狼も一夜はやどせ萩
がもとと加様にもきこえ侍
りけり笈日記には声がもと
とありぬ」と記してある

庭はきて出ばや寺に散やなぎ（鳥の道）

庭はいて出ばや寺にちる柳（泊船集）

庭拂て出ばや寺にちる柳（字陀法師）

よるべをいつ一葉に虫の旅ねして（東日記）

我宿の淋しさおもへ柵一葉（盲歌仙）

文ならぬいろはもかきて火中哉（千宜理記）

人毎の口に有也した桧（千宜理記）

色付や豆腐に落て薄紅葉（芭蕉附吟百韻）

萩の聲こや秋風の口うつし（續山井）

寝たる萩や容顔無禮花の顔（續山井）

萩原や一夜はやどせ山の犬（鹿島遊樂）

狼も一夜はやどせ萩がもと（泊船集）

○一家に——蟬丸げにも出でその前書は奥の細道の本文とやゝ異同がある。鳥の道はほゞ同文で、「只けふ親しらず、ひと問へだてゝにしの方、おのこ送りて、ふるさとへかへる文、御あとしたひ、御めぐみ、泊る方、いひ捨て出哀さしはし」の數詞所異るのみ

○波の間や——芭蕉句選に上五「波の間に」

狼も一夜はやどせ蘆の花

(笈日記)

一家に遊女もねたり萩と月

(奥の細道)

一家に遊女も寝たり萩と月

(泊船集)

かど小松にて

ぬれて行人もおかしや雨の萩

(泊船集)

ぬれて行や人もおかしき雨の萩

(印の竿)

観水亭雨中會

ぬれて行や人もおかしき雨の萩

(雪丸げ)

波の間や小貝にまじる萩の塵

(奥の細道)

ますほの小貝ひろはむと種の濱に舟のり出

たり法花寺にさがりて酒のむ

浪の間や小がひにまじる萩の塵

(類附子)

○いろの漬云々——泊船集
にはこの前書なし。又四幅
對には「色ノ漬ニ泛フ舟」と
前書あり

○予間居云々——これは杉
風の文である

○月かげを——芭蕉句選年
考による

○風色や——芭蕉句選拾遺
三冊子・芭蕉翁發句集には
皆中七「しどろに植し」とあ
り。なほ句選拾遺には「元七
戌此句藤堂氏玄虎子に達れ
し時庭半ばに作りたるを云
り表六句有」と頭註あり

いろの漬に誘引れて

小萩ちれますすほの小貝小盃

(泊船 船壽 集子)

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

(三小 上文 吟庫)

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

(泊船 草・木 枯 集)

予間居探茶庵それが垣根に秋萩をうつし植

て初秋の風ほのかに露置わたしたる夕べ

白露もこぼれぬ萩のうねり哉

(葉 集)

月かげをこぼさぬ萩のうねりかな

(船の 水)

玄虎子の宅

風色やしどろに植る庭の萩

(芭蕉翁全傳)

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

(奥の細道)

○加賀の國云々——泊船集
は「かゞ小松にて」と前書す

○けなりがらせよ——羨ま
しがらせよの意

加賀の國小松といふ處にて

しほらしき名や小松吹萩⁽³⁾薄

(旅船集發)

北國行脚の時いづれの野にや侍りけんあつ
さぞまさるとよみ侍りしなでしこの花さへ
盛過行頃萩薄に風のわたりしを力に旅愁を
なぐさめ侍りて

しほらしき名や小松吹萩薄

(壁九げ)

龍か岡山姿亭

蕎麥もみてけなりがらせよ野良の萩

(續塞菰)

毒海長老我草の戸にして

身まかり侍るを葬りて

何ごともまねき果たるすゝき哉

(續深川)

重陽

○起あがる——眞蹟讀に
「日にほころびあき花は雨
にはたなさけふかし」と前
書あり

○瘦ながら——この句は日
記にも出で「菊如行夢」と前
書あり、讀讀としてある

○秋をへて——後日記に書
讀四幅の一としてある

○十六夜——後日記には別
にまた陸奥千鳥と同じ前書
でも出てゐる。泊船集には
前書なし

○蓮池の主翁——山口素堂
をいふ

盃の下ゆく菊や朽木盆
盃や山路の菊と是を干す

(當世
六百番
句合)

(坂東太閤)

艸庵雨

起あがる菊ほのか也水のあと
瘦ながらわりなき菊のつぼみ哉

(續
讀
集)
(續
讀
集)
(續
讀
集)

菊花ノ蝶

秋をへて蝶もなめるや菊の露
秋を経て蝶もなめるや菊の霜

(後
日記)

(小
文
庫)

十六夜

いさよひのいづれか今朝に残る菊

(後
日記)

貞享五戊辰菊月仲句

蓮池の主翁又菊を愛すきのふは盧山の宴
を開きけふは其酒の餘りとすゝめて獨吟

芭蕉俳句集

○十六夜の月と——千鳥掛
に「深川茶室より文の中に」
として、作者は芭蕉と
記してある

○山中や——東西夜話に
「山中(中略)一とせ芭蕉の
菊は手おらずといへりける
が」と見える

○山中や菊は手折らじ——
眞蹟に「北海の磯つたひし
て加州やまなかの涌湯に浴
ス里人の曰このところは扶
桑三の名湯の其一なりとま

のたはぶれとなす猶おもふ明年誰かすこ
やかならん事を

十日菊

いさよひのいづれか今朝に残る菊

(證奥千鳥)

十六夜のいつしか今朝に残る菊

(菊草)

十六夜の月と見はやせ残る菊

(千鳥掛)

山中や菊はたおらぬ湯の匂

(奥の細道)

加州山中の重陽

山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ

(泊瀧船旅寒)

温泉言葉書あり略之

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ

(山中集)

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反

(泊瀧船日記)

ことに沿する事しはくな
れば皮肉なるほひ筋骨に通
りて心神ゆるく偏に顔色を
とむむるこゝちす彼桃原も
舟をうしなひ慈童が菊の枝
折もしらず」と前書あり

○そのころ云々——元祿四
年十月の初め平田の李由を
訪ねた頃をいふ。後日記の
本文参照
○琴箱や——泊船集に「此
句は去來の物がたりにて聞
侍りぬ」と附記せり

左柳亭

はやくさけ九日もちかし菊の花

(室 肥)

左柳亭

はやくさけ九日もちかし菊の花

(宇陀船法師集)

きくの露落て拾へばぬかごかな

(小船文庫)

堅田祥瑞寺にて

朝茶のむ僧靜也菊の花

(ばせを盟)

朝茶のむ僧しづかさよ菊の霜

(袖表紙)

見どころのあれや野分の後の菊

(小文庫・泊船・陸奥集)

そのころそのほとりの田家に宿して

稲こきの姥もめでたし菊の花

(泊船日記集)

琴箱や古物棚の背戸の菊

(墨吉物集)

○片田云々——むすび塚
 (元文五年市山探、には市山の隠する眞蹟を載せてあり、それには「湖上堅田の何某木沈醫師のかみの亭にまねかれてみづから茶をたて酒をもてなされる野菜八珍の中に菊花のなます猶からばしければ」と前書がある)

○草の戸や——泊船集に
 「此句は乙州が酒を携えて來りし時の事なるよし」と附記す
 ○菊の後——この句泊船・四山集・土大根等にも出で土大根には句についての説が見える

片田何某が亭にて

蝶も來て酢を吸ふ菊のすあへ哉

(篇 集)

旅行

草の戸に日暮てくれし菊の酒

(如 月)

おなじ年九月九日乙州が一樽をたづさへ來

りけるに

草の戸や日暮てくれし菊の酒

(泊 船 日 集 記)

菊の後大根の外更になし

(陸 奥 千 鳥)

借水亭にて

影待や菊の香のする豆腐串

(杉 丸 太)

菊の花咲や石屋の石の間

(藤 船 集 寶)

八町堀にて

○菊の香や庭に——この句
鑑笑・泊船集にも出で前書
なし。又小文庫には「前書
きれて見えず」と前書して
出づ

○重陽云々——笈日記には
「九月九日」と前書してあ
る。芭蕉翁蹟集所載の書
簡には次の「奈良は幾代の」
の句と二句共につゞちて出
てゐる

菊の花咲や石屋の石の間

(翁集)

元祿辛酉之初冬九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る
更はその比は花いまだめぐみもやらず菊花
ひらく時則重陽といへるころによりか
つは展重陽のためしなきにしもあらねば
なを秋菊を詠じて人々をすゝめられけ
る更になりぬ

菊の香や庭に切たる履の底

(續猿蓑)

素堂菊園に遊びて

菊の香や庭にきれたる沓の底

(寧註庵人日記
芭蕉翁蹟集)

重陽 南都に一泊

菊の香や奈良には古き佛達

(腰奥千鳥
笈日記)

ならの重陽

芭 蕉 俳 句 集

○菊の香に——菊の香に

「此句菊の香やならにはふるき佛達といへる同日の吟なり」と記してある

○菊に出て——笈日記及行狀記の本文参照

○白菊の目に——この句笈日記・菊の塵・泊船・後れ馳等にも出づ。なほ笈日記の本文参照すべし

○折ふしは——眞蹟讃讃に上五「折くは」

○裸子の——ばせを懸には「裸子の木槿の枝持たる

菊の香や奈良にはふるき佛達

(泊船集)

ならにて

菊の香や奈良はいく代の男ぶり

(泊船集)

くらがり峠にて

菊の香にくらがり登る節句かな

(病船の集香)

菊に出て奈良と難波は宵月夜

(渡橋・東華集)

きくにいでゝ奈良と難波は薄月夜

(芭蕉翁行狀記)

しら菊の目にたてゝ見る塵もなし

(木がらし)

菊花の讃

折ふしは酢になる菊のさかな哉

(泊船集)

花むくげはだか童のかざし哉

(東綴日記)

裸子の木槿の花もちたる畫の讃に

に『東西夜話によれば越中石動の従古亭にこの掛物がかゝつてゐた由

○道のべの——或間珍・一葉集には「道ばたのむくげは馬にくはれけり」

○潮顔に——泊船集には前書なく「此句前がきみなしぐり集に見えたり」と註す

○葬は——この句金比羅會にも出で前書なし

花むくげ裸わらはのかざしかな

(東西夜話)

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

(甲子吟行)

道の邊の槿は馬の喰ひけり

(伊達文)

道野邊の木槿^{ウグヤ}は馬に喰れたり

(歴代滑稽仙)

和ス角蓼螢ノ句ニ

あさがほに我は食くふおとこ哉

(蘆船集要)

僧朝顔幾死かへる法の松

(甲子吟行)

あさがほの花に鳴行蚊のよはり

(芭蕉句選拾遺)

嵐雪がゑがきしにさんのぞみければ

葬は下手のかくさへ哀也

(いづを背
泊船集)

朝良は酒盛しらぬさかりかな

(嘆野)

芭蕉俳句集

○人／＼郊外に——泊船集
には「旅たちけるころ人々
郊外に送りて三盃を傾ける
に」と前書あり

○葬や晝は——この句炭俵
泊船集・四山集・字陀法師等
にも出で、又小文庫・今日の
昔・本朝文選等には閉關之
説がある。参照すべし

○蘭の香や——芭蕉翁眞蹟
集に「てふと云ける女あが
名に發句せよと云て白きき
ぬ出しけるに書付はべる」と
甲子吟行の本文と同一の前
書あり

○守榮院——伊勢國

人／＼郊外に送り出て三盃を傾侍るに

朝がほは酒盛しらぬさかり哉

(箕
船日
集記)

閉關之比

葬や晝は錠おろす門の垣

(藤の實)

深川閉關の比

葬や是も又我が友ならず

(今日の昔)

蘭の香やてふの翅にたき物す

(甲子吟行)

美人圖

蘭の香や蝶のつばさにたきものす

(箕
日記)

守榮院

門に入ればそてつに蘭のにほひ哉

(箕
日記)

守榮院

○ひよろ／＼と猶露けしや
—この句小文庫・更科紀行・泊船集にも出づ

○野菊まで——文蓬萊に
「野菊までつかるゝ蝶の羽おれてと云第三は芭蕉が句也翻して今の句になす」とある。これによると芭蕉の附句によつた沾蝶の句とも解されるが、句主は芭蕉と明記してある

○秋海棠——東西夜話に
「先師むかし湖南の曲翠亭におはして是も水鉢のあたりに此花の咲て侍りしを此もの殊に句のあるまじき花なりとて秋海棠西瓜の色に咲にけりといひ捨られしが誠に花の色は洗はゞ落ぬべき也」とある

門に入れば蘭に蘇鐵のにほひ哉

（泊船集）

悦堂和尚の隠室にまゐりて

香をのこす蘭帳蘭のやどり哉

（鹿子の渡）

見るに我もおれる計ぞ女良花

（續連珠）

ひよろ／＼と猶露けしや女郎花

（曠野）

ひよろ／＼とこけて露けし女郎花

（箕日記）

米のなき時は瓢にをみなへし

（七拍）

野菊まで疲れて蝶の慈童哉

（文蓬萊）

畫譜

秋海棠西瓜の色に咲にけり

（正風堂根體）

茅舎ノ感

芭蕉野分して鹽に雨を聞夜哉

（此曲集）

○枝ぶりの——後れ馳に
「此句自畫の芙蓉の實に見
へたり元祿のはじめの吟な
るべし」と註す

○雞頭や——この句松滿集
續猿蓑・泊船集にも出づ

○後越の國云々——雪丸げ
には「細川春庵亭にて」と前
書あり

此寺は庭一盃のばせを哉

（俳諧會我）

枝ぶりの日どにかはる芙蓉かな

（後れ馳）

畫譜

枝ぶりの日にくかはる芙蓉哉

（正風彦根體）

霧雨の空を芙蓉の天氣哉

（泊船集）

雞頭や雁の來る時尙あかし

（初鰯）

草いろくおのく花の手柄かな

（波日記・俳諧會我・泊船集）

醫家入

藥欄にいづれの花を草まくら

（みとせ詩）

越後の國高田醫師何しを宿として

藥園にいづれの花を草枕

（泊船集）

閑人の茅舎をとひて

○棧や——泊船集にも「木曾路にて」と前書して出で句形更科紀行に同じ

○梧うごく——三冊子には「秋風や梧に動きてつたの霜」

蔦植て竹四五本のあらし哉

(甲子吟行)

盧牧亭

蔦植て竹四五本のあらし哉

(箕日記)

蔦の葉はむかしめきたる紅葉哉

(信夫拙)

棧やいのちをからむつたかつら

(止科紀行)

木曾路にて

棧や命をからむ蔦もみぢ

(額窓)

梧うごく穠の終りやつたの霜

(小瓢文集)

みのゝくに朝長の墓にて

苔埋む蔦のうつゝの念佛哉

(花の市)

鬼灯は實も葉もからも紅葉哉

(小瓢文集)

夕がほや秋はいろくの飄かな

(蟻野)

○夕がほや秋は——此の句
 爲草・伊達衣・陸奥千鳥・泊
 船・宇陀法師・梅澤等にも出
 づ。曜野には覺部に收めて
 あるが他の諸集は皆秋季と
 してゐる。千鳥掛の前書に
 よつて秋季の作たることは
 明かである。「世所」とは暹
 海をさす。なほ此の句宰相
 自筆の類題句集には「大津
 なる松洞(カ)がもとにて炭
 とりかきつけける」と前書
 して出てゐる
 (草の戸を——泊船集には
 「無名庵」と題して出づ
 ○青くても——この句陸奥
 千鳥・染系にも出で共に前
 書なし
 ○冬瓜や——西華集に「此
 句は伊賀に居給へる時の作
 也是には老女に淫ふなどい
 へる題もあらばやと申され
 しか」とある

初秋中一 比所に遊て

夕がほや秋はいろ／＼のふくぺ哉 (千鳥掛)

三羽鳥集にあひ給て

かくさぬぞ宿は菜汁に唐がらし (鑑 耳)

元禄三年の秋ならん木曾塚の舊草にありて

敵戸の人／＼に對す

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし (箋 日記)

深川夜遊

青くてもあるべき物を唐がらし (深川・泊船集)

冬瓜やたがいにかはる顔の形 (西華集)

芋あらふ女西行ならば哥よまむ (甲子吟 舞行)

仙風が悼

○唐柜や——この句六百番
發句合・鎗鎗にも出づ

○三句——他の二句は一四
三頁の「刈あとや早稻」と一
一六頁の「有とあるたとへ」
の二句。この句芭蕉翁發句
集には「粟稗にまづしくも
あらず草の庵」とあり

○新宅——鳴海知足の新
宅。記念題には「鳴海知足
亭」と前書して下五「背戸の
秋」とある

手向けり芋ははちすに似たるとて

(國深川)

唐柜や軒端の萩のとりちがへ

(江戸廣小路)

不覺閑 三句

杉の竹葉軒といふ草庵をたづねて

粟稗にまづしくもなし草の庵

(寛政日集)

貞享五戊辰

七月廿日於竹葉軒長虹興行

粟稗にとぼしくもあらず草の庵

(秋の日)

賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

(千鳥掛)

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の秋

(泊船集)

いせの斗從に山家をとばれて

○蕎麥はまだ——この句、
日記にも出づその本文参照
すべし又泊船集には「伊賀
山中二句」と題して次の「松
たけやしらぬ木の葉のへば
り付」と共に出づ
○初茸やまだ——この句、
舞師・泊船にも出で、又芭蕉
句選に「初茸やすたりかぞ
へぬ秋の露」
○まつ茸やしらぬ——この
句、
日記・陸奥千鳥・忘庵等
にも出づ、
箕日記の本文参
照
○茸狩や——句選拾遺に
「畫堂元伊賀今湖東辻村僧
冠上家珍」と頭註あり
○早稻の香や——この句、
展集（前書）越中に入て、
有磯海（此句は元祿二年奥
の行脚に香髪を送り秋風
たつ比三越ぢにかゝり磯
所のほ句と申つたへける）
と註す、
州にて、
陸奥千鳥・泊船集
等にも出づ
○籠り居て——泊船集「美
濃如水別墅」と前書、
宇陀
法師にも出づ

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな （續 蕉 詩）

初茸やまだ日敷へぬ秋の露 （小 文 庫）

松茸やかぶれた程は松の形 （俳 諧 會 携）

まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく （續 蕉 詩）

茸狩やあぶなきことに夕時雨 （芭蕉句選拾遺）

かどの國に入

わせの香や分入右は有磯海 （奥の細道）

早稻の香や分入道はありそ海 （類 柑 子）

想水子別墅にて即興

こもり居て木の實艸のみひろはゞや （後 の 旅）

祖父親孫のさかえや柿みかん （胸 摺）

堅田柳瀬可休亭にて

○祖父と親——句選拾遺に
「元四堅田柳瀬可休亭にて
と有中七孫のさかへやと
有」と頭註あり

○里ふかく——句選拾遺に
「元七茂片野氏望翠に八月
七日夜會歌仙有」と頭註あ
り

○道ほそし——この句泊船
集には春部に收め、「相撲と
り草は蕨草の事なるべしと
春季に入れぬ秋の句たる
や」と疑つてゐるが、笈日記
に「そのうちは武の深川に
有しが去年の秋文月の始ふ
たゝび蕨草に歸りて」とあ
るから勿論季秋である。但
し相撲草はすでに毛吹草に
も「春ともいへり不審」とあ
つて蘊といふ説もある

祖父親孫の榮や柿橘柑

(芭蕉集)
(芭蕉翁句集)

八月七日望翠宅にて 歌仙

里古りて柿の木持ぬ家もなし

(芭蕉集全傳)

里ふかく柿の木もたぬ家もなし

(芭蕉句選拾遺)

澁柿や一口はくらふ猿のつら

(芭蕉句選拾遺)

榎の實ちるむくの羽音や朝あらし

(笈日記集記)

木曾のとち浮世の人のみやげ哉

(更科紀行)

よにありし人にとらせん木曾のとち

(更科紀行真辨)

道ほそし相撲とり草の花の露

(笈日記集記)

於吉野

天皇の廟にまうで

○芦の穂や——芭蕉翁發句
集には「東寺を過るに、萩の
穂や頭をつかむ羅生門」
○狼も——この句一四八頁
にも出しておいた

○神前——鹿島の神前であ
る

御廟千とせしのぶは何を忍草
御廟年經て忍は何をしのぶ草
御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草
芦の穂やかしらを廻羅生門
狼も一夜はやどせ蘆の花
わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

雜

雨の日や世間の秋を堺町
見渡せば詠れば見れば須磨の秋
秋十とせ却て江戸を指古郷

神前

(孤松)

(甲子吟行)

(泊船集)

(寛政鹿島紀行)

(笈日記)

(甲子吟行
續行)

(江戸廣小路)

(芝香)

(甲子吟行)

○送られつ——笈日記本文
参照

○秋涼し——雪丸げに「少
幼童にいざなはれて」と前
書あり

此松の實ばへせし代や神の秋

(鹿の島
和詣)

田家

かりかけし田づらのつるや里の秋

(鹿島
詣)

おくられつおくりつはては木曾の秋

(曠野・其日
記・治・集)

送られつ別ッ果は木曾の秋

(更科
紀行)

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜なすび

(島の
細道)

松玄庵樂會即興

残暑しばし手毎にれうれ瓜茄子

(西の
雲)

訪艸庵

秋さびし手毎にむけや瓜茄子

(西の
雲)

ある艸庵にいざなはれて

芭蕉俳句集

○さびしさや——四幅對にはいろの濱の五句中最後に
出で「その浦の寺にあそび
て」と前書せり

○胡蝶にも——この句隨興
千鳥後の旅にも出で、後の
旅にはこれについだ照句も
出てゐる

○秋の色——草庵集に「秋
の色ぬかみそつぼもなかり
けり」といふ句は兼好の賛と
て書たまへるをわは庵の壁
に掛て對面の心ちし侍り」と
ある

秋さびし手ごとにむけや瓜なすび

(泊船集)

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

(興の細道四幅對)

越前いろの濱にて

さびしさや須磨にかちたるうらの穂

(初船集)

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

(己船集)

庵にかけむとて句空が書せける兼好の繪に

秋のいろぬかみそつぼもなかりけり

(杵庵集)

女木澤桐奚興行

秋に添て行ばや末は小奈川

(陸奥千鳥泊船集)

砂村利合をたづぬる

秋に添ふて行ばや末は小松川

(裸麥)

幾穗のせまりて芥子に隠しけり

(翁草)

○面白き——この句初蟬・
四山集にも出づ

○此秋は——この句露吉物
語・泊船集・芭蕉翁行狀記に
も出づ。なほ笈日記の本文
参照すべし
○秋深き——笈日記の本文
参照。陸奥千鳥には「大坂芝
柏興行」と前書あり

車庸亭

面白き穠の朝寐や亭主ぶり

(笈)
船日記記

あるじは夜あそぶことをこのみて朝寐せら
るゝ人なり宵寐はいやし朝起はせはし

おもしろき爍の朝寐や亭主ぶり

(松)
濟集

なに喰て小家は秋の柳蔭

(茶)
の草子

旅懷

此秋は何で年よる雲に鳥

(笈)
日記

秋深き隣は何をする人ぞ

(笈)
日記集記

國分寺懷古

伽藍なし秋のみ深き木々の奥

(笈)
隠

むかふが丘

むかふから暮て見せけり丘の秋

(笈)
隠

○浦を——「酒を」の誤か

○こ——松葉。この句如行
子にも出で下五「米説」と
あり

○寒けれど二人旅ねは——
笈日記に「此時は越人も具
せられしとかや」と記して
ある

冬

時候

月の鏡小春にみるや目正月

(續山芭)

元起和尙より浦をたまはりけるかへしにた
てまつりける

水寒く寢入かねたるかもめかな

(渠集)

旅宿

ごを焼て手拭あぶる寒さ哉

(笈泊船日記)

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

(笈の小文)

寒けれど二人旅ねはおもしろき

(笈日記)

越人と吉田の驛にて

○寒けれど——泊船集・合歌のいびきは薩野と同句形にして、前者には「笠日記におもしろきとありぬ」と註し、後者には「よし田に泊る夜」と前書せり。如行子には「夢川の國いらことへふ所に杜國といひし此道のすき人有翁むかしよりむつまじくかたり給ひけるゆへかの所たつね給ふ這すから猶月十日の夜よし田にて名古屋の越人を伴ひければ」と前書がある

○鹽鯛の——句兄弟・陸奥千鳥・泊船集・流川集にも出づ

○飯白く——芭蕉翁發句集に中七「洗ひ上たる」

○から鮭も——陸奥千鳥・泊船集にも出づ

寒けれど二人旅ねぞたのもしき
鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店
葱白く洗ひたてたるさむさ哉

仙化が父退善

袖のいろよごれて寒しこい鼠
から鮭も空也の瘦も寒の内

鉢たゝきのうた

霜の夕にねをそへてうかれ友鳥行ききは
たのしき國のつれづれにかほる茶の花目
さまし夢にひとつまいれいざひとつ南無
あみだく
此曉のひとこゑにふゆの夜さへもなく千
どりいざきかむ南無阿彌陀く

からざけも空也の瘦も寒の内

(薩野)

(薩子)

(泊船集)

(芭蕉句選拾遺)

(陸奥)

○月花の——この句韻鑑・小文庫・泊船集にも出づ

芭蕉俳句集

○何をこの——芭蕉句選・芭蕉翁文選には「何をこの師走の市に行からず」
○かくれけり——此句はほ新花鳥・己が光・泊船集にも出づ

月花の愚に針たてん寒の入
鴈さはぐ鳥羽の田づらや寒の雨
月白き師走は子路が寝覺哉

(蔵) 藤子
(西) 華集
(孤) 船集
(松)

十二月九日一井亭興行

たび寐よし宿は師走の夕月夜
何に此師走の市へ行烏
何に此師走の市にゆくからす
何をこの師走の市を行からす
かくれけり師走の海のかいつぶり

草津にて

のがれけり師走の海の鵜カイヅツ
成にけり成にけりまで年の暮

(熱) 田三歌仙
(生) 駒堂
(花) 摘
(泊) 船集
(色) 杉原
(蓮) の 實
(六) 百番授句合

○菜飯——ばせを鹽には
「菜飯」と振假名してある

○年くれぬ——甲子吟行・
追馬狩・この華・今日の昔等
にも出で今日の昔には甲子
吟行の本文と同一の前書あ
り

○乞て喰——菜集に「もら
ふてくらひこふてくらひや
をらかつゑもしなすとしの
くれければ」とあり
○としのくれければ——泊
船集には「としのくれかゝ
れば」

○月雪と——この句篇突・
泊船・四山集・菜集にも出づ

わすれ草菜飯につまん年の暮
旅行

年くれぬ笠着て草鞋はきながら
目出度人の數にもいらん年のくれ
乞て喰貰ふてくらひすがにとしのくれけ
れば

めでたき人の數にもいらむ老の暮
月雪とのさばりけらしとしの昏
ふるさとや臍の緒に泣年の暮

歳暮

代々の賢き人々も古郷はわすれがたきも
のにおもほへ侍るよし我今をはじめの老
も四とせ過て何事につけても昔のなつか

(江戸蛇の巻)

(孤松)

(貞享三年
其角就見帖)

(慶應千鳥
泊船集)

(續虚栗)

(隅野・波小文
泊船集)

芭蕉俳句集

○蛇の生ける——この句小
文庫・泊船集・千句録・東葉
集にも出づ。句形麴獅子に
同じ

○分別の——この句小文
庫・陸奥千鳥・泊船集・二つ
物にも出づ

しまゝにはらからのあまたよはひかた
ぶきて待るも見捨がたくて初冬の空のう
ちしぐるゝ比より雪を重ね霜を経て師走
の末伊陽の山中に至る猶父母のいまそか
りせばと慈愛のむかしも悲しくおもふ事
のみあまたありて

古郷や瞬の緒に泣としのくれ

(千鳥掛)

蛤の生るかいはれとしの暮

(麴獅子)

蛤もいける甲斐あれとしの暮

(陸奥千鳥)

盗人に逢ふたよも有年のくれ

(有隣海・國
猿蓑・泊船)

分別の底たゝきけり年の昏

(翁草)

古法眼出どころあはれ年の暮

(三つの節)

廿九日立春ナレハ

春やこし年や行けん小晦日

(千宜理記)

○旅人と——この句箋の小
文・泊船集（前書なし）・夏の
月（故郷に題る道中の吟）
と前書）にも出づ
○はやこなたへと云々——
論曲梅枝の一節で原本には
節譜をも附して居る

○初しぐれ猿も——眞珠に
「あつかりし夏も過悲しか
りし秋もくれて山家に初冬
をむかへて」と前書あり

天文

人のかたへ初て行て

初しぐれ初の字を我時雨かな

（芭蕉句選松澤）

十月十一日饒別會

旅人と我名よばれん初霽

（續 虛 栗）

はやこなたといふ露のむぐらの宿はうれ
たくとも袖をかたしきて御とまりあれやた

び人

たび人と我名よばれむはつしぐれ

（千 鳥 掛）

初しぐれ猿も小簀をほしげ也

（猿・泊船集）

伊賀へ歸る山中にて

○けふばかり——この句續
猿蓑・笈日記・泊船集・北國
曲等にも出ていづれも前書
なし。なほ笈日記の本文參
照

○一時雨——芭蕉句選拾遺
に「戸田權太夫利胤青龍院
溪即日節と翁手帳に書村
有」と頭註あり

○草枕——嘯野・曉興千鳥
「尾張荷分が宅に汗を入る
」と前書あり」にも出づ

○旅亭云々——熱田三歌仙
には「旅亭桐葉の主心ざし
遠からざりければ藪といま
らんとせし程に」とあり。
又句選拾遺に「元二短冊に
書て桐木にたまふ」と頭註
あり

初しぐれ猿も小簑をほしげ也 (卯辰集)

元祿壬申冬十月三日 許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨 (韻 卷)

行雲や犬の逃ぼえむらしぐれ (江戸新選)

行雲や犬の欠尿むらしぐれ (六百番經句合)

一時雨礫や降て小石川 (江戸廣小路)

いづく霽傘^{カサ}を手^{カサ}にさげて歸る僧 (東日記)

草枕犬も時雨ゝかよるのこゑ (甲子吟行)

旅亭桐葉の主心ざしあさからざりければし

ばらくとゞまらむとせしほどに

此海に草鞋すてん笠しぐれ (續箱物略)

熱田にて

○しぐれ行や——詳諸實我
 (前書なし)・もとの水(中七
 「舟の帆づなに」にも出づ)

○「尾根は——芭蕉句選拾
 遺に下五「雨の雪」とあり
 て、「貞四富士の雪の此句い
 づれに決ス哉否不詳併名所
 の句心得てすべしとあれば
 此句可也」と頭註あり

此海に艸鞋を捨ん笠しぐれ

(芭蕉句選拾遺)

離別

しぐれ行や船の舳綱にとり付て

(狂歌)

不二

一尾根はしぐるゝ雲かふじのゆき

(泊船集)

途中時雨

笠もなき我を時雨るゝか何とく

(鶴田三歌仙)

みちのほとりにてしぐれにあひて

かさもなき我をしぐるゝかこは何と

(柴集)

途行吟

山城へ井出の駕籠かるしぐれ哉

(蕉尾集)

配力亭にて

○馬かたは——泊船集に
「島田塚本氏に詠草有」と記
せり

人々をしぐれよ宿は寒くとも

〔芭蕉翁全傳〕

人くをしぐれよ宿は寒けれども

〔芭蕉句選拾遺〕

舊里の道すがら

しぐるゝや田のあらかぶの黒む程

〔泊船念題集〕

矩外がもとに冬籠して

つくり木の庭をいさめる時雨かな

〔芭蕉句選拾遺〕

元祿三年の冬栗津の草庵より武江におもむ

くとして島田の驛塚本が家にいたりて

宿かりて名をなのらするしぐれかな

〔細猿譜〕

島田の宿にて

宿かして名をなのらする時雨哉

〔小箱文集〕

馬かたはしらしぐれの大井川

〔泊船集〕

○面白し——この句、笠日記・泊船集・宇陀法師等にも出づ。又如行子には「同一十日なるみ銀治出羽守鑾に」と前書して上五「おもしろや」とあり

○初霜や——荒小田に「此句、羽紅のもとよりこしわたをつくりておくられし返事也」と註せり

○衣かたしく——坂東太郎の原本に「衣」を朱で「風を」と訂正してある

○火を焚て——翁略傳の本文に「涵子が妻の許より多籠の料とて進せければ」とあつて出てゐる

猿雖宅

新藁の出初て早きしぐれ哉

(芭蕉翁全傳)

鳴海出羽守氏雲宅にて

面白し雪にやならん冬の雨

(千鳥集)

初霜や菊冷初る腰の綿

(荒小田)

寒草

霜枯に咲は辛氣の花野哉

(綴山井)

霜を着て風を敷寐の捨子哉

(六百番終句合)

霜をきて衣かたしく捨子哉

(坂東太郎)

火を焚て今宵は屋根の霜消さん

(ばせを翁略傳)

貧山の釜霜に啼聲寒し

(泊船集)

土屋四友子を送りてかまくらまでまかると

○霜を踏んで——茶の草子に「此句はいまだ俗なりける比にて露流世にさかむならざりし比也そのおかしくなつかしきに」と註せり。
又もとの水には「かまくらに行人を送りて」と前書す
○人のいほりを——貞享四年十一月三河國伊良古崎なる杜國を訪ねた折をいふ。
如行子には「同十三日」と前書あり

○さればこそ——泊船集に「此句笈日記には遊杜國といふ前がきにてあひたきまゝのとありぬ書あやまりなるべし」と言つてある
○薬のや——此の句如行子「翁心ちあしめて櫓木起倒子へ薬のいひつかす」とと前書あり。・櫓箱物語にも出づ

て

霜をふむでちむば引まで送りけり
からくと折ふしすごし竹の霜

(茶の草子)
(芭蕉句選拾遺)

人のいほりをたづねて

さればこそあれたきまゝの霜の宿

(嘆行子野)

逢「杜國」

さればこそ逢ひたきまゝの霜の菴

(笈日記)

人の菴をたづねて

さればこそあれたきまゝの霜の菴

(泊船集)

病中

薬のむさらでも霜の枕かな
葛の葉のおもて也けりけさの霜

(笈日記)
(維談集)

○葛の葉の——陸奥千鳥・泊船集・篇突等にも出で、句形はいづれも如月集に同じ

○有難や——句選に「武江の新大橋はじめてかゝりし時の吟なりと聞侍る」と頭註あり

○初雪や水仙の——篇突に「水仙の葉のたはむ程と云は例の季と季の取合にてこそ春雪にはうごきがたけれ」とある

○十二月云々——泊船集に「この前書なし」

○初雪やいつ——泊船集「大佛造榮をよろこびたまひて」と前書・淡路島・宇陀法師にも出づ

葛の葉の面見せけり今朝の霜

(如月)

有がたやいたゞひて踏はしの霜

(芭蕉句選)

夜すがらや竹こほらするけさのしも

(陸奥千鳥集)

初雪や水仙の葉のたはむまで

(陸奥千鳥集)

十二月九日はつ雪降のよろこび

初雪や幸ヒ菴に罷有

(續船室集)

我草の戸の初雪見むとよそに有りても空だに曇侍ればいそぎ歸るとあまたゝびなりけるに師走中の八日はじめて雪降けるよろこび

初雪や幸庵にまかりある

(寛政版深川集)

中比元祿巳の冬大佛榮興をよろこびて

初雪やいつ大佛の柱立

(笈日記)

芭蕉俳句集

○はつ雪や聖——小文庫・泊船集にも出で共に前書なし

○初雪やかけかゝり——この句小文庫・千句塚・並松（新大橋半かゝりたる比」と前書）・鎌倉海道（深川の大橋半かゝりける比」と前書）にも出づ

ならにて

雪かなしいつ大佛の瓦葺

（花 鶴）

旅行

はつ雪や聖小僧の笈の色

（鶴 遠 帆）

深川大橋半かゝりける比

初雪やかけかゝりたる橋の上

（英 船 集 便）

時雨をやもどかしがりて松の雪

（鶴 山 井）

子にをくれたる人の本にて

しほれふすや世はさかさまの雪の竹

（鶴 山 井）

霰まじる帷子雪はこもんかな

（鶴 山 井）

富士の雪廬生が夢をつかせたり

（六百番綴句合）

今朝の雪根深を園の枝折哉

（向 東 之 太 郎 調）

○市人に——笈日記の本文参照すべし。芭蕉句選「市人にいで是うらん雪の笠」芭蕉翁笈句集「雪見にありきて抱月亭・市人にいで是うらん雪の傘」

○馬をさへ——此の句春の目・猿の原・鞍箱物語・熱田三歌仙等に出づ。なほ鞍箱物語・熱田三歌仙・笈日記参照すべし

○深川雪夜——泊船集には「深川夜雪」なほ本朝文藝に芭蕉の「御厨蔵」ありてこの句出づ、参照すべし
○京までは——如行子には「貞享四年卯十一月五日鳴海寺島氏美言に飛鳥井頭相

夜着は重し吳天に雪を見るあらん

雪見にありきて

市人よ此笠うらふ雪の傘

抱月亭

市人にいで是うらん笠の雪

市人よ此笠うらふ雪の笠

旅人をみる

馬をさへながむる雪の朝哉

馬をだに詠る雪のあした哉

深川雪夜

酒のめばいと寐られね夜の雪

京まではまだ半空や雪の雲

(芭蕉集)

(甲子吟行)

(笈日記)

(此集)

(甲子吟行)

(檀阿波手集)

(泊船集)

(笈の小文・如行子・千鳥掛)

の御詠草のかゝり侍りし歌
を和す」と前書あり

○雪と雪——泊船集には前
書なく「此句は尾州にて中
あしき人をなだめられける
とて」と註せり。なほ此句
伊賀崎井氏藏歌笑宛手紙に
見ゆ。右の手紙参照
（磨直す——この句箋日記
に「そのとしあつ田の御造
齊ありしを」、泊船集に「熱
田御造齊」、熱田三歌仙に
「みしふくありし御やしう
にふたゝびまうでゝ」、芭蕉
杉風兩吟百韻附録に「御修
覆ありしあつたの御社にふ
たゝびまうでゝ」と前書し
て州で、又四季千句・後の
旅・簾箱物語にも見える。
後の旅・簾箱物語共に本文
参照すべし
○次のとし云々——泊船集
には「其後越人かたへ申遣
はされし句」とあり

伊羅古に行道越人酔て馬に乗る

ゆきや砂むまより落て酒の酔

（合歌のいびき）

おなじ比ならん杜國亭にて中あしき人の支
取つくるひて

雪と雪今宵師走の名月歟

（芭蕉日記集）

熱田御修覆

磨なをす鏡も清し雪の花

（箋の小文）

箱根こす人も有らし今朝の雪

（箋の小文）

信濃路を過るに

雪ちるや穗屋の薄の刈残し

（芭蕉集）

次のとしならん越人が方へつかはすとて

二人見し雪は今年も降けるか

（芭蕉日記集）

○二人見し——なほ庭雪に
 はこれを發句とした越人以下
 の歌仙がある參照。此の
 句芭蕉句選には「二人見し
 雪はことしも歸にけり」
 ○雪の中に——いつを昔に
 は句の次に「山中子共とあ
 そびてと有」と記せり。こ
 の句三冊子・芭蕉翁發句集
 には上五「はつ雪に」とあり

尾張十藏越人と號す越路の人なればなり栗
 飯柴薪のたよりに市中に隠れ二日つとめて
 二日遊び三日つとめて三日あそぶ性酒をこ
 のみ酔和する時は平家をうたふこれ我友な
 り

二人見し雪は今年もふりけるか

(庭雪)

雪の中に兎の皮の髭作れ

(いつを昔)

山中に子共とあそびて

雪の中に兎の皮の髭つくれ

(拾遺集)

大津にて智月といふ尼のすみかを尋てをの
 が言の少將とかや老の後此あたりちかくか
 くれ侍しといふをおもひ出て

少將の尼のはなしや志賀の雪

(芭蕉句選)

比良みかみ雪指しわたせ驚の橋

(翁草)

芭蕉俳句集

○上戸の顔や——芭蕉芭蕉盟・
芭蕉句選拾遺に「上戸の顔」
○日頃憎き——芭蕉芭蕉發句
集に「つねにくむ鳥も雪
の朝かな」

○貴さや——本朝文鑑に
「此贊ハ湖南ノ才陀亭ニ在
テ其繪ハ三井ノ定光坊ニ在
トゾ」と見える

日枝三上雪懸わたせ鷺の橋

（雪月花）

師走

耕月亭にて

雪をまつ上戸の良やいなびかり

（茶の草子）

雪を待上戸の額稻びかり

（花の町）

ひごろにくき鳥も雪の朝哉

（芭蕉集）

小町晝讀

貴さや雪降ぬ日も蓑と笠

（芭蕉集）

寒山自畫自讃 在許六家藏

庭はきて雪をわするゝはゝきかな

（芭蕉集）

竹ノ讀

たはみては雪まつ竹のけしきかな

（芭蕉集）

○たはみては——杉風句集
に杉風の句としてあるが誤
であらう

いざさらば——小文庫・
陸奥千鳥・泊船集・四山集・
花城等に出た句形は花城と
同じ

○いざ出む——鶴衣に尾府
の書林風月堂に立寄つて殘
した遺蹟だとしてのせ、句
の次に「丁卯臘月初夕道何
がしに送々」とある。丁卯
は貞享四年、夕遊は長谷川
氏、風月堂の主人、享保八
年二月二日歿

○曾良云々——雪の薄（安
永六年刊）にも同じ前書で
出でた前書「雪をとはれ
て」と句の下五が「雪まる
げ」とあるだけ異なる

伏見にて

たはみては雪まつ竹のけしきかな

（三河小町）

いざ行む雪見にころぶ所まで

（旅の小野文）

いざさらば雪見にころぶ所迄

（花摘）

書林風月ときゝし其名もやさしく覺へてし

ばし立寄てやすらふ程に雪の降出ければ

いざ出むゆきみにころぶ所まで

（霜夜）

對友人

君火をたけよきもの見せむ雪まるげ

（泊船望遠集）

曾良何某あたりちかくかりに居をしめて

朝な夕なにとひとつとはる我くひ物いとなむ

時は柴を折くぶるたすけとなり茶を煮夜は

きたりて軒をたゞく性隠閑をこのむ人にて

交金をたつある夜雪にとはれて

○座頭云々——後の旅の撰
者如行の文である

きみ火をたけよき物見せん雪まろげ (巻九 げ)

草庵をとぶらへる人に對して

君火たけよき物みせむ雪丸 (後 日記)

ふたゝび芭蕉庵を造りいとなみて

あられきくやこの身はもとのふる柏 (後 深川)

座頭など來て貧家のつれづれを紛しければ

おかしがりて

琵琶行の夜や三味線の音霞 (後 の 旅)

霜月朔日於良品亭

いざ子共はしりありかん玉霞 (木 華 集)

いかめしき音や霞の檜木笠 (孤 松・曉 東 子 稿
泊 船・宇 陀 呂 稿)

せゝ草庵を人くとひけるに

○あられせよ——芭蕉翁發句集には花橘と同一の前書あり

○かれは云々——藤生の撰者范字の文で「かれは云々」とはこの文の前にある浪化と子直との句をさしたので、終に「泊瀬の秋をならべて」といふのは芭蕉の句に配した黎阿の句「衰く」の意おもしろや泊瀬の月」をさす

○露凍て——三の額に「此句は尾陽昌圭もとにてせられけるや何の集にやらん凍解とあやまりぬ」熱田三歌仙にも「尾陽昌圭がもとにての句也いづれの集にや凍解とて誤る」と註してある。「二頁「凍解て」の句參照

あられせば網代の氷魚を煮て出さん
みぞれせば網代の氷魚を煮て出さむ
あられせよ網代の氷魚煮て出さん

かれはあわれにこれはおかしとあらそひあへるが阿叟いし山の口號を得たりけるこれは何がし岩本坊といへる許に残し置給ひける短冊の句なりげにかゝる風流のいまだ見へ侍らざりければ泊瀬の秋をならべて又一ふしのあわれとぞなしける

石山の石にたばしる あられ哉
雑水に琵琶きく軒の霞哉
露凍て筆に汲干ス清水哉

笠は長途の雨にほころび帯衣はとまりく
のあらしにもめたり忙つくしたるわび人我

(花 橘)

(忘 れ 梅)

(芭蕉句選 芭蕉翁發句集)

(藤 生)

(有 船 磯 集 海)

(三 熱 田 三 歌 仙 額)

○こがらしの——泊船集に
「道の記には狂句こがらし
とありけり後に狂句の又字
をはぶき給ひしよし云々」
と註せり。又上句「多の日
こがらしの」とした手紙も
ある

○木枯やたけに——百歌仙
に上五「風の」

さへあはれにおぼえけるむかし狂哥の才士
此國にたどりし事を不圖おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

（冬の日）

名古屋に侘居して狂句

風の身は竹齋に似たる哉

（續下文集）

こがらしの身は竹齋に似たるかな

（泊船集）

竹齋讚

木枯やたけにかくれてしづまりぬ

（鳥の道）

冬之竹

木がらしは竹にかくれてしづまりぬ

（盛吉物語）

こがらしや頬腫痛む人の顔

（泊船集）

菅沼亭

○京にあきて——この句泊船集(「三州菅治亭」と前書・きれん)(菅治耕月亭にて)と前書)にも出づ
○おなじ比云々——泊船集には前書なし

○冬の日や——一九二頁「すくみ行や」の句参照

○芹焼や——笈日記に「此句は初芹といふ事をいひのへたるに侍らんとたづねければたゞ思ひやりたるほつ句なりとあざむかれにけるかゝるあやまりも殊におほかるべし」と註す
○櫓の聲——芭蕉翁發句集には「櫓聲波を打て勝氷る夜は泪」

京にあきて此木がらしや冬住居

(笈日記)

おなじ比鳳來寺に參籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

(笈日記)

冬の日や馬上に氷る影法師

(笈の小文)

地理

芹焼やすそわの田井の初氷

(其便・笈日記)

深川冬夜ノ感

櫓の聲波ヲうつて勝氷ル夜やなみだ

(武蔵船載集)

寒夜辭

深川三またの邊りに草庵を侘て遠くは土峰の雪をのぞみちかくは萬里の船をうかぶあさぼらけ漕行船のあとしら浪に芹の

○偃鼠が——泊船集に「偃鼠に」と誤つてゐる

○すくみ行や——笈の小文には「冬の日や」前頁参照、如行子には「あまつ繩手を過るまで、冬の田の馬上にすくむ影法師」又合歡のいびきには「さむき田や馬上にすくむ影法師」とあり

○一露も——泊船集には「西行が趙南の心をいへる山家集の題に習ふ」と、陸奥千鳥には「はむれいがてうなんのころを」と前書して出づ。趙南・趙南は共に長男の誤で范蠡の次子諱有りしにその長子金を冬んでその諱を借はなかつた故事。それを山家集に「すてやらで命を終ふる人は皆千々の黄金をもて歸るなり」とよんである

枯葉の夢とふく風もや暮過るほど月に
坐しては空き樽をかこち枕によりて薄き
ふすまを愁ふ

櫓の聲波を打て腸氷る夜や涙

(夢三年)

深川冬夜ノ感

櫓の聲にはらはた氷る夜やなみだ

(續深川)

茅舍買水

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

(繪大要)

訪杜國紀行

すくみ行や馬上に氷る影法師

(笈繪日)

范蠡が趙南のころをいへる山家集の題に
習ふ

一露もこぼさぬ菊の氷かな

(續猿蓑)

○旅に病て——この句「なをかけ廻る」・「枯野を廻るゆめ心」とも筆ぜしこと笠日記・枯尾花に見ゆ。各々その本文を参照すべし。なほ花蔭には「旅宿の病中」と題し「旅病んで夢は枯野をかけ廻る」

（翁つゝがなく云々——）己が光の撰者車庸の文。泊船集には「翁つゝがなく霜月初の日深川の舊艸にかへりたるふて」とある

寒夜ノ吟

瓶わるゝ夜の米のねざめ哉

（筑瀬橋）

病中吟

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

（笠尾日記）

病中の吟

旅にやんで夢は枯野をかけ廻る

（泊船枯集）

人事

留守のまにあれたる神の落葉哉

（小船文庫）

翁つゝがなく霜月初の日むさしのゝ舊艸にかへり申さるめづらしくうれしくて朝暮歳戸の面／＼に對して

都出て神も旅寐の日數哉

（己船光）

○庚講——この句小文庫にも出で下五「著せにける」

振賣の——この句藤の實・陸奥千鳥・泊船集にも出でいづれも前書なし。なほ藤の實には「ふり賣の雁ン」と雁を特に言讀せり

○冬籠り——この句蓮の實・泊船集・續寒菊にも出づ

○猿奴阿段——段は段の誤・杜市の召使の名

ゑびす講酢賣に袴着せにけり

(續) 藤集

神無月廿日 ふか川にて即興

振賣の鴈あはれ也ゑびす講

(辰) 信

御命講や油のやうな酒五升

(小) 船文庫

菊鶏頭きり盡しけり御命講

(忌) 梅

冬籠りまたよりそはん此はしら

(卯) 野

しばしかくれおける人に申遣す

先祝へ梅を心の冬籠り

(辰) 船集

権七にしめす

舊里を去てしばらく田野に身をさすらふ人
あり家僕何がし水木のために身をくるしめ
心をいたましめ其猿奴阿段が功をあらそひ
陶侃が胡奴をしたふまことや道は其人を取

○金屏の——入日記所載の芭蕉の手紙には「野坡と云もの、四吟に、金屏の松の古さよ冬籠り」とありて句形炭俵に同じ。三冊子には「金屏に松のふるびや冬籠」とあつて「此句はじめは山を繪書て冬籠り也後直し也」とある

○屏風には——句選拾遺に「貞元平仲宅にての事也」と頭註あり

べからず物はそのかたちにあらず下位に有ても上智の人ありといへり猶石心鐵肝たゆむ事なかれ主も其善のわするべからず

祝

先いわへ梅をこゝろの冬籠

(順手序)

金屏の松の古さよ冬籠

(談五論依)

金屏に松のふるびや冬籠り

(泊辰船日記)

金屏の松のふるびや冬籠

(陸奥千鳥)

金屏の松もふるさよ冬籠

(小文庫)

屏風には山を畫て冬ごもり

(芭蕉句選拾遺)

千川亭

折に／＼伊吹を見てや冬籠

(養船日記)

千川亭に遊て

○難波津や——句は字陀法師にも出づ

○口切に——この句泊船集には「支梁亭」と前書ありて、陸奥千鳥には前書なく出づ

○住みつかぬ——この句燈篋・陸奥千鳥・泊船集・瓜作等にも出でいづれも前書なし

折く／＼に伊吹をみては冬ごもり

(後の旅)

贈酒堂

湖水の磯を這出たる田螺一疋
芥間の蟹のはさみをおそれ牛にも馬にも踏るゝ事なかれ

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

(市船の庵)

爐開や左官老行鬢の霜

(陸奥千鳥)

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき

(深川)

いねくと人にいはれても猶喰あらず旅のやどりどこやら寒き居心を侘て

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

(勧進帳)

氷國宅にて

○木曾の秋云々——この前
書は路通の文である

○をのゝおく——小野の奥

○ある人の云々——泊船集
には「追善に」

きりくす忘音に啼火燧哉

(芭蕉翁全集)

木曾の秋に瘦ほそり芭蕉庵に籠り居給ひし

冬

五つむつ茶の子にならふ圍爐裏哉

(茶の草子)

ふるき世をしのびて

霜の後撫子さける火桶哉

(勸進屋・小文
庫・泊船集)

白炭や彼うら島が老のはこ

(六百番狂句合)

白炭や彼浦島が老の霜

(江戸廣小路)

小野炭や手習ふ人の灰せゝり

(向之岡)

けし炭に薪わる音かをのゝおく

(國深川)

ある人の追善に

埋火もきゆやなみだの煮る音

(購船集野)

○深川八貧云々——雪丸げ
には「深川八貧のうち」

少年を失へる人の心を思ひやりて

埋火もきゆや泪の煎る音

(笈日記)

埋火や壁には客の影ぼうし

(泊船集)

むかし深川にて米買といへる題を置て

米買に雪の袋やなげ頭巾

(浮世の北)

深川八貧 文は今略之

米かひに雪の袋やなげ頭巾

(泊船・雪丸)

深川八貧

米買て雪の袋やなげ頭巾

(今日の昔)

貞徳翁の姿を賛して

おさな名やしらぬ翁の丸頭巾

(菊の盛)

李下が妻の悼

芭蕉俳句集

○夜道ひとつ——この句笈日記・葛の松原・泊船集・陸奥千鳥にも出で、葛の松原以下皆「鳳來寺」とだけ前書せり

○有人——或る人

○ためつけて——この句如行子(同二十八日名古屋・葛の松原)と前書あり。笈日記・吳服編・泊船集にも出づ

○鉢たゝき云々——いつた昔の撰者其角の文

被ぎ伏鋪團や寒き夜やすごき

(寛政
鹿島紀行)

みかはの國鳳來寺に詣る道の邊より例のやまひ起りてふもとの宿に一夜あかすとして

夜着ひとついのり出して旅ね哉

(茶の菓子)

夜着に寐てかりがね寒し旅の宿

(芭蕉句選拾遺)

有人の會

ためつけて雪見にまかるかみこ哉

(笈の小文)

兼日の會

ためつけて雪見にまかる紙子哉

(續野後集)

帟子にも霜や置かと撫て見し

(芭蕉翁笈句集)

鉢たゝき聞にとて翁のやどり申されしには
ちたゝきまいらざりければ

箒こそまねてもみせん鉢叩 去來

○干鮭も云々——この前書
後註共にえの木の撰者一甫
の文

明けてまいりたれば

長嘯の墓もめぐるか ちはち 敲

(いつをき)

干鮭も空也の瘦も年ごろに梵音聲シヤウのいたは
しき嵐山に入る月も心なくぞ見へ侍る一と
せ芭蕉の翁寒夜の都を見まほしく鉢叩キと
行連れて三條のひんがし洛の外に至りぬい
ほあるじの尼清元あやしみて申ければ翁の
いはく

長嘯の墓もめぐるか 鉢たゝき

多年の方寸を開よし機嫌キゲンつねならずと聞へ
けり其年月の筐には爐カマぶち焦れて芳く比良
の暮雪を待顔に風雅のはしら一重壁今に綴
りてありしなり

(えの木)

長嘯の塚もめぐるか 鉢たゝき

(泊船集)

納豆きる音しばしまて 鉢叩

(泊船集)

○節季候の來れば——この
句号・泊船集・後れ馳にも出
で替前書なし

○節季候を——泊船集・陸
奥千鳥にも出で共に前書な
し

○煤掃之説——今文略す

○つくしのかたに云々——
この前書は路通の文である

果の朔日の朝から

節季候の來れば風雅も師走哉

(蜀道隱)

忘年書懷 素堂亭

節季候を雀のわらふ出立かな

(深川)

うとまるゝ身は梶原か厄拂

(射水川)

煤掃之説

すゝはきや暮ゆく宿の高軒

(小文庫)
泊船集

旅寐してみしやうき世の煤はらひ

(野文)
筑の小

旅をして見しや浮世の煤はらひ

(師集)
泊船法

つくしのかたにまかりし比頭陀に入し五器
一具難波津の旅亭に捨しを破らず七とせの
後湖上の栗津迄送りければ是をさへ過しか
たをおもひ出して哀なりしまゝに翁へ此事

○合子——盒子。食器である。泊船集・宇陀法師等には格子和誤つてゐる

○有明も——笈日記に「兼好法師が歌に ありとだにひとにしられて身のほどやみそかにちかき有明の月」と註す

○今は夢云々——路通の前書である。なほ句の次に「ことしかぎり成べき数なるべし」といつて、笈日記と同様な兼好の歌を引いてゐる

物語し侍りければ

これや世の煤にそまらぬ古合子

(蜀遊塵)

對門人僧

是や世の煤に染らぬ古合子

(小文庫集)

旅行

煤掃は杉の木の間ゝ嵐哉

(己船が集光)

煤はきは己が棚つる大工かな

(炭俵・勝奥千島・泊船集)

有明もみそかにちかし餅の音

(笈日記集)

ありとだに人にしられですむ月の晦日にち

かき有明のそら 兼好

月代。や晦日に近き餅の音

(蜀遊塵)

今は夢師去年の歳暮に

○半日は——物の親によればこれを發句とした歌仙一巻「山櫻」といふ集に既出した由。なほ一葉集には「洛の御堂別當景桃丸興行」と前書せり

○此わすれ——芭蕉隱に素堂の句としたのは誤。葛の松原には素堂亭の年忘れの句だとなる

月代や三十日にちかき餅の音

〔芭蕉行記〕

上御靈にて

半日は神を友にやとし忘

〔物類句拾遺〕

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘

〔旅・西・山・船・蕉〕

まだ埋火の消やらず臘月末京都を退出て乙

州が新宅に春を待て

人に家をかはせて我はとし忘れ

〔遊・逆・郎〕

魚鳥の心はしらず年わすれ

〔旅・川・集・小・文・庫・浮世の北〕

魚鳥のこゝろはしらずとしの暮

〔陸・奥・千・島・泊・船・蕉〕

此わすれながるゝ年の淀ならむ

〔島・の・船・松・原・泊・蕉〕

せつかれて年忘するきげんかな

〔小・船・文・集・原・泊・蕉〕

○須磨の浦の——茶の草子
に「これは信濃國根羽といふ山里にあるよし玩竹といふ人のかたらければなになくなくかしく巻の上に置ぬ物語せし人もなべてのたぐいにあらず里の子もよくしれるなるべし」と記してある

○麥はえて——笈日記に「逢杜國 さればこそ云々」の句（八頁）の次に出て、これもその時の吟である。知行子には上五「麥まきて」、又泊船集には「ある人のもとにて」と前書せり
○刈あとや——句選拾遺には秋部に出してある

○鷹ひとつ——この句笈の小文・知行子・泊船集にも出で、又花摘に「いらこの杜國例ならでうせけるよし

海ある所にたばねたる柴を繪書て

須磨の浦の年取ものや柴一把

（茶の草子）

海ある所に眞柴負へる人を自畫して

須磨の浦の年とり物や柴一把

（藤 麥）

年の市線香買に出ばやな

（泊船集）

麥はえてよき隠家や畠村

（笈日記）

刈あとやものにまぎれぬ蕎麥の莖

（芭蕉句選拾遺）

動物

杜國をとぶらひける道すがら

鷹一つ見付てうれしいらこ崎

（俳の原）

いらこ崎を見渡して

を鶴人より申きこへける翁
にもむつまじくして鷹ひとつ
見つけてうれしと迄にたづ
ね遣ける昔をおもひあはれ
みて、羽ぬけ鳥鳴音ばかり
ぞいらこ崎」といふ其角の
句が見える

○辨くれて——笠日記には
「尾張の國あつ田にすかり
ける比人く師走の海みん
とて舟さし出で」と前書あ
り

鷹ひとつ見つけて嬉しいらこ崎

(笠日記)

骨山と云は鷹を打處なり南の海のはてにて
鷹のはじめて渡る所といへりいらこ鷹など
哥にもよめりけりとおもへば猶あはれなる
折ふし

鷹一つ見付てうれしいらこ崎

(合歌のいふき)

杜國が不幸を伊良古崎にたづねて鷹のこゑ
を折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき

(島尾冠)

海邊に日暮して

海くれて鴨のこゑほのかに白し

(甲子吟行)

尾張の國あつたにまかりける比人く師走
の海みんとて舟さしけるに

海くれて鴨の聲ほのかに白し

(蝶橋
歌仙語)

○星崎の——この句、磯野・箕日記「おなじ比、鳴海にわたりて」と前書、如行子・千鳥集・泊船集・字陀法師・千鳥集（「鳴海のむまやにて」と前書）等にも出で、泊船集には「星崎や闇を見よとてともきこえぬ」と書添へてある。

○闇の夜や——この句、泊船集には夏部に収む。

○あら何共なや——俳林良材に「一とせきのふも過ぬふぐと汁といふ句をまふけ五文字を減わびて洛の信總の東武に節をひかるゝを待てあら何ともな七字を得られつる」とある。泊船集には「江戸三時の句也」と註しながら上五や字を脱したの誤であらう。

蟹に つゝみてぬくし鴨の足

（續集・泊船・小）

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥

（笈の小文）

寐覺は松風の里呼續は夜明てから笠寺は雪のふる日

星崎の闇を見よとや鳴千鳥

（續集・物語）

闇の夜や巢をまどはしてなく衛

（續集・千鳥）

富家へ喰ニ肌——肉ニ丈夫ニ喫ニ菜——根ニ

予ハ乏し

雪の朝獨り千鰭を嚙得タリ

（東日記）

延寶五之冬

あら何共なやきのふは過て河豚汁

（江戸三時）

あら何ともなきのふは過てふくと汁

（泊船集）

○あそび来ぬ——泊船集には「熱田にて」、熱田三歌仙には「真草はじめのとし桑名に遊びてあつたにいたる」と前書あり

○又いかなる——これは笠日記の本文。泊船集には「たゞの權現にて」と前書あり

あら何共なや昨日は過て河豚魚汁

(宇陀法師)

桑名にあそびてあつたにいたる

あそび来ぬ鰐釣かねて七里迄

(鰐捕物語)

熱田に移る日

鰐釣らん李陵七里の浪の間

(柳下文集)

ふぐ汁や鯛もあるのに無分別

(芭蕉句選拾遺)

いきながら一つに氷る海鼠哉

(俳別盛歌・木曾路・續蕉樹)

植物

又いかなる時にか待りけむたどの權現を過るとて

官人よ我名をちらせ落葉川

(笠日記集記)

○右の落書——この時同行の本因が「伊勢人の發句すくはん落葉川」の吟ありしをさす

○百年の——泊船集に「明照寺にて」と前書して出づ

右の落書をいとふのこゝろ

宮守よわが名をちらせ木葉川

(續下文集)

宿明照寺 元祿辛未于貴
四十有八歳

當寺此平田に地をうつされてより已に百年にをよぶとかや御堂奉加の辭に曰竹樹密に土石老たりと誠に木立物ふりて殊勝に覺え侍ければ

百年の氣色を庭の落葉哉

(讀寒)

皂角子の實は其まゝの落葉哉

(讀寒菊)

こゝのとせの春秋市中に住仵て居を深川のほとりに移す長安は古來名利の地空手にして金なきものは行路難しと云けむ人のかしこく覺へ待るはこの身のとぼしき故にや

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

(讀深川)

○元禄五年云々——以下玆
日記の本文である。なほ五
半は四年の誤

○波の花と——紫蓮の「芭
蕉庵春秋」所引による

○風——泊船集には「ミ
ノ耕雪別墅」と前書して出
づ

○花皆——兼集には「古園」
と前書す

大津にて

三尺の山も嵐の木の葉哉

(己梅・泊船)

元禄五年神な月のはじめつかたならん月の
澤ときこへ侍る明照寺に羈旅の心を澄して

たふとがる涙やそめてちる紅葉

(貧船日記)

波の花と雪もや水のかへり花

(如意寶珠)

耕雪子別墅則時

風に匂ひやつけし歸花

(後の歌)

霜の後むくらをとひて

花皆枯て哀をこぼす草の種

(風松・泊船)

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

(甲子吟行)

神前の茶店にて

○ともかくも——この句泊
船集・陸奥千鳥・雪の尾花等
にも用でいづれも弱きなし
○冬牡丹——明和版野史紀
行に「冬牡丹千鳥の宿のほ
とゝぎす」

○元禄三年云々——以下笠
日記の本文。なほ三・平は四
年の誤であらう

しのぶさへ枯て餅買ふ舍かな

(綴箱物語
集田三歌仙題)

熱田の宮にやすらひて

葱さへ枯て餅うるやどりかな

(後の旅)

白脚としをかきね東武にかへりて

ともかくもならでや雪のかれ尾花

(北の山)

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

(孤下文集松)

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

(甲子吟行)

古益亭

冬ぼたんちどりか雪のほとゝぎす

(笠日記)

元禄三年の冬神な月廿日ばかりならんあつ
田梅人亭に宿して塵裏の閑を思ひよせられ
けむ九箇齋といへる名を残して

○水仙や——この句泊船集
 (前書なし)・渡船物語(支
 考桃林の二法師ともなひて
 梅人子が許へおはして」と
 本文あり)にも出づ

○新城は云々——この前書
 は笠日記の本文で、なほ句
 の次に「是は水仙の花を桃
 前桃後といへるよりかくは
 いへるなるべし」と註して
 ある。この句なほ茶の草子
 (元禄辛未冬)と前書・泊
 船集(前書なし)にも出づ

○早咲ほめん——芭蕉句選
 に「早咲つばむ」

水仙や白き障子のとも移り

(笠日記)

新城はむかし阿叟の逍遙せし地也なにがし
 白雪といふおのこ風雅の子ふたりもち侍る
 二人ながらいとかしこくぞ侍る阿叟もその
 少年の才をよみして是を桃先桃後と名づけ
 申されしを支考も名の説かきてとゞめける
 也

其にほひ桃より白し水仙花

(笠日記)

寒菊や粉^{メカ}糠のかゝる臼の端

(笠日記
 奥典千局)

三州ほひといふ所にて 前書略之

梅つばき早咲ほめむ保美の里

(芭蕉句選)

三河の國に^{*}褒美の里と云所あり其處に至り
 て里の名の面白ければ

梅椿早咲ほめんほ^(き)びの里

(芭蕉句選)

○穀壺に——この句藤の實・泊船集（共に前書なし）にも出で句形炭俵に同じ
 ○武士の——句選拾遺に「元六西玄虎子東武旅館に會の時の事也此句にて一折鶴毛所持ヲキハ肩竹にて三吟」と頭註あり。この句なほ芭蕉翁全傳にも出で、中呂氏藏の眞蹟もあり

ある人興行

香を探る梅に藏見る軒端哉

（蕉の小文）

防川亭

香を探る梅に家みる軒端哉

（蕉の日記）

壬申十二月廿日即興

打よりて花入探れんめつばき

（句兄弟・泊船・亦深・川）

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乗るや大根引

（巖・傍）

鞍壺に小坊主のせて大根引

（藤原千鳥）

茶根を喫して終日丈夫に談話す

武士の大根にがきはなしかな

（越前・蕉の句）

さし籠る葎の友か冬菜賣

（寛政版・肥後・雪丸）

○ちぎりて——泊船集には
「ちぎりした」

雜

鹽にしていざことづけん都鳥
石枯て水しほめるや冬もなし

(武藏十歌仙)

(東日記)

大通庵の主道圓居士芳名をきくことしたし
きまゝにま見えむことをちぎりてつゐにそ
の目をまたず初冬一夜の霜と降ぬけふはな
をひとめぐりにあたれりといふをきゝて

其かたち見ばや西木の杖の長

(小文庫
船集)

半殘興行一入といふものゝ會に

冬庭や月もいとなるむしの吟

(芭蕉翁全傳)

○世の中は——笈日記に

「此はつ句はばせを庵の一生の無爲なるべしと杉風のぬし語り申されし」とある。

なほその本文参照

○世にふるも——泊船集に

「此句五文字を世の中と笈日記にはしるされける筆のあやまりなるべしみなしぐりの比也」と註せり

○遊笠銘——文章略す

○よにふるは——雪の葉には「東武の深川には長慶寺の發句塚有よにふるは更に

宗祇のやどり哉と書れ侍る短冊壹枚を以て塚のあるじとぞなせりける」とある

○顔公の云々——この文は臨齋語話にも眞蹟を模刻して用してあるが、殆んど異

同はなり

雜

手づから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉

(虚 要)

世の中はさらに宗祇のやどり哉

(笈 日記)

手づから雨の侘笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のしぐれ哉

(泊 船 集)

遊笠銘 井 形

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

(和 漢 文 集)

よにふるは更に宗祇のやどり哉

(雪 の 夢)

顔公のかきほにおへるかたみにもあらず恵

子^マがつたふ種にもあらで我にひとつの瓢あ
り是をたくみにつけて花入ル、器にせんと

すれば大にして矩にあたらずさゝえにつく
 りて酒をもらんとすれば形見る所なしある
 人の曰草菴のいみじき糧入べき物也と寔に
 蓬の心有哉やがて隠士素翁にこふてこれが
 名を得さしむその言葉は右にしるすその句
 皆やまをもてをくるゝかゆへに四山とよぶ
 中にも飯顆山は老杜の住る地にして李白が
 たはぶれの句あり素翁李白にかはりてわが
 貧をきよくせんとすきよからん時はちりの
 器となれ得る時は一壺も千金をいだきて黛
 山もかるしとせんことしかり

ものひとつ瓢はかるきわが世哉

(四山集)

もの一我がよはかるきひさご哉

(栗集)

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

(旅の文)

さやの舟まはりしに有明の月入はてゝみの

○かちならば——笈日記には句の次になほ「といひけれども季の言葉なし雑の句といはんもあしからず」と文がついてゐる

○朝よきを——紙紙に「翁執心のあまり常に申されしは名所のみ雑の句有たき事也十七字のうちに季を入歌^{エタイ}就を用ていさゝか心ざしをのべがたしと鼻紙のはしにかゝれし句をむなくすてがたくこゝにとむなるべし」と附記せり

ぢあふみ路の山／＼雪降かゝりていとおかしきにおそろしく誕生たるものゝふの下部などいふものゝやゝもすれば舟人をぬめいかるぞ興うしなふ心地せらる桑名より處／＼馬に乗て杖つき坂引のぼすとして荷鞍うちかへりて馬より落ぬものゝ便なきひとり旅さへあるをまさなの乗てやと馬子にはしかられながら

かちならば杖つき坂を落馬哉
あさよさを誰まつしまぞ片こゝろ
語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿

語られぬゆどのにぬるゝ袂哉

三翁は風雅の天工をうけ得て心匠を萬歳につたふ此かげに遊ばんもの誰か俳言をあふ

(笈日記)

(芭蕉集)

(奥の細道)

(花摘)

○月花の——花は櫻・枇杷
 關隨筆には「夫風流に心を
 とめて其四季にともなふもの
 の濃の眞砂の盡せぬ詠なら
 め其情を述て其ものをあは
 れむ人はことの葉の聖世さ
 れば文明のころ其遺さかん
 なりし聖たちの言葉今の掟
 となりて其實なる事今の人の
 のすさむ事かたかるべしさ
 れども風雅の流行は天地と
 ともにうつりて只つきぬを
 尊ぶべき也さればかの宗祇
 宗繼守武の眞像を求めて此
 道の好士許六の筆勢をかり
 我拙き一句をつゞりて道の
 たゞ萬古にさかんならんこ
 とをいのる而已」と前書あり

がざらんや

月華の是やまことのあるじ達

(鐵箱物語)

三聖人圖

月花の是やまことの主達

(波瀾日記集)

畫讃

物ほしや布袋のふくろ月と花

(旅鏡)

塔山産業の爲に江府に居る事三月予はかれ
 が朝寐をおどろかせばかれは予が宵寐をた
 るきて方寸をくみしり寐食をとにしたる
 人に似たりけふや故郷へ歸るを見おくらん
 と杖を曳てよろほひ出たるに秋の名残もと
 もにおしまれて

むさし野やさはるものなき君が笠

(續寒集)

山鳥よ我もかもねん宵まどひ

(雪の尾花)

○山鳥よ——雪の尾花に
 「此御吟は洛西龍安寺に遊
 び玉ひし時也と泊船集句撰
 等にも洩傳るよし」といつ
 て京都の書肆井筒屋重寛所
 藏の裏蹟によつたとある
 ○海に降——俳諧古事談に
 「北にて」、芭蕉翁發句集
 に「越後新潟にて」と前書あ
 りて出づ

海に降雨や戀しき浮身宿

(芭蕉句集拾遺)

○いぬとさるの——菅菰抄
の著者は伊賀の桐雨雲記に
よつて明暦三年の作として
明る

○我年を——句解參考には
「我年も」

附 錄

一、考證の部

春

新年

*いぬとさるの世の中よかれ酉の年
伊勢が賣家にも來たり千代の春
正月も美濃と近江や閏月
梅白し年たつ色の小醒井
三日月は正月ばかり誠にて
かびたんもつくばゝせけり君が春
我年を棚へあげてや若えびす

(奥の細道
菅菰抄)

(もとの水)

(同 上)

(無句後拾遺)

(同 芭蕉新巻上)

(二葉集)

(同 上)

○深川に——この句所名第
にも出づ

○あらがねの——句解參考
には採録してゐるが、東華
集には句主を明記してない
ので、なほ傍證がなければ
芭蕉の句とは決し難い

自 畫 自 賛

惠方から曳やことしも牛の玉
深川に松をかぞへむ千代の春
面白き朝のはじめや三ツの花

曲 水 亭

小頭の數の子くさき年始哉
伊勢に居て三國一の初日の出
けさ買む葎の宿の雜糞椀
萬歳のひとり歸るや薄月夜

閑正月朔日

をだまきの正月さまや若菜の下
ふた見から蒔繪やつぐく門の松
あらがねの蕪めされて若菜哉

(同上考證)

(句解參考)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(所名集)

(東華集)

○春陰——新處集に「北句
今までの撰にめれたるよし
但州より告り」と附記せり

○きほひありや——句解參
考に天和中の作で前句の初
案ならんと註し、又「勢ひ
なり」の句を出して句形い
づれが是か分らぬと言つて
ゐる

○葵過き——はたがや集
(寛政十年刊)によれば、
道彦がこの句を書いて無説
上人の寺内に翁標を建てた
といふ

時 候

春 陰

* 勢ひあり氷消ては瀧——津魚

(新處集)

甲州郡内といふ瀧にて

勢ひある山部も春の瀧ツ魚

(句解參考)

きほひありや氷柱化しては瀧ツ魚

(同上)

勢ひなり氷きえては瀧つ魚

(同上)

伸かゝる入月に餘る寒サかな

(同上)

如月の柳の下は何か降

(安沙野)

去年ははやそこへすされよ次郎月

(一葉集)

春寒し垣ねに残る雪こかし

(無句後拾遺)

暮遅き四谷過けり昏艸履

(ほとこの水
はたがや集)

瀬田夕照

○目寄——名所八體の一として出づ

遅き日にかわかぬ網の左り袖
春の日にあたまの長き男かな

(あさかり)
(俳諧叢書)

天文

奈良行

はる風や人聲うつる三笠山
春かぜやきせるくはへて船頭殿
貝寄る風の手じなや若の浦

(もとの水)
(同) 上
(同) 上

季吟勸進巻頭

和歌の跡とふや出雲の八重霞

(同) 上

矢走歸帆

夕霞赤石の浦を帆の表
あれこれをあつめて春は臚かな
春雨やなほしほれたる破レ座具

(あさかり)
(蕉句後拾遺)
(句解参考)

〇をくるゝ——運るゝ

落の芽を降かくしけり春の雪 (同上)

人事

峯入や一里をくるゝ小山伏 (もとのお)

捨ものに梨の接穂や山屋敷 (同上)

去年見たる花賣の來る彼岸哉 (蕉句後拾遺)

けふひがん菩提の種を蒔日かな (一華集)

寐に入る鳥と引かへて長樂の鐘をうしろに

下河はら祇園精舎の宵女の鹽から聲はむかしにかへて見てこよひは竹のふしみなる舟

の乗場につきてけりといふ頃は如月の末や

よひのはじめなりけらし

船いそぎなれも汐干に行人か (むつのゆかり)

清水ほど流るゝ沖の汐干哉 (句解參考)

門人に對す

○寒食の——新編芭蕉一代集による

○居らぬ——すわらぬ

○鶯に感ある——この句惟然坊句集追加には惟然の句として採録してある

梅檀も一鋤づゝの田打かな

(同上)

寒食の日旅人たばこに飢つらん

(後の例)

水口祭

水口の雲は下ゆくいぐしかな

(月令博物考)

雲なびく季讀經のひき茶哉

(同上)

動物

しほじりの尻も居らぬ春の駒

(もとの水)

菜の花に成て戀るやねこの妻

(句解參考)

鶯や茶袋かゝる庵の垣

(續寒苑)

相國寺にて

鶯に感ある竹のはやし哉

(もとの水)

うぐひすにほろりと笹の氷かな

(蕉句後拾遺)

掃除して來ぬ日は庭に鶯の

(同上)

○鶯も鶯も——新編芭蕉一代集による

○城石に——名所八體の一として出づ

○山梁や——ことばの露

(天明六年刊、暮柳舎後川撰)によれば金澤卯辰山の麓の邊りに、後川が書いて建てた翁の句碑の句だといふ。山梁は雉子

○草もなき——以下芭蕉翁發句拾遺の句はすべて芭蕉俳句定本による

○巢立せり——新巻には夏部に收む

○鶯とくは——この句句解參考・一串抄にも採録し前書に小異あり

鶯の岡で鳴日はうすぎかな (同上)

鶯に片付させむすゝめ良 (句解參考)

鶯の椋の葉みがき聲聞む (同上)

鶯も鶯も和哥の流かな (厚崇集)

姨石に啼かはしたる雉子哉 (もとの水)

山梁や梢をかける水の音 (ことばの露)

*草も木もはなれ切たる雲雀哉 (芭蕉句解)

草もなき大井かはらに鳴雲雀 (芭蕉翁遺稿)

高足のあとや雲雀のま一幕 (句解參考)

甲斐猿橋

水くらく日のまふ谷やよぶこ鳥 (同上)

巢立せり鶯の子や海を戀るらん (芭蕉新巻)

春は鳥の鶯利とは其浦人の言葉とや

鶯とくは硯を作れ和歌の海 (翁反古)

○あはれさは——句解参考
にはこの句夏都に出せり

○梅の錠——この句耳底記
には芭蕉が酒堂に梅の錠の
秘書を附箋した時興へた句
だと言つてゐる

白魚や石にさはらば消ぬべし (句解参考)

蛙子は目すり膾を啼音哉 (二葉集)

あはれさは薦の巢に鳴蛙哉 (句解参考)

はるもなし踏てをしまぬ蛎の殻 (同上)

好くや名もなき草にとまる蝶 (同上)

芳野を下る時

飯貝や雨に泊りて田螺聞 (もとの水)

年待やよむとも盡じ蜆貝 (風俗文選
大註解
羅本)

植物

梅の錠汝と我と鍵一ツ (俳諧耳底記)

古郷の梅や浪花の二年越 (もとの水)

題しらず

梅折て椿に迷ふたもとかな (同上)

○大威徳——兩回笠（寶曆九年刊）には其角の「隠しき枝の裂目や梅の花」露川の「梅が香に御恵付られて初音哉」と三幅對として掲げてある。なほ句解參考には「天神の誓」と題して出せり

○主なきを——翁反古に別
に「人なきを恨みかほなる
野梅かな」の句をも出せり
○待かねて——袖日記に追加として載せ「或人曰此句はせをの句のよし申しければ爰に載侍」と附記せり

*大威徳ありく梅の二はしら

（兩回笠）

梅に尾長鳥の畫賛

此花のあるじ顔なり尾長鳥

（蕉句後拾遺）

常の咄し遁れにけりな梅の花

（同上）

主なきをうらみ顔なる野梅哉

（翁反古）

待かねて隣の梅を折に行

（芭蕉稿日記
一葉集考題）

梅が香にちやうりやうふりやう黒木賣

（芭蕉歌）

梅がゝやちんりやうふりやう黒木賣

（風俗文選
犬註稿本）

梅咲やちやうりやうふりやう黒木賣

（句解參考）

芭蕉庵は火の爲に破れてある人の許に春を

わびけるに軒の梅に雪の降かゝるを見て

深川の松はなくらむ雪の梅

（同上）

旅人の寐てから霞む野梅哉

（同上）

遠乗の出合がしらや原の梅

（同上）

○龜「呂や——一串抄には「八潮にて」と讀書あり
○藪うめや——以下新撰翁草の句は芭蕉俳句定本による

○紅梅や——この前書は嵯健養所載松風宛芭蕉の手紙の本文である。この句は芭蕉新巻・寂榮・増註杯青翁句彙・芭蕉袖草紙等にも出づ

江の水にしら魚にほへ梅の花 同 占
隙とりて八重に咲けり梅の花 同 占
花に似ぬ木や髭黒き梅根性 同 占
柳見にさそふや梅の都人 同 占
遙風呂や梅も櫻もしのぶ草 同 占
藪うめや日影はしらす梅の花 新選翁草
初春先酒に梅賣句ひかな 殺句題苑集
朝ひこやあてなる梅の薄く濃く 月令博物箋

寔に——此世の極樂といふは外にあらず御所のことになむ此四五日以前上京にありて御所の中を通りければおりふし雨ふりて心靜にいと有がたく殿——の紅梅今をさかりと見へ申候音楽さても——面白くそいふに涙をながして通り侍りければ

*紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

(嵯健の巻)

○古川に——句解參考に二句、句形を異にしてあげてある

○曇の、青柳の——二句一串抄にも出づ

○笠の緒に——惟然坊句集追加には惟然の句として採録してある

古川にこびで芽をはる柳哉

(一解參考)

矢矧堤

古川に鯉も目を張る柳かな

(句解參考)

輪乗する若衆に暮るゝ柳哉

(同上)

梅若の塚にて

削りかけしても柳は亂れ髪

(同上)

畫讚

野は山の中に一本柳かな

(同上)

梟のねぶりおちたる柳かな

(同上)

(マシ) 陽柳觀音の畫讚

青柳の我からむすぶ佛かな

(翁反古)

贈杜國

笠の緒に柳縮る旅出かな

(一との水華集)

葉にそむく椿や花のよそごゝろ

(一との水)

○見あぐれば——菊苗集
 (文化七年、宋相撰)によれば紀三井寺にある翁塚の句だといふ。又茗荷園會(文政九年稿本、野莊撰)にも紀三井寺翁塚の句として出づ。なほ句は句解參考にものせたり

通水や椿ながるゝ竹のおく
 歌よみの先達多し山ざくら
 半日の雨より長し糸櫻

(同) 上
 (同) 上
 (同) 上

上醍醐にて

留守といふ小僧なぶらん山櫻
 裏表名をつけかへる山ざくら
 見あぐればさくらしまふて紀三井寺
 櫻哉小町が姉の名はしらす

(同) 上
 (蕉句後拾遺)
 (芭蕉の苗花集)
 (有也無地圖)

須磨寺

風なきに散やわかきの花櫻
 櫻咲てあるじ二人の庵かな
 暮かぬる日の床しさよ山ざくら
 磯山や櫻をゆする波の音

(翁反古) 上
 (同) 上
 (同) 上
 (句解參考)

功成遂名而身退

○山の名を——この句蕉句後拾遺にも出で前書なし。又句は一串抄にも出づ

○山は藤——句解參考に「段考五文字全篇しあやまれるなるべし山は不二といひて櫻をほめたる句也」といへり

○わびしさや——一串抄に「さびしさや花のあたりの野人參」

山の名を得てちるをこそ櫻なれ
山は不二この陸奥に櫻哉
同 占

或人の物がたりに仙臺前澤に大木の櫻あり

山は藤みちのくに此櫻かな
世をいかに捨どころなき山櫻
伐株の芽立を見れば櫻かな
わびしさや櫻がもとの野人參
同 占

紀三井山下奎太に休らへば宗祇の故事をねもごろにをしへて

宗祇にもめぐり逢けり遅櫻
木葉ちる櫻はかろしひの木笠
はつ花に命七十五年ほど
花の陰硯にかはるまる瓦
新選集草
月の一木
田毎の月
集集
もとの水

嵐やま

○古香や——惟然坊句集追加には惟然の句として採録してある

花の山二町のぼれば大悲閣

(同 上)

古香や花の旅出の拾ひはき

(同上 一葉集)

松風を花にかんして居たるかな

(蕉句後拾遺)

小初瀬や花に暮ゆくばん袋

(同 上)

すへたのしひよくの中は花に鳥

(同 上)

小夜の中山より彼大井川を見わたして

日暮れば落花に雪の大井川

(芭蕉新巻上)

花の山袈裟落されな坊主達

(芭蕉新巻上)

藏王堂に休む

また咲ぬ花のありかや藏王堂

(翁反古)

古寺や誰か植捨し花一本

(翁反古)

みちのくへ首途のよし旅の寐さめうらやま

しく候はなむけの一句進申候

むく起に隣の花の匂ひかな

(同 上)

○花は世を——句解參考に
すでに眞偽未決の出を言つ
てゐる

孤石みちのく行を送る

むく起に隣の花の匂ひ哉
まつ花や藤三郎がよしの山
京は九萬九千群集の花見かな
花に舍り瓢先生と自云り
花の香もおなじ祝の白茶哉

天看法印の賛

月か花敷問へば四睡の眠り哉
花は世を江戸方角の法師哉
花ちらす風は皇帝の臣下かな
花のとき爺はめで度なられけり
瘦臙もあればぞ花のよしの山
世や人や花にも其智三十里
里の名も聞たき花の山の道

(芭蕉俳句
一集参考)
記

(二集参考)

(句解参考)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

○曇りやら——沼波氏編芭蕉全集に「禹柳伊勢紀行」を出所とし「畫賛、この畫かきたる人は外記何がしとていまだ十一になり侍るよしまことにやさしき筆のすさみに興もよほされてざれ句書付侍る」と前書あり、上五「霞やら」となてある

○分別に——隨齋語話によれば芭蕉畫像の自讃である

○見渡せば——以下芭蕉翁句鑑の句はすべて沼波氏編芭蕉全集による

○六里七里——新編芭蕉一代夢による

深川や所く／＼に花ふとき 同 上

百三十里ひがし花見侍る路銀なくてかりける

一里一錢江戸の花見る用意哉 同 上

曇りやら花の雲やら烟やら 同 上

鶯も笠着て出よはなのゆき 同 上

*人の氣や花に乘行さくら川 (三之丞氣消息)

*分別に花の鏡もくもりけり (隨齋語話)

見渡せば花ばかりなり春や京 (芭蕉翁句鑑)

花咲ばつげむと云ふや小短冊 (同上)

花見にと親が手を引めくら兒 (風俗文選)

六里七里日ごとに替る花見哉 (眞蹟拾遺)

三井晩鐘

盃に片われはなし花の鐘 (あさかり)

〇裾山や——もとの水には
夏部に出してある

古寺の桃に米ふむ男かな

(もとの水)

尙白と浪花に下る

たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

(同上)

染上下あかね干目や桃のはな

(蕉句後拾遺)

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋て

留主に來て棚さがしする藤の花

(一葉集考證)

慇懃になりて別るゝ藤の花

(句解參考)

參宮の道すがらなつみとやらむいふ所の片

原なる休所に今をさかりと咲てふ藤に前後
をわすれしばらく休らふ折からあまたの句
／＼を打ながめずもつたなき言のはに筆を

染て

低う來る茶店も藤の花の縁

(同上)

畫 讃

裾山や虹吐あとの夕つゝじ

(もとの水)

○母草に——十家類題集には秋部に收む。又句解參考には前書なく中七「誰すまへとて」

○青苔や——この句句解參考には夏部に出せり

萱つみて貧なる女機による
(同 上)

園ひろき徳ありてこそふきのとう
(翁 反古)

おみき女改名朝露童女と被付候よし承り
乳母草に誰むすべとて朝の露
(同 上)

たんぽゝ哉鶴も來てつめまつのかげ
(同 上)

若草や狼かよふ道ながら
(同 上)

新三十三間堂

若草やきのふの箭見も木綿賣
(句解參考)

悲しまんや墨子芹焼を見ても猶
(二 華集)

箸の先に花咲せけり櫻海苔
(同 上)

雨中庵の庭に遊ぶ事七々日人々に

青苔や玉まく芭蕉一株二株
(翁 反古)

世はこれぞ薺は明日を貯す
(蕉の底)

薺つむけふはな焼そ鳥部山
(句解參考)

○白川は——句解參考には
「白川の」

さかなにやいでちと妻もよめがはぎ (同 上)

夢想之俳諧

捧たり二月中旬初なすび (はせう一代記 芭蕉集)

春風は空にすぐろのすゝき哉 (月令博物箋)

うば玉のゆうに銀杏の花盛 (同 上)

孫つれて麻蒔畝の小鳥哉 (同 上)

野びる生ふ黒木の橋も久米路哉 (同 上)

雜

白川は春のすゑなり旅まくら (翁反古)

高砂の松は寛永年中に枯けり今若木猶く

古しへを忍れけり

植かへて目出度松のみどり哉 (同 上)

若松の四方に影さす光かな (兼句後拾遺)

○此神も——新編芭蕉一代集による

○長貞亭——芭蕉翁句鑑には長興亭とある。又寫本「阿久多川」中の祖翁發句には「海は晴て日校降る夜の五月哉」

夏

時候

長 貞 亭

おもしろやことしの春も旅の空
此神もいく世か經なん松の花

(句解參考)

(玉のひかり)

海ははれてひえ降の寺五月かな
湖水はれて比叡降のこす五月雨
海は晴て比叡降残す五月哉

(一葉集考索
句解參考)

(兼句後拾遺)

(芭蕉翁
發句拾遺)

コウチ法印の靈地にて

みな月やから鮭拜む野栖山

(芭蕉翁句鑑)

○さみだれや此笠森を——
句解参考には上五「さみだ
れて」

短夜や驛路の鈴の耳につく
蛤の口しめてゐる暑かな
きのふをも峠といひし暑さ哉
この頃の暑さは何とかはしやうよう
夏さむし大佛暮ぬ堂のうち

天文

*五月の雨卷柏の緑いつ迄ぞ
五月の雨岩檜葉の翠いつまでぞ
五月雨に卷柏の緑いつまでぞ
さみだれや此笠森をさしもぐさ

拙稿撰 杯は野に臥こともたのしきやなどあ
るじの問れければ

さみだれに寒いまゝなり旅すがた

(もとの水)

(同上)

(有也無也問)

(句解参考)

(蕉句後拾遺)

(留堀)

(一華集)

(十家類題集
句解参考)

(一華集)

(同上考證)

○此道に——茅荷園會によれば難司ヶ谷鬼子母神境内にある涼月塚の句である。なほ一串抄には「此道へ出て涼しや松の月」
○涼しさをたゞ——正語抄の本文参照

○里塚や——新編芭蕉一代集による

○曇き日や——つのもじは元文四年八月刊湖十撰。同書所載の他の芭蕉の句は皆確實なものだがこの句だけは他に所見がない

五月雨や東寺の沙彌の髭ぼうく
夕立の跡の匂ひや三穂の松

(句解参考)
同上

しなのゝ洗馬

つゆはれのわたくし雨や雲ちぎれ
廿九日扱こそ得たれ雲の峯
荒海のほこる日ざしや雲の峯
涼しさや行先くの最上川
此道に出てすゞしさよ松の月

(もとの水)
(蕉句後拾遺 芭蕉新巻)
(句解参考)
同上
同上

ある人の扇に開三角は三界壘一本是一心
すゞしさをわすれ給ふないつ迄も

(新撰芭蕉)

開ケハ三寶は三界壘メハ一本唯一心

涼しさをたゞいつまでも忘るなよ
黒塚や鬼こもるとも人すゞし
暑き日や水たゞよはず樹うごかず

(俳諧正語抄)
(後の便)
(つのもじ)

○一里鐘——一里鐘の誤。
句解參考に「一里塚」とあ
るのも誤であらう

奉納

梅さくら松は御前に夏の月
きよ瀧のなみにあらふや夏の月

(千里馬
句解參考)

(句解參考)

加賀へ文通に

風かほる越の白根を國の花
檜山や柴して戻る夏の雨

(蕉句後拾遺)

(もとの水)

地理

なつ山や紙すく里は飯時分
夏山や杉に夕日の一里鐘

(もとの水)

(同上)

芳野西行庵

硯洗ふ智恵は出たり苔清水

(同上、風俗文
選大註解)

人事

〇こちも——句解參考には
「とちも」

灌佛や皺手合する珠數の音
誰がうえた葛蒲刀の鮫の粒
旅じや喰へ都は目だつ柏もち
箔押よこちも身のため夕すゞみ

觀世音に詣でゝ

笠寺や乗敷さます一すゞみ
*古拾もの見の松にはづかしや
*辨慶は夏も紙子の羽織かな

辨慶が七ツ道具の山刀豆は日本一のかうの
もの哉 此狂歌の心をもちて

辨慶は夏も紙衣の羽織かな
淺香山帷子ほして通りけり
押遣ればおしやる儘の竹婦人
汗水や吉野どまりの笈山伏

(句解參考)

(同上)

(同上)

(二 歌集)

(新撰翁草)

(溫故
芭蕉句解)

(芭蕉翁消息集)

(無句後拾遺)

(句解參考)

(同上)

(もとの次)

○蚊やりせよ——十家類
集に「蚊遣して」

○野洲川や——翁撰記によ
れば白塚、湖東十輪院にあ
りと

光明寺にて

汗の香に衣ふるはむ行者堂

(一葉集考證)

のりたやと子の聲くらき鵜舟哉

(同上)

聲あらば鮎も鳴らんうがひ舟

(芭蕉神草紙)

鵜のつらに簀こぼれて哀也

(同上)

一文の酔の錢落す鵜川かな

(蕉句後拾遺)

川がりや伊勢武者は皆赤ふとし

(同上)

冷汗や須磨に淡路の帆懸船

(同上)

蚊やりせよ夢見て行ん竹瓦

(翁反古)

野洲川や身は安からぬさらし白

(龍圖翁撰記)

動物

又越む佐夜の中山はつ松魚

(もとの水)

精進日に残りおほしやはつ鯉

(句解參考)

○代々の秋——新編芭蕉一代集による

○ほととぎす鐘に——新編芭蕉一代集による

○戸の口に——句解参考には「戸のくちといふ處にて」と前置あり

○わつて捨けり——句解参考「もつて捨けり」

陸奥四倉の浦に九月十日ひねもす遊びて

代々の秋 四倉とめり 鰹船

(口 確)

子規なくや黒戸の濱びさし

(もとの水)

ほととぎす鐘にあはれをとどめけり

(四季風物畫帖)

戸の口に宿札な のれ 郭公

(一 華 葉)

啼やなけ耳のすうなるほととぎす

(同 上)

口すべれ油月夜のほととぎす

(同 上)

黒焼釜わつて捨けりほととぎす

(同 上)

笈負僧 虫酒

みえばやな出立く のほととぎす

(同上考證)

見かへりの松

見かへりの松の木ずへやほととぎす

(錦反古)

きのへ子に寝て待ほどぞ 郭公

(同上)

瀬田に泊りて曉石山寺にまうでの源氏の

○けゝらなく——古今集、
東歌「かひがねをさやにも
見しがけゝれなく顔よりふ
せるさやの中山」

間をみる

曙はまたむらさきにほとゝぎす
はき直す草履は遅し郭公
枕つく乗合舟やほとゝぎす

佐夜の中山にて

けゝらなくよこをりふせて郭公
曉の山兀として郭公
巢立せり鶉の子や海を戀るらん
拵（ま）ふて出れば水鶏やわたし守
鶯や老をなぐさむ茶臼山
蟬をもつて天の曰ふあつさ哉
聲にみな鳴しまふてや蟬の殻
木陰に蟬ばかり動く夕べ哉
飯櫃にかけもたらぬか蟬の聲

（諸風集墳記）

（千六宛消息）

（句解參考）

（同）上

（同）上

（蕉句後拾遺）

（同）上

（句解參考）

（同）上

（同）上

（芭蕉翁句餘）

（十家類題集）

○螢火の——新編芭蕉一代集による

○夏のむし——沼波氏編芭蕉全集による

○松明に——十家類題集には「たひ松にあふか樹に啼雨蛙」

○秋や須磨——名所八體の一

植物

螢火の晝は消つゝ柱かな
夏のむしうなぎやく目をしらぬかな
松明にえふか柱の雨蛙

(奥細道異本)
(鼠 腹)
(芭蕉神草紙)

唐土の吉野は岩に牡丹哉
散る時もあればこそあれ廿日草

牡丹花の賛

(芭蕉の底)
(翁 反古)

風月の財をわすれよ深見草
夏豆の二葉や麥の株がへし
新麥や笋時の草の庵
秋や須磨すまや秋知る麥日和
*麥刈て桑の木ばかり残りけり

(蕉句後拾遺)
(同 上)
(芭蕉翁句集 上)
(もとの水)
(一井庵宛消息)

或山寺にて

○麥刈て三尺——鑄鏡に
「この句阿叟なるよしその
かみ難波某のはとりにてあ
りしと實生氏より傳ふ」と
附記してあるが、阿叟とは
芭蕉の事か十分明かでない

○百日紅——都の花めぐり
には眞蹟によつたとある

○隣には——菅の風（寛政
元年刊）所載の「後には巡
禮なくやかきつばた」とい
ふ句の詞書に「隣には瓦焼
なり杜若と蕉翁の句あり」
とある

鐘も撞住持も仕たり麥の秋
麥刈て稻舟見せよ最上川
麥刈て三尺高し生駒山
老僧の竹の子をかむ涙かな
ひかり合ふ二つの山の茂りより

（句解参考）
（同）上
（鑄）鏡
（蕉句後拾遺）
（同）上

錢別

わがぬるや青柳茂る染火繩
＊百日紅まづ四五日は減しけり
こゝも三河むらさき麥のかきつばた
隣には瓦焼なり杜若
紫陽花や三島は水のうら通り
紫陽花や乞食煩ふ草の上
山下や廣葉の路に雨の音
蓮の葉や夕がほでせし馬合羽

（句解参考）
（都の花めぐり）
（古今俳諧明題集）
（一應集）
（菅の風）
（句解参考）
（同）上
（同）上
（同）上
（同）上

○雨の矢に——沼波氏編芭蕉全集による

○李青く——蕉集に「或人云信州にての時なり」と註せり

遊素堂蓮池

雨の矢に蓮を射る芦戦へり
 尋れば蓮の君子の門ばしら
 莊嚴の柱によりて合歡の花
 日の入の雲吹はらへむら櫂
 きふけふ櫂にくもる山路かな
 晝顔や酔てかほ出す窓の穴

前書破失

晝がほの花にねぶたき庵かな
 ひるがほの花にもこぼせ桶の水
 美しき其ひめゆりや后さね
 李青く竹笠破て石あぶなし
 *手をのべて覆盆子喰けり馬の上
 爪紅を末摘花のゆかりかな

(遺草)

(蕉句後拾遺)

(同上)

(同上)

(芭蕉反り
芭蕉集)

(蕉句後拾遺)

(蕉反古)

(芭蕉集)

(二葉集)

(同考證)

(歌遊宛消息
十家九題集)

(蕉句後拾遺)

○松島や——衣裳塚の序に
「此句は越の高田なるやど
りにてある人に書てあたへ
給へるを得て此塚に納めけ
るなりされば奥の細道にも
松島の句はもらし給へど難
の一窺には其格をしらしめ
此句やその時の筆占なるべ
し」とある

小僧村といふ所にて

小僧とは辨慶 痛早 松茸

(句解参考)

雜

遠淺や夏の日の出の舟ごゝろ
* 松島や夏を衣裳に月と水
松しまや水を衣裳に夏の月
松しまや夏を衣裳の水と月

(もとの水)

(衣裳塚・隔回
笠・句解参考)

(芭蕉補日記
句解参考)

(一葉集)

秋

時候

○夕がほや——袖日記に元禄五年の作とす。又句解參考には夏部に収めてある
○汗のごひ——句解參考に延寶年中の吟と註す

○秋のくれ客か——隨齋諸話の本文参照。なほこの句風俗文選大註解にも出づ。又句解參考には上五「秋の空」

夕がほやかみまはるほど秋は來ぬ
汗のごひ下女にとらせりけさの秋

猿はしに宿りし時

棧や残暑に夜着を着て寐ける

(同) 上

秋の日のいろこそかへね松の聲

(同) 上

兼好の賛

秋の夜をうしろに仕たる法師哉

(同) 上

*塵土佐の腰ばりへげて秋の暮

(和及菟消息)

秋のくれ客か亭主か中柱

(隨齋諸話)
(芭蕉集考證)

六介六兵衛の二人に芭蕉庵を訪れて古郷の

安否を聞

いく千里へだつおもひや秋の暮

(もとの水)

船頭の尻聲さむし秋の暮

(同) 上

松杉の尾山の鐘や秋の暮

(句解參考)

嵐雪が四國に渡る時

旅がらす二百十日も船支度
秋さむし編笠着たる人の形

(いとの水)

(蕉句後拾遺)

錦は故郷の晴着旅は山くの色めくをそ秋
と思はれ今や伊陽に歸り爰かしこ杖をなら
して竹馬の乗打も成かたく黄昏の頃名駒の
軒に來りて久く越に物語せし一蛙子ケ様
の名石をもとめて風友を待との折珍しく誠
に心友の徳より彫出されたる面のゑくほか
と感じて詠入たる即時

*手の冷るほどおもしろし硯石
すさまじき時の鼓の古音哉
行秋や薪にもせんつぶれ家

(眞 蹟)

(月令博物筌)

(芭蕉稿草紙)

天文

○秋かぜに——或問珍（享保十七年刊、申書撰）に加賀の能願と芭蕉との句としてあげてゐる。同書本文並照
 ○たびにあきて——新編芭蕉一代集による
 ○鶴の背の——句解参考に「鶴遣ひの佐兵衛一昨夜相果候と承る」と前書あり

稻妻や様まで來てはかへる波
 秋かぜにすゝき打ちる夕かな
 たびにあきてけふ幾日やら秋の風
 鶴の背のはたをさすらん秋の風
 松植て竹のほしさよ秋の風

（句解参考）
 （或問珍）
 （真蹟集覽）
 （鶴反古）
 （同上）

題 畫 屏

君も臣もうきにはたへね秋の風
 旅僧の晝寐の床や秋の風
 誰が畑ぞ木綿なだるゝ秋の雨
 砂^{ムナ}楡の實にむくの羽音や初暴風

（古今俳諧題集）

粟津晴嵐

さぞ野分人の淡だつ市の聲
 穂薄におもふまゝなる野分哉
 まだ明ぬこゝろはいかに窓の月

（あさかり）
 （鶴反古）
 （蕉句拾遺）

○ふるびやふ——句解参
考「古び蓮」

○月十四日——これは美津
和久美（天保四年刊）の撰
書橋石庵一風所蔵の遺蹟短
冊の句である
○くろきもの——新編芭蕉
一代集による

まだ拾ぬこゝろいかにの窓の月
水油なくて寝る夜や窓の月
川舟やよい茶よい酒よい月夜
山さむし心の底や水の月
（都の花めぐり）
（もとの水）
（同上）
（廿五ヶ條）

石山 秋月

汐やかぬ須磨よ此海秋の月
* 川おとや五條の月のふるひやふ
（あさかり）
（霜のうつり）

高山藥壺興行にて草庵の月見ける洛の信徳山
素堂各々佳作有り素堂月見の記ヲ書

* 月十四日 今宵三十九の童部
くろきもの松原ばかり月夜哉
（美津和久美）
（四季風物集帖）

八月十三日夜江月庵にあそぶ

下戸の身に寒き池田の月夜哉
月消て秋は入日の跡の不二
（翁反古）
（句解参考）

○三月月の——新編芭蕉
代集による

國くや八景さらに氣比の月 同 上

長柄埋木の文臺のうら書に

月の洩るむかしの橋の板目哉 同 上

越の中山

中山や越路も月は又いのち 同 上

あすの月雨うらなはむ比那が島 同 上

角力の畫賛

裸身で押合ふものや月と風 同 上

衣着て小貝拾はむいろの月 同 上

東山月の出やうがあゝでない 同 上

三月月や名のなき山も三笠山 (無句後拾遺)

三月月や月なき水の草水の月 (月令博物考)

横づちもころび出たり草の月 同 上

三日月の空にさゐたは何の花 (四季風物畫帖)

○名月の——金花傳に「
土等秋坊にまみゆ」と註せ
り

待宵や松に音して初あらし
名月やたしかにわたる鶴の聲
おもく と名月の夜や茶磨山
*名月の見所とはん旅寐せん
名月や鶴脛高き遠干潟
名月や我家に戻る門徒坊
名月や我を筆架のかげぼうし
名月や我と筆架のかげぼうし
名月や水にはやらじ蓮のうへ
名月や西にもほしき窓一つ
名月や雨に深川酒うすし
名月の名所問はむ旅寝せむ
名月や我世も更むいつかまた
明月や鼻の先なる光明寺

(句讀參考)

(蕉句後拾遺)

(同上)

(金花傳)

(もとの水)

(同上)

(同上)

(芭蕉補日記
句讀參考)

(十家類題集)

(一筆集)

(句讀參考)

(同上)

(同上)

(同上)

○菊の日と——新編芭蕉一代集による

○濁の名残——新編芭蕉一代集による

○如行が云々——俳諧世説に「一草庵にて、一串抄に「人の養應を制して」とある

欽器の圖に題す

あとさきをおもへばさびしけふの月

(同上)

靈岸島の人來るに三人皆七兵衛といふにたはぶれて

盃に三ツ名をくむ今宵かな

(同上)

露にひとつ海にもひとつ月見哉

(同上)

更科や三夜さの月見雲もなし

(芭蕉翁句集)

菊の日と月見いづこの泊りせん

(後の便)

物識の心問たし後のつき

(無句後拾遺)

湯の名残幾度見るや霧の本

(真蹟拾遺)

曙や霧にうづまく鐘の聲

(無句空日記)

磯の宮森の露ちる旭かな

(翁反古)

如行が席上の養應を制して

*白露のさびしき味をわするゝな

(芭蕉翁日記)

宮部丹後のちか／＼旅より歸るときゝて

草の戸や貯も露の待まうけ

(句解参考)

露しぐれ蜜柑の色にしみたらす

(同上)

笠の紐よいかこちむけ秋ひより

(關川氏藏書)

地理

*秋の野や草の中ゆく風の音

(百歌一那集考証)

萍やしかも山田の落し水

(蕉句後拾遺)

みちのくにて

くらがりや三度起ても落し水

(もとの水)

幻 住 庵

旅くせや寐冷煩ふ秋のやま

(同上)

人影に蛙なく秋の水となり

(月令博物箋)

○八朔や——名所八體の一

○藤屋や——十家類題集に
「手盥湯つき繪」と前書あり
藤屋の句としてあり
○なき名——新編芭蕉一代
集による

人事

八朔や天の橋立たばね鬘斗

(もとの水)

なにがしの御代官に隨身して四國へ趣く人
に

七夕や裸すゞりの俄たび

(同上)

星合の中や絶なむ龍田川

(同上)

糠星や契りて後の手水の粉

(十家類題集)

なき名たつ空とはいへど星こよひ

(星の習)

月弓や壻の一藝男七夕

(二葉集)

秋來ぬと妻乞ほしや鹿の皮

(同上)

秋來ぬと妻戀ふ星や鹿の革

(句解參考)

草庵も魂まつりにていそがしく候

稻の穂のつゆばかりなる魂まつり

(翁反古)

○孟蘭盆や——金花傳に
「奈良の片わきにやどりて」
と註あり

○くすし云々——風俗文選
犬註解稿本には「くすし何
がしが繪」

骸骨の畫

夕風や盆挑灯も糊ばなれ

(もとの水)

* 孟蘭盆や家の裏とふ墓参り

(金花傳)

角髪やおくを出羽の相撲とり

(もとの水)

許六が畫に

勝角力いつも上手に米の飯

(もとの水)

風月賛

函
西乃角力印風來人
東乃關和桂男

西東はだかで出たる角力かな

(都の花めぐり)

鮭馬の影見ん關の渡し舟

(芭蕉稿日記
一葉集考證)

とめる氣と見へて秋から巨燧哉

(句解發考)

くすし何某が像

村雨を背中におふて柴胡堀

(もとの水)

いたゞいて落穂拾む關の前

(同上)

○ひれふりて——句解參考
には「男鹿山」と題し下五
「男鹿山」とあり。又勝峯
氏の新編芭蕉一代集によれ
ばこの句「五十四郡」に出
づと。

○朝風や——句解參考に
「法眞寺へ入院御しらせ忝
存候 立旅行明日のよしめ
て度候」とある

○月の鴈、鴈の聲——二句
新編芭蕉一代集による

○行燕——障子紙（寛政二
年刊）には眞蹟によるとし
てあげてある

○峯過す——月令博物箋に
は「峯すこし」

動物

* ひれふりて牡鹿もよるや牡鹿島
* 吟鹿や似合ぬ角の二本まで
朝風や只しら雲に雁ひとつ

（一葉集）
（穿陀稿本）
（翁反古）

堅田落雁

鳥の文かた田の雁よ片便り
鴈聞に京の秋におもむかむ
月の鴈羽裏も見せて渡り鳧
鴈の聲寝所廣ふ覺鳧
* 行燕又來る芽はり柳迄
峯過すわかれも鷹の眼哉
世わたりや渡りくらべてわたり鳥
朝ぎよめ渡る小鳥の一羽哉

（あさかり）
（慈護院消息）
（眞蹟拾遺）
（同 上）
（障子紙）
（花 辨）
（無句後拾遺）
（月令博物箋）

かは^(マ)かふの首めくらや渡り鳥 (同) 上

旅 中

いづれ名の付べき土手ぞ啼鶉 (句解参考)
木啄の入廻りけり藪の松 (同) 上

太順和上の來るとて來ざりければ

鷓鴣待て垣のさゝげは老にけり (同) 上

橋にせきれいの自畫に

鵲鴿の足もとかるし橋の霜 (参 反 芭)

川せみや三尺わきに己がかげ (月令博物考)

落あゆや水のまにくくだけけり (同) 上

二人して一つ釣けり江の鯰 (句解参考)

蜚普門品よむ右ひだり (同) 上

御供所の疊冷しきりくす (同) 上

電の壁にしむ夜やきりくす (同) 上

○鯛や——新編芭蕉二代集
による

○ちる柳——句解參考に
「此句細道にもれた」と
註し、俳諧世説・一葉集に
も芭蕉の句として出て居る

○ひと色を——鯛井戸龍照
寺内の萩塚の句であると

ほろさせと鳴さへあるに棉の蟲
鯛や明日の峠を見しり越し
みの蟲や己ひとりが冬構
かげろひに魚おどろかすやんま哉

(同上)

(蕉門語録)

(芭蕉神草紙)

(月令博物箋)

植物

嵐雪におくる

淋しさを問てくれぬか桐一葉

(一葉集考證)

柳陰軒句空に舍るとき

*ちる柳あるじも我も鐘を聞

(句解參考)

水清くなつて柳の散る日哉

(芭蕉神草紙)

日の跡の夕顔黒し紅芙蓉

(句解參考)

萩の露米つく宿の隣かな

(蕉句採拾遺)

ひと色を千々の錦や萩見寺

(茗荷園會)

○糸すゝき——尾花澤尾花
塚の句碑にある句で、土民
の語を芭蕉がそのまゝ句に
したのであると

○百景や——勝峯氏の芭蕉
一代集には柴庵を出所とし
てあげてあるが同書に所見
なし

○我も出んな——十家類題
集に「出んに」又句解參考
に「我も出なむ」

○咲みだす——此句東華集
には句主を記してないので

ねりやねりそ萩かる男むすひから
糸薄蛇にまかれてねまりけり
あれはてゝ雲についたる芒哉
風妖てすゝきに夜の雨すごし
見たか何所にそれおゝ見へた角力艸
初茸やもと來しみちへ又出る
馬士に落さるゝ身は木子かな
其句ひ籠よりもるゝ松茸の
やゝ秋風吹とばせ松のむら紅葉
百景や杉の木の間にいろみ草
かやぶきの隣ありけり薦紅葉
うるしかきに我も出んな朝烏
咲みだす山路の菊を灯籠かな
よく咲て人に見られよ宿の菊

(過去釋)

(總評の巻)

(芭蕉神草紙)

(句解參考)

(同上)

(同上)

(同) 芭蕉集見拾遺

(無句後拾遺)

(同上)

(芭蕉集)

(翁反古)

(同上)

(東華集)

(句解參考)

(從の便)

決し難し
○よく吟て——新編芭蕉一代集による

○孫は——句解參考に「熱考孫にては聞へず馬士の傳寫なるべし云々」と言つてある

○みちのくの——新編芭蕉一代集による

山しなの五荷三束や菊の花
撫子の暑さわするゝ野菊かな
大風のあしたも赤し唐辛子

李由去來の二人に

昆弱と柿とうれしき草の庵
橙や伊勢の白子の店さらし
勝沼や孫は葡萄を喰ながら
淋しさよ右も左もわすれ草
みちのくの尼子の橋や稻の上
風にちらぬさまあぢきなし青楓
折れそうに見えても枝の果哉
よしのにて見ても稻葉の雲は雲
おしろいもかひなき暮に開きけり
此梨は誰にあふてかくねりけん

(十家類題集)

(二串抄)

(もとの水)

(同 上)

(同 上)

(句解參考)

(芭蕉翁句讀)

(平善提議口碑)

(月令博物箋)

(同 上)

(同 上)

(同 上)

(同 上)

○さらでさへ——句解參考
には「旅行」と題す。一串
抄には「さらでだに秋や野
寺の——鐘」

待^{まち}く^て何やら足ら^たじは^{まじ}けいとう

同 上

五ツ四ツ都に近き松露哉

同 上

鎌倉の釋迦と楡棒みのりけり

同 上

おそ川にわりなく栗の流れ哉

同 上

落る榎の實にはたらざる秋落葉

同 上

雜

さらでさへ秋よ野寺の——鐘
後家の秋ものゝあはれをとどめたり

(もとの水)
(一 部 集)

冬

時 候

○寒き夜に——句解參考に
「寒き夜や」

十月やいづくへ雲の黒み行
冬さむし欠びをうつす息の色
綿弓や窓に入日の影寒き
藍壺に裁を失ふ寒かな
吉野まで行ずに歸る寒かな

十二月十五日

寒き夜に不破の關もる人はたそ
さびしさや湯守も寒くなる儘に
何某安適のぬし牛島に閑居しけるを

一夜寝て寒さくらべむ草の庵
狼の人に喰るゝさむさかな
蠟燭に顔のてらつく寒かな

生栖大明神廣前

此里は氣吹戸ぬしの風寒し

(芭蕉拾遺)

(蕉句後拾遺)

(もとの水)

(芭蕉補日記)

(翁反古)

(同上)

(句解參考)

(同上)

(同上)

(芭蕉翁句集)

(風俗文選
犬註附稿本)

○寒に寝て——新編芭蕉一代集による

○雪も氷りも——十家類題集に「雪や氷も」

○髭つらを——下五「年の市」とした別句がある。後出(二七五頁)

寒に寝て三味線聞ついかを山

(かんと島塚)

十二月みそか

雨霰雪も氷りも師走かな

(翁反古)

五百丸へ元服の祝として

春や立また春を見む此師走

(二華集)

中々に心おかしき臘月哉

(馬指堂宛消息)

畫 賛

行年や汝が親の小松うり

(もとの水、芭蕉補日記)

ゆく年や薬に見たき梅のはな

(もとの水)

十二月廿九日

髭つらを人なとがめそとしの暮

(翁反古)

みなおがめ二見の七五三を年の暮

(金剛集)

天文

旅情の静なるは錢無によろし

渡し呼ぶ人は我なりはつ時雨
はつ時雨靜に渡れかつら川

(翁反古)
同上

白 畫 贊

寺ひらく坊主の形も初時雨
鶏の聲にしぐるゝ牛屋かな

(句解參考)
(い の 水)

小倉山にて時雨にあひて

爰に來てかりそめならぬ時雨哉
時雨ふれ笠松へ着日なりけり
むら時雨てれふれ町の名なるべし
火吹竹音やしぐれて小豆飯
船頭の妻迎へたる時雨哉
上野から時雨て來るや車坂
枯芦に何を時雨の葉每哉

(翁反古)
同上
(二 葉 集)
同上
(句解參考)
同上
同上

○黒塚や——新編芭蕉一代
集による

時雨ふる柳の脊戸や艸の庵
 薦の葉の時雨にしぐれ降夜哉
 石に置いて香爐をぬらす時雨哉
 草の戸や我もの顔にもる時雨
 黒塚や迹追て来る一しぐれ
 ひつぢ田に霜の花見る朝かな
 あてもなくうつや霜夜のそらきぬた

言葉書破失

霜に起氷りに枕する身かな

(同上)

市中に住佗て

霜に飽氷に枕する身かな
 かりてねむ案山子の袖や夜半の霜

兩國の橋かゝりければ

皆出て橋をいたゞく霜路哉

(芭蕉句拾遺)

(二葉集)

(句解参考)

(同上)

(同上)

(同上)

(同上)

(かんてい鳥塚)

(もとの水)

(翁反古)

○雪寒し——茗荷圖會によ
れば駒込吉祥寺内なる雪塚
には「我身かな乗らぬ馬に
も雪寒し」とあると

○其まゝに——句解参考に
「此句あら野集に寝るの雪
落さぬやうに枝折らむとい
ふ句の同作なり覺束なし」
と云つてある

○いかさま三穂の——十家
類題集には「いかさま不二
の」

柵の葉にはねかへるあられ哉

(翁反古)

與或人文

冬しらぬ宿や扱する音あられ
物やあらむ人の霰の板庇

(二事集)

大雪や婆々ひとり住藪の家

(句解参考)
(もとの水)

艸庵に土あり

木枕の油ぬぐふやよるのゆき
雪の竹笛つくるべう節あらん

(同上)
(同上)

十二月四日

雪寒し馬にも乗ぬ我身哉

(翁反古)

ぬれ蓑を手柄にしたる雪見哉

(同上)

其まゝに折ばや折ん松の雪

(同上)

はし書切失

雪白しいかさま三穂の冬なれや

(同上)

○山は猶——これは誤寫であらう

○山は猫、黒森を——勝峯氏の「新編芭蕉一代集」によれば二句共に五十四郡に出づと、但し後句は上五「黒森は」とあり

○湖水から——「新編芭蕉一代集」によれば許六詠草に「湖水より光り出しけり比良の雪」とある由

○今朝の雪、おもふさま——「新編芭蕉一代集」による

茶臼に眠る兒の晝讀

ツモレ——とく起て見ん夜の雪

(同上)

山は猶ねむれはゆくや雪のひま

(百歌仙)

みちのく名所の内 猫山

* 山は猫眠りはいてや雪のひま

(百歌仙)

* 黒森を何といふとも今朝の雪

(百歌仙)

比良暮雪

さそへ雪白衣の天狗比良の雪

(茶さかり)

* 湖水から光り出しけり比良の雪

(二華集)

笠の緒や咽喰しむる不二の雪

(同上)

雪の日や羅紗の羽折にたゝき鞘

(同上)

庵にうつりて

深川や根こしの芭蕉雪がこひ

(同考證)

今朝の雪江戸の人足跡の沙汰

(龍本坂東太郎)

○旗吹や——信州高井郡安
田村翁塚の句

○雪の内の——新羅芭蕉一
代集による

○足あととは——むつのゆか
りに芭蕉が上野の糞虫庵に
居た時暇に書いて窓下の壁
間に貼つてゐたものだと思
つてゐる
○雪は雨——新羅芭蕉一代
集による

おもふさまふるまはれけり越の雪
横吹や駒もいなゝく雪あらし
竹の雪落て夜なく雀かな
菰を着て誰人雪の降日哉
雪の日に晝顔枯ぬ日かけ哉
雪の内の晝良かれる日影かな

狐歎じて云世にかはかぶりと云あり中く
人間よく化て禽獸は衰たり仍而

足あととは雪の人かかはかぶり
雪は雨あめは柳と成にけり
こがらしの町にも入るや鯨賣
我爲に日はうらゝ也冬の空
*我爲に日はうらゝ也千々の冬
*油こほりともし火細き寐覺哉

(後の句)

(龍岡翁墳記)

(句解参考)

(同上)

(同上)

(雪のかつら)

(むつのゆかり)

(風談短冊)

(蕉句後拾遺)

(一葉集考證)

(百歌仙)

(舊兵衛庵消息)

○つくぐと——句解參考
にこの句「馬はくぐ」と我
を繪に見る枯野哉」の初案
とし、諸本に「夏野哉」と
あるは非だと論じてゐる

○わするなよ——蕉句後拾
遺には「うしろ向の大黒の
簀」と題し「忘るゝな紙の
頭巾のしめくゝり」とある

○いくとせの——新編芭蕉
一代集による

○顔むぞよ——濱ゆふ（案
丸撰、芭蕉百回忌集、寛政
五年刊）に芭蕉の自畫贊を
模刻してかゝげ「近江高島

地理

旅行

つくぐと我を繪に見る枯野哉

（句解參考）

人事

御留守居に頼みおくべし玉津島

（系切繪）

羽山形にて三面大黒簀

*わするなよ神の頭巾のしめくゝり

（兩頭笠）

頭巾着た顔さしこむや繩簾

（芭蕉神日記
一葉集考）

我黒髪撫付にして頭巾かな

（芭蕉神日記）

いくとせの寢覺思へる帟衾

（玉のひかり）

*たのむぞよ寢酒なき夜の古紙子

（濱ゆふ）

煤掃や又此茶屋も不挨拶

（有也無也問）

宮の郷士小林次郎左衛門結にて翁みづから筆をとり此戯れあり小林屋敷内へ其紙子を埋めて紙子塚と號す予門弟爲墨うつし來れるを幸とかいつけ侍りぬ」と附記せり

○破れみのを——十家類題集に「破れ蓑もかつて來たりな蓑拂」

○土よりおこる——風俗文選大註解稿本に「土より出たる」

とし波や蟹のあまたの伊勢参	行船や何國の浦に年取む	山吹や井手の長者を年の宿	梅柳いたすか年の御撫もの	餅花やかざしにさせるよめが君	餅搗や都の町の朝月夜	偽りの舌に骨なし厄はらひ	松風や犬の付たる鉢たゝき	むつくりとこたつぶとんの朝け哉	硯このむ奈良の法師が巨燵かな	あらかねの土よりおこる火桶かな	深草やは是も浅草火鉢かな	煤はらひ牛のしらみの榎かな	破れみのをかりてきたりなすゝ拂
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
							(何解參考)	(月令博物箋)			(二葉集考證)	(芭蕉翁句集)	(翁反古)

○そばかりの——新編芭蕉
一代集による

子を背山妹山おろしうばら聲 (同上)
 松島や雪の白地の衣くばり (もとの水)
 うかくと年よる人やふる暦 (同上)
 年わすれ三人寄て喧嘩かな (同上)
 一休が土器買む年の市 (同上)

極月廿八日

髭面を人なとがめそとしの市 (翁反古)
 後の世はいかどなるらん冬ごもり (同上)
 薬喰ねぶかも園のにほひかな (都の花めぐり)
 そばかりの跡の霜ふむ雀哉 (四季分類)
 大年の夜ぬすみにあひて

梅干にかよふ黄鳥あはれなり (二筆集)

動物

○杜國に對して——句選半考に「或行脚僧云初案は鷹の聲似るものもなしいらこ崎と、此眞蹟保美の里の地頭に有り、見付けてうれしとは再案なるべし」とあり。又句解參考には「いらこ崎程近ければ見に行待りて」と前書がある

○一正の——この句芭蕉袖日記にも録す。なほ苔の花には「下總野木の宮」と前書あり

○己が身を——新編芭蕉一代集によればこの句消息中に見える由

杜國に對して

* いらこ崎似るものもなし鷹の聲

(兼句後拾遺)

一正のはね馬もなし川千鳥

(芭蕉の「花」)

ひだるさよ寒さよ須磨の磯衛

(兼「反古」)

* 己が身を枕に鴨のうき寝哉

(句解參考)

かいつぶり顔見合せて又這入

(同上)

船頭の小宿ばいりやみそさゝぬ

(同上)

乾鮭や何がし殿は毛唐人

(もとの水)

家にふるき奴僕ありてかたく型の教を守る

兄弟のくすし憎むや河豚汁

(同上)

ふぐ汁やあほうになりとならばなれ

(華島文庫)

能州の人に生海鼠を貰ひ梟

(金花傳)

植物

○此葉より——此の句芭蕉より介我に廿五ヶ條を傳へた時の吟で、介我はこれに「何所迄か此有明の鐘の聲」と答へたといふ。なほ諸國翁墳記には周防吉木龍藏寺境内の翁石壁の句として出で、十家類題集には「はせを葉に落書」と前書あり

○畔物——句解參考に「古調の句は皆かく謎のみ多し畔物は則小豆なり餅はお萩といへばそれを露花とす」と説いてゐる

冬がれや世は一色に風のをと
(もとの水)

落葉してぬかみそ桶もなかりけり
(芭蕉集日記)

麩うり行二本榎の落葉かな
(所名集)

此葉より外に伊達なる傳授なし
(風俗文選)

畔物の亥子の餅や歸花
(句解參考)

梅櫻菊よりのちの歸はな
(同上)

茶の花に人里ちかき山路哉
(同上)

水無月の水を種にや水仙花
(同上)

臘梅やむかし永井の金渡し
(同上)

寛文辛癸師走の末梅雪老の許にて

餅雪の落やめば早梅芬々
(同上)

口上に書おとしけり土大根
(もとの水)

尾の露川より宮しげ貰申候御出御料理可給

候

○枯たつや——十家類題集
に中七「伊駒か嶽に」

○文振集——真古撰、寶曆
十三年刊

○めぐり来る、わけ入りて
——二句新編芭蕉一代集に
よる

三十里尾張大根のはなし哉
大根のひかれし跡や枯野原
ほね柴や斯と見るより蝶の殻
枯たつや伊駒が嶽の松ばかり

(芭蕉集日記)

(所名集)

(もとの水)

(翁反古)

雑

雀踊れ我もその年過るとも

(文塚集)

前書たゞれみへず

あかしがたさいわい雨のふる日哉
めぐり来る月と花とにほとゝぎす
わけ入りて見よ月花も草まくら

(翁反古)

(録草)

(同上)

七色探題 月下送兒

○月花や——一三二頁所出
「月澄や」の誤寫か

○里の名も——肥後宇土國
應寺の四考據の句だといふ。
この句句解參考には中七「聞たき花の」
○さくばくを——新編芭蕉
一代集による
○笠を敷て——伊豫松山三
津濱にある碑の句だといふ

月花や狐こはがる兒の供
こんくはいがなみだの雨のふる狐

辛崎夜雨

琵琶の海雨よ疎顔か松の律
里の名も聞たき夜の山の道
是はく香取は杉のよい處
いくばくをかさねくて旅ごろも
笠を敷て手をいれてしる龜の水

(風俗文藝
犬誌稿本)

(風俗文
犬誌稿本)

(あさかり)

(語釋翁墳記)

(句解參考)

(具談短冊)

(語釋翁墳記)

二、誤傳の部

元日や何となけれど遅樓
元朝や何となけれど遅ざくら
齒朶の葉もなきにもちひの鏡かな

路通

(句解參考)

(續野)

(二葉集)

○宗房——これは芭蕉とは全く別人である

しだの葉を枝えだにもちゐの鏡哉 宗房（毛吹草）

もて來つる是ぞ年玉こゝろ玉 （一筆集）

もて來つる是ぞ年玉心玉 宗房（毛吹草）

濡色や大土器の初日影 （時雨芭蕉一代集不審抄）

濡いろや大かはらけの初日影 任行（續猿蓑）

春雨や枕くづるゝものゝ本 （句解參考）

春雨や枕くづるゝうたひ本 支考（續猿蓑）

物の名の蛸や古郷の風轆 （芭蕉雜日記）

物の名も蛸や故郷のいかのぼり 信徳（江戸三時）

安部川に名のみして

水上はうぐひす鳴て水淺し （蕉句後拾遺）

安部河はたゞ名のみして

水上は鶯啼て水淺し 支考（笈日記）

素牛集春の句をのぞまれて即興

鶯や雀よけ行枝うつり （平安三十歌傳）

○猿はしや——句解參考に
甲斐屋筋にある翁の句碑と
してあげ、鳥醉の「かけは
しや」とも居直る笠のうへ」
との關係を疑つてゐる

○梅が香や——宇陀法師に
よつてもこの三ツ物の第三
だけが芭蕉の句である

鶯や雀よけ行えだ移り去來（藤の宮）

桑名の濱の地蔵にて

蛤の闇白魚の月夜かな（蕉句拾遺）

桑名驛にて

白梅の闇白魚の月よかな（句解參考）

蛤の闇しらうをの月よかな涼菟（行脚展）

蛤の闇白魚の月夜哉涼菟（麻生）

猿はしや蝶も居直るかさの上（句解參考）

かけはしや蠅も居直る笠のうへ鳥醉（句集）

梅が香や通り過れば弓の音（はせを盛）

うめが香や通り過せば弓のおと（芭蕉新巻）

梅が香や通り過れば弓の音毛続（元禄六年三月）

梅咲や白のひき手によきまがり（おが玉の木）

梅咲や白の挽手のよき曲り（一華集）

梅咲や白の挽木のよきまがり曲水（梅）

うめ咲や白の挽木のよきまがり曲翠（炭）

猿轡に對して

もろくの心柳に任すべし

（もとの水）

猿山子の俳勇を示す

もろくの心柳にまかすべし 涼荒

（永藤刈）

さぞな都淨瑠璃小歌この花

（泊船集）

さぞな都淨瑠璃小歌はこの花 信章

（江戸三吟）

あしだはく僧もみへたり花の雨

（芭蕉句選）

足駄はく僧も見へたり花の雨 萬菊

（蕉の小文）

てきちよくにもててふ來るや花見酒

（一筆集）

てきちよくにもててふ來るや花見酒 宗房

（一筆集）

一僕とぼくありく花見哉

（十家類題集）

一僕とぼくありく花見哉 秀吟

（山之井）

氏もよし生立もよしや藤の棚

（一筆集）

氏もよしそだちもよしや藤の棚 宗房

（毛吹草・小町雨）

關こへて爰も藤しろみさか哉

（十家類題集）

關こえて爰も藤しろみさか哉 宗祇

（一筆集）

○いろいろの——句選の頭書にも「ひさご集に珍碩の句にして翁の臨あり」とこ
とわつて居る

○ゆくにまだ——一串抄には中七「春も見しらぬ」とあり、「追ていふ此句變足が集にも出づ管見のあやまり猶有ん然れ共しらべは専ら翁の方也」と附説してゐる

布子着て夏より暑し桃の花

布子着て夏よりは暑し桃の花 支考

芭蕉句選拾遺

いろいろの名も紛はし春の草

いろいろの名もまぎらはし春の草 珍碩

(芭蕉句選)
(ひさこ)

氣のつかぬ所を土堤の莖かな

何の氣もつかぬに土手の墓哉 忠知

この華

暮春に碓氷を越る

ゆくにまだ春を見しらぬ木芽哉

(句解參考)

暮春碓日をとゆる

ゆくにまだ春を見しらぬ木の芽哉 涼袋

古今題集

またれつる五月も近し聳ちます

またれつる五月もちかし
 犂粽 尙白

（句解參考）
（噬鰓日記）

笠松やまづた立の辻どころ

夏の月胸にもものなし飯糰山

籠らばや八鹽の里に夏三日

鵜匠とも遣ふて見せよ前田川

（句）解 參 考
（書）上 草

（五）上草

○大塚や——句解参考には
春部に収めてゐる

笠松の夜雨

笠松やまづ夕だちの逃どころ 桃隣

飯綱山秋月

夏の月胸にもものなし 飯綱山 同

八鹽の晴嵐

籠らばや八鹽の里に夏三月 同

前田川歸帆

鵜匠ども遣ふて見せよ前田川 同 (陸奥千鳥)

熊野路や分つゝ入れば夏の海

大塚やよしのゝ奥も花の果 (句解参考)

熊野路やわけつゝ入ば夏の海 曾良

大峰やよしのゝおくを花の果 同 (陸奥日記)

五月雨も後の五月の小文かな (句解参考)

さみだれも後の五月の小文哉 支考 (支日記)

わるあつく吹や一木の松の音 (句解参考)

○川中の——猿舞歸に「右の句翁の句也と誰やらが集に書入たるは翁と玄羽の文字を讀たがへたと史子申されける」と附記せり

○渺く——泊船集にすでに「笈日記に入集すれども伊丹の句にして翁の句にあらず」と言つてゐる

みのゝ國人見の松にて

わるあつく吹や人みの松のかぜ 去來（鳥の道）

涼しさや竹握り行藪通り （熊野鳥）

涼しさや竹握り行藪通り 半殘（田原義）

川中の根本によこるぶすゞみ哉 （炭俵・泊船集）

川中の根本に横るぶ涼かな 玄羽（猿舞師）

東路よりのぼりて人く^{スネ}にたいめす

東路の毛髓^{スネ}恥かし床すゞみ （ばせを鹿）

東武より都に歸る人々にあふて

東路の其すねみてし床涼み （無句後拾遺）

四條河原にて

吾妻路の毛すねはづかし涼床 一鐵（江戸殿之師）

湖水田植

渺く^と尻ならべたる田植哉 （笈日記）

渺く^と尻をならぶる田植かな 此句食といふ俳諧の書に蟻道ぬしと成ぬまた或書に都の自悦の句にも聞へぬ是なら

○つかみ合ふ——この句鯉
 蝦日記に「去來途中の時と
 て語る」とあるので去來發
 句集には去來の作と認めて
 みる

○三部抄——新編芭蕉一代
 集による

ん一草二名なるべし

(蘇 即)

渺くと尻をならぶる田植かな 曲水(根無草)

下闇や地中ながらの蟬の聲 (十家類題集)

六本木にて

下闇や地虫ながらの蟬の聲 嵐雪(勸進帳・猿蓑)

つかみ合ふ子供のたけや麥ばたけ (芭蕉新巻)

つかみ合子共のたけや麥畠 游刀(猿蓑)

つくぐと榎の花の袖にちる (芭蕉翁句集)

イ々と榎の花の袖そむる (蕉句後拾遺)

つくぐと榎の花の袖にちる 桐葉(續田三歌仙
春と秋)

かさねとは八重撫子の名なるべし (芭蕉袖日記)

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良(奥の細道)

發心の時

散はちれ千里一風の鐵線花 (一編 芭蕉集)

ちらば散れ草一條の鐵仙花 (句集參考)

散ばちれ千里一風の鐵線花 可尋(三部抄)

手車となるや折とる風車 (句照參考)

手車となるや折取風車 宗房 (毛城歌野草)

花くを百あはせてや百合の花 (句解參考)

花くを百あはせてや百合の花 宗房 (毛城歌野草)

夜歩行にから櫓の音や浦の秋 (蕉句後拾遺)

夜あるきにから櫓の音や浦の秋 去來 (種有磯海)

秋の暮男は泣ぬものなればこそ (ばせを照)

行秋や男はなかぬものなればこそ (芭蕉句選拾遺)

秋は夕を男は泣ぬ物なればこそ 才麿 (自根麿)

金昌寺といふ寺に泊る

終夜秋かぜ聞やうらの山 (芭蕉句選)

終宵秋風聞やうらの山 曾良 (奥の細道)

終夜秋風きくや裏の山 曾良 (旅葵・鳥の道)

旅行に

翁起な起ば浮世の秋を見む (句解參考)

木陰に熟睡したる乞食を見て

○男ぶり——この句千那宛
芭蕉の手紙（落葉考所載）
にも「加生越人へ挨拶」と
して出てゐる

○宗房——これは別人

○詫てすめ——武藏曲の二
句を一句に混同して誤つた
のである

起なくおきばうき世の秋をみん 舍羅（花の市）

秋のくれ中くをかし桐火桶

（新編芭蕉一抄）
（葉不磨）

秋のくれ中くをかし桐火桶 重厚（句双紙）

越人へ

男ぶり水呑顔や秋の月

（蕉句後拾遺）

越人にあふて

おとこぶり水のむ顔や秋の月 凡兆（藥野後集）

三日月やはや手に障る草の露

（一葉集）
（語類彙編）

三日月やはや手にさはる草の露 桃隣（三日月日記）

廿日過出るや名残三日の月

（一葉集）

廿日過出るや名残三ケの月 宗房（小町題）

詫てすめ月佗網笠の窓を家として

（泊船集）

うかれ行月網笠の窓ヲ家として 角止

佗テすめ月佗齋がなら茶歌 芭蕉（武藏曲）

目くらより瘰のかはゆき月夜哉

（時代不問）
（終句合）

盲より啞のかはゆき月見哉 去來（續虛夢）

○たなばたに——句選の頭書に「泊船集に此句杉風」と註してある。芭蕉の「高水に星も旅髪や岩の上」に和した句である

誰くもひがし向らん月の暮

(十家類題集)

たれくも東むくらん月の昏 去來

(續 虛 栗)

たなばたにかさねはうとし絹合羽

(芭蕉句選)

七夕にかさねばうとし絹合羽

杉風 (芭蕉庵小文庫)

七夕にかさねばうとし絹合羽

杉風 (泊 船 集)

出羽の國に赴く陸奥のさかひを過て

そのかみは谷地なりけらし小夜砧

(芭蕉句選)

出羽の國におもむく時みちのくのさかひを

過て

そのかみは谷地^ヤなりけらし小夜砧

公羽 (國 旗 選)

ちかづきに成つて別るゝかゞし哉

(芭蕉句選拾遺)

近附に成りて別るゝ案山子哉

惟然 (其 匠)

しる人になりてわかるゝかゞしかな

惟然 (有 磯 海)

からの字のつれて渡るや鳥の聲

(木 が ら し)

がらの字の揃ふて渡る鳥の聲

(詠 念 題)

雀^カの字や揃ふて渡る鳥の聲

馬 莧 (國 旗 選)

○野の宮の——八南聯の涼
菟句集「涼菟集」にも採録
し「此句泊船集に入事いぶ
かし」と言ひ、夢太の芭蕉
句解にも「涼菟句選に出た
り」と指摘してある

○船になり——句解參考に
「愚考此句江戸通町といふ
集に一晶と有既に杉風への
狀の末に風と此句をいたし
候故申上候いかゞあるべく
候や尤海邊の寺にての吟と
あれば却て翁の句を取違へ
て餘人の句にして入集した
るかもしらず」といひ、又土
居氏舊蔵芭蕉の眞蹟もある
といふから、なほ決し難い
點もある。しかし江戸通町
(原本翁句の部今傳はらず)
は最も信すべきであらう。
かつ泊船集にも「此句翁の
製なりとある人申されし實
否はしらず」と疑つてゐる

これもまた水生木やもみち鮎
これも又水生木やもみち鮎 宗房(小町通)

野々宮の花表に薦もなかりけり 芭蕉集

野の宮の鳥居に薦もなかりけり 芭蕉集

野々宮の鳥井に薦もなかりけり 涼菟(芭蕉集)

船になり帆となる風のばせを哉 反古集

船となり帆となる風のばせをかな 泊船集

船になり帆になり風の芭蕉かな 一晶(移徒抄)

船になり帆に成風の芭蕉哉 一晶(新始)

鶴啼や其聲に芭蕉やれぬべし 泉の細道外道

鶴の讃

鶴啼や其聲芭蕉やれぬべし 曾良(壁九げ)

深川やばせをを富士に預け行 芭蕉句選外道

深川や芭蕉を富士に預け行 甲子吟行

おほとちの花や全部のくさ草紙 新編芭蕉集

おほとちの花や全部のくさ草紙 宗房(芭蕉集)

○によきく——句選年
考校訂者の言に「俳要抄に
この句は湖春の時にして遠
禪大全に載せられたる旨を
記す、元祿九年遊林編反故
集にこの句を芭蕉の時に
す」とある。實ゆふには「相
州蒲賀素柏重寶文藝裏書展
筆」とあるので、なほ考證
の餘地がある

○木曾殿と——これは句解
参考にもすでに「桃の實」
を引き、作者についての疑
を存してゐる

とらへたき聲ばかり見る芦間かな (二 蕉集)

とらへたき聲ばかり見る蘆ま哉 宗房 (小町 師)

玉川の水におぼれそ女郎花 (芭蕉句選)

たま川の水におぼれそ女郎花 杉風 (杉風句集)

によきく——と帆柱さむき入江哉 (反古集・實ゆふ)

によきく——と帆柱寒き入江哉 湖春 (句選年考)

木曾の虚翁が許にやどをもとめて

木曾殿とらしる合せの寒哉 (句解参考)

木曾塚に旅寝せし比

木曾殿と背あはする夜寒哉 いせ 又玄 (富の松原)

木曾塚にふして

木曾殿と背あはする夜寒哉 又玄 (桃の實)

木曾塚無名庵に一夜あかして

木曾殿と背を合す夜寒哉 伊勢 又玄 (己が光)

木曾塚

○越人——これは如月集の誤であらう

○雪の日や——溫故集には上五「雪降りや」として作者不知とし、俳諧類句辨後篇にも作者しらすとある

○薄氷——俳句後拾遺にもこの句普船の作だと、句選拾遺の誤を指摘してゐる

木曾殿と背合^{セナカ}する夜寒哉 越人^{尾州}（如月）

初雪やあれも人の子皮拾ひ（蕉句後拾遺）

雪の日やあれも人の子樽ひろひ冠里（納俳家奇人談）

雪ごとに梁たはむ住居かな（小文庫・泊船集）

雪ごとにうつばりたはむ住居哉 岱水（幽蘭集）

雪ふりや乞食ながめて居る乞食（句閑參考）

雪ふりや火燵ながめて居る乞食 宗房（一の華）

雪花は南の枝や遅さくら（二葉集）

雪花は南の枝や遅さくら 宗房（毛吹草）

風の吹やるうしろすがた哉（蕉句後拾遺）

芭蕉翁回郷

木がらしの吹行うしろすがた哉 嵐雪（増廣葉・千鳥）

薄氷折めの儘の茶巾かな（芭蕉句選拾遺）

薄氷折目のまゝの茶巾哉 普船（雞談集）

いさみたつ鷹引居る霰哉（幽深川）

○水鼻に——この句句選年
考所引主水宛芭蕉の手紙に
出で又大崎氏藏露天宛の手
紙にも見えるが、すでに誤
差・忘れ梅の二書に千那の
作とあれば、右の手紙は懸
る信じ難い

○冬枯の——猿舞師に「右
の句翁の句也と誰やらが集
に書入たるは翁と公羽の文
字を讀たがへたと史子申
されける」と附記せり

いさみたつ鷹引すゆる嵐かな 里圃 (續猿蓑の西)

口切やたしか内儀は小紫 (句解參考)

口切やたしか内儀は小紫 春來 (俳諧新選)

着て立て夜の衾もなかりけり (芭蕉補日記)

着てたてば夜るのふすまもなかりけり 丈草 (幻の庵)

水鼻にまこと見せけり御取越 (芭蕉句選)

水鼻にまこと見せけりおとりこし 千那 (續猿蓑)

水涕に信ありけり御とり越 千那 (忘れ梅)

植よく塚も年寄る冬のまへ (新編芭蕉一代集不審抄)

植よく塚も年寄る冬がまへ 柳居 (冬扇一語)

千代をふる天のてんつるあられ酒 (一葉集)

千代をふる天のこんづかあられ酒 宗房 (小町踊)

冬枯の磯に今朝みるとさか哉 (炭俵・泊船集)

冬枯の磯に今朝見るとさか哉 公羽 (猿舞師)

けき散し甲斐の落ばや田子の浦 (句解參考)

今朝ちりし甲斐の木の子や田子の浦 布仙 (續猿蓑)

○蕉の足——以下はすべて芭蕉の吟ではあるが、附句を發句と誤り傳へたものである

○風菊云々——虚栗に「重陽三句菊」と題して出で、獨立した漢句であるが、普通の俳句として句集には收め難い

飛ものは雲ばかりなり石の上
(句 礎)
殺生石

飛ものは雲ばかりなり石の上 麻父(名所小鎮)

○

驚の足雉子脛ながく繼そへて
(芭蕉翁純句集)

挨拶を爰ではしたい花なれど 正長

又かさねての春もあるべく常之

驚の足雉^{キシ}脛^{ハキ}長く繼添て桃青^次
(二 華 集)

有 蘭 草 菊 宜 止
(二 華 集)

○風 菊^{カセノ} 蓋^{サシ} 笠^{リツノ} 冠^{キセン} 止 嵐朝

○有 蘭^{ニホヒ} 草^{グサ} 菊^{ソヘガミニ} 宜^{シト云リ} 止 芭蕉

○俳 門^{ウカレヒト} 有 芳^{カウバシキタヘコ} 菊^ニ 止 嵐雪^{虚 夢}

山はみな蜜柑の色の黄になりて
(泊 船 集)

一里の船も腹のすきたる 望翠

○入口は——宇陀法師には作者名はないが、同書所載の芭蕉の句は皆無記名だから句選拾遺には芭蕉の作と認めたのである。かつこの句の芭蕉真蹟も存するさうだから勸進帳のみによつて直ちに誤傳ともし難い

○武藏野や——當世男は延寶四年蝶々子撰、坂東太郎は延寶七年才麴の撰で、二者いづれを正しとすべきか決し難い

山はみな蜜柑の色の黄になりて 芭蕉
 目なれてかゝる畑の露霜 支考（みかんの色）
 かけこひに戀のこゝろを持せばや （十家類題集）
 ふすま 摺ツカむで洗ふ油手 嵐蘭
 掛ヶ乞に戀のこゝろを持せばや 芭蕉
 翠簾にみぞるゝ下賀茂の社家 酒堂（深川集）

○

入口は柳にのぼる（マ）芳野哉 （宇陀法師芭蕉句選拾遺）
 入口は柳にのぼるよし野かな 前川（勸進帳）
 武藏野や一寸ほどな鹿の聲 桃青（當世男）
 むさし野や一寸程な鹿の聲 西望（坂東太郎）

〔補〕

一、考證の部

○玉のひかり——この出所
新編芭蕉一代集による

○風妖で、十月や——二句
考證の部に前出を削る

御玄冢も過て銀杏の落葉かな

（十家類題集）

眞野

繼はしの跡は水田の水鶏かな

（所名集）

二、誤傳の部

いざのぼれ嵯峨の鮎喰に都どり

（所名集）

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥

貞室（一本野草）

人ありや窓の枇杷くふ山鳥

（玉のひかり）

人ありや窓の枇杷くふ山鳥

楚常（卯辰集）

風妖ですゝきに夜の雨すこし

（句解參考）

破茅

風妖で薄に夜の雨すこし 李下

（歳時）

十月やいづくへ雲の黒み行

（芭蕉集發句拾遺）

十月やいづくへ雲のくろみゆく 幽也（いっをき）

昭和七年五月十五日印刷
昭和七年五月二十日發行

芭蕉俳句集★★★
定價四十錢

校註者

穎原退藏

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目
菊地眞次郎

岩波文庫
811—812



發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七〇—一八八〇番
九段 〇〇三番 小賣部専用
振替口座東京二六二四〇番

株式會社英秀舎印刷

岩波文庫教科書版目錄

裝幀

四六和
表紙
ワイパー

第一編	古	事	記	幸田成友校訂	定價二十錢
第二編	白文萬	葉	集	上卷 佐佐木信綱校訂	定價一圓
第三編	白文萬	葉	集	下卷 佐佐木信綱校訂	定價八十錢
第四編	新訓萬	葉	集	上卷 佐佐木信綱編	定價八十錢
第五編	新訓萬	葉	集	下卷 佐佐木信綱編	定價六十錢
第六編	古今和歌	集		尾上八郎校訂	定價四十錢
第七編	源氏物語	(一)		島津久基校訂	定價四十錢
第八編	源氏物語	(二)		島津久基校訂	定價四十錢
第九編	源氏物語	(三)		島津久基校訂	定價四十錢
第十編	源氏物語	(四)		島津久基校訂	定價六十錢
第十一編	源氏物語	(五)		島津久基校訂	(近刊)

第十二編 枕 草 子(春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂 定價四十錢

第十三編 枕 草 子(春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂 定價四十錢

第十四編 枕 草 子(春曙抄) 下卷 池田龜鑑校訂 (近刊)

第十五編 大 鏡 和田英松校訂 定價四十錢

第十六編 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 定價六十錢

第十七編 平 家 物 語 上卷 山田孝雄校訂 定價四十錢

第十八編 平 家 物 語 下卷 山田孝雄校訂 定價六十錢

第十九編 徒 然 草 西尾實校訂 定價二十錢

第二十編 奥の細道(その他芭蕉翁紀行集) 伊藤松字校訂 定價二十錢

第二十一編 日本永代藏 和田萬吉校訂 定價二十錢

第二十二編 世間胸算用 和田萬吉校訂 定價二十錢

附記 本書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般國文學研究者に取つて非常に便利な書入本となり得ると信じます。

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民や愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く排くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帯に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此學に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の厚望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうはしき共同を期待する。

既刊書目

國文學

- 新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★
新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★
古事記 幸田成友校訂 ★
新日本書紀 上卷 黒板勝美編 ★
新日本書紀 中卷 黒板勝美編 ★★
古語拾遺 加藤玄智校訂 ★
水鏡 和田英松校訂 ★
大鏡 和田英松校訂 ★★
三條西榮花物語 三條西公正校訂 ★★
伊勢物語 屋代弘賢校訂 ★
竹取物語 附錄 島津久基校訂 ★
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ★★

- 平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ★★
源氏物語 (一) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (二) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (三) 島津久基校訂 ★★
土佐日記 池田龜鑑校訂 ★
紫式部日記 池田龜鑑校訂 ★
更級日記 西下經一校訂 ★
枕草子(春曙抄) 上 池田龜鑑校訂 ★★
枕草子(春曙抄) 中 池田龜鑑校訂 ★★
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 ★
古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ★★
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ★★
藤原定家歌集(附定家) 佐佐木信綱校訂 ★★
法華義疏 上卷 龍崎太子御説 花山信盛校訂 ★★
正法眼藏隨聞記 龍崎太子御説 花山信盛校訂 ★★

- 日蓮上人文抄 楠崎正治校注 ★★
歎異抄 金子大榮校訂 ★★
徒然草 西尾實校訂 ★★
方丈記 山田孝雄校訂 ★★
申樂談 義世阿彌著 野上阿彌校訂 ★★
花傳書 野上阿彌著 野上阿彌校訂 ★★
奥の細道その他 伊藤松字校訂 ★★
芭蕉七部集 伊藤松字校訂 ★★
芭蕉連句集 小宮豊隆編 ★★
燕村七部集 伊藤松字校訂 ★★
風俗文選 伊藤松字校訂 ★★
鶉 衣 石田元季校訂 ★★
おらが春・我春集 一茶作 萩原井永校訂 ★★
俳柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ★★
俳柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ★★
俳柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ★★
萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★★

其和解の死男志賀直義著★★★
 陸奥直次郎長興寺郎著★
 青銅の基督長興寺郎著★
 偷盜芥川龍之介著★
 厭世家の誕生日佐藤春夫著★★★
 入江のほとり正宗白鳥著★
 生まざりしならば正宗白鳥著★
 大石良雄野上彌生子著★
 海神丸野上彌生子著★
 出家とその弟子倉田百三著★★★
 布施太子の入山倉田百三著★
 そゝの妹武者小路實篤著★
 人間萬歳武者小路實篤著★
 波山本有三著★★★
 病牀六尺正岡子規著★★★
 墨汁一滴正岡子規著★★★
 仰臥漫錄正岡子規著★★★

子規歌集正岡子規著★
 左千夫歌集土屋文明選★
 上田敏詩抄茅野蕭々編★★★
 晚翠詩抄土井晚翠著★★★
 藤村詩抄島崎藤村自選★★★
 有明詩抄蒲原有明著★★★
 泣菫詩抄蒲田泣菫著★★★
 文道遙遺稿金澤川路著★★★
 歌舞音楽略史小中村清規著★★★
 俗樂旋律考上原六郎著★
 蘭學事始杉田元白著★
 茶の本村岡田三著★
 綱島梁川集安倍能成編★★★
 清澤文集清澤澗之著★★★
 福澤撰集福澤諭吉著★★★
 北村透谷集島崎藤村編★★★
 海舟座談集本善治編★★★

外國文學(小説・戯曲・詩)
 杜詩卷之一 藤山文四郎譯註★★★
 杜詩卷之二 藤山文四郎譯註★★★
 杜詩卷之三 藤山文四郎譯註★★★
 杜詩卷之四 藤山文四郎譯註★★★
 陶淵明集 藤山文四郎譯註★★★
 唐詩選 上巻 藤山文四郎譯註★★★
 唐詩選 下巻 藤山文四郎譯註★★★
 即興詩人 上巻 森 鷗外譯★★★
 即興詩人 下巻 森 鷗外譯★★★
 プラン ドイブセン作★★★
 幽 雲 曲 小宮豊隆譯★★★
 妻 小宮豊隆譯★★★
 父 ストリントベルク作★★★
 令嬢 ユリ エストリントベルク作★★★
 オネーギン プーシキン作★★★
 イワニングニキフオチ 原久一譯★★★
 キツチとが應をした恋 原久一譯★★★

検 察 官 米川正夫 作 ★★

現代のヒーロー レールモント 中村白雲 作 ★★

皇帝フォードル アルトス 中村白雲 作 ★★

ブウニンとパブリック 小沼 遺 作 ★★

罪と罰 第一巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

罪と罰 第二巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

罪と罰 第三巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

カラマーゾフの兄弟 第一巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

カラマーゾフの兄弟 第二巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

カラマーゾフの兄弟 第三巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

カラマーゾフの兄弟 第四巻 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

貧しき人々 ドストエフスキ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第一巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第二巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第三巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第四巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第五巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第六巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第七巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第八巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第九巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

戦争と平和 第十巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

イヴン・イリツチの死 トルストイ 中村白雲 作 ★★

結婚の幸福 トルストイ 中村白雲 作 ★★

光あるうちに光の中を歩め トルストイ 中村白雲 作 ★★

クロイツェル・ソナタ トルストイ 中村白雲 作 ★★

復 活 上巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

復 活 中巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

復 活 下巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

生 ける 屍 トルストイ 中村白雲 作 ★★

櫻 の 園 トルストイ 中村白雲 作 ★★

伯父ワニーヤ トルストイ 中村白雲 作 ★★

サーニン上巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

サーニン下巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

賢者ナータン トルストイ 中村白雲 作 ★★

平ルヘルム・上巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

平ルヘルム・下巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

平ルヘルム・下巻 トルストイ 中村白雲 作 ★★

フアウスト第一部 森 田 外 作 ★★

フアウスト第二部 森 田 外 作 ★★

グレンシニクイン 森 田 外 作 ★★

若いエルテルの悩み 森 田 外 作 ★★

グイルヘルム・テル 森 田 外 作 ★★

全グリム童話集 第一 金田 鬼一 作 ★★

全グリム童話集 第二 金田 鬼一 作 ★★

全グリム童話集 第三 金田 鬼一 作 ★★

全グリム童話集 第四 金田 鬼一 作 ★★

全グリム童話集 第五 金田 鬼一 作 ★★

全グリム童話集 第六 金田 鬼一 作 ★★

全グリム童話集 第七 金田 鬼一 作 ★★

ゲエチの対話抄 エツケルマン 著 ★★

春の目ざめ ヴェーグマン 著 ★★

埋 木 キリシユル 作 ★★

トオマス・マン短編集 一 賀 吉 捷 郎 作 ★★

七 大 哲 人 オイゲン著 ★★

科 學 の 價 値 ボアンカレ著 ★★

科 學 と 方 法 ボアンカレ著 ★★

科 學 者 と 詩 人 ボアンカレ著 ★★

將 來 の 哲 學 の 根 本 命 題 フォイエルバハ著 ★★

自 然 認 識 の 限 界 に つ づ け る 研 究 フォイエルモン著 ★★

自 然 に 於 け る 七 つ の 謎 坂 田 徳 男 著 ★★

藝 術 の 一 般 的 意 義 高 村 理 智 著 ★★

ケ ー ー 博 士 隨 筆 集 久 保 勉 著 ★★

カ ン ト と ゲ ー テ ジ ム メル著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅱ 山 田 吉 彦 著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅲ 山 田 吉 彦 著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅳ 山 田 吉 彦 著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅴ 山 田 吉 彦 著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅵ 山 田 吉 彦 著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅶ 山 田 吉 彦 著 ★★

フ ァ ー ブ ル 昆 蟲 記 Ⅷ 山 田 吉 彦 著 ★★

チ ャ ー ル ズ ・ ダ ー ウ キ ン 小 泉 丹 澤 著 ★★

種 の 起 原 上 巻 ダーウキン著 ★★

人 及 び 動 物 の 表 情 に つ い て 濱 中 信 人 著 ★★

雑 種 植 物 の 研 究 マンデル著 ★★

生 命 の 不 可 思 議 上 巻 ヘツケル著 ★★

生 命 の 不 可 思 議 下 巻 ヘツケル著 ★★

回 想 の セ ザ ン ス 有 島 生 馬 著 ★★

こ の 人 を 見 よ ニーチェ著 ★★

ミ ル 自 傳 西 本 正 美 著 ★★

佛 蘭 西 文 學 史 上 巻 フリントナール著 ★★

伊 太 利 文 藝 復 興 期 の 上 巻 村 松 恒 一 著 ★★

文 化 上 巻 田 部 重 治 著 ★★

ベ ー タ ー 論 集 田 部 重 治 著 ★★

戀 愛 論 上 巻 スタンダール著 ★★

戀 愛 論 下 巻 スタンダール著 ★★

戀 愛 と 結 婚 上 巻 エレン・ケイ著 ★★

戀 愛 と 結 婚 下 巻 エレン・ケイ著 ★★

チ ミ タ シ ョ ・ ク リ ス 内 村 達 三 著 ★★

ア ウ グ ス テ ー ン の フ ォ ン ・ ハ ル ナ ッ ク 著 ★★

唯 一 者 と そ の 所 有 上 スチルネル著 ★★

唯 一 者 と そ の 所 有 下 スチルネル著 ★★

エ ミ イ ル (第 一 篇) 平 林 初 之 輔 著 ★★

エ ミ イ ル (第 二 篇) 平 林 初 之 輔 著 ★★

エ ミ イ ル (第 三 篇) 平 林 初 之 輔 著 ★★

儀 悔 錄 上 巻 石 川 巖 著 ★★

儀 悔 錄 中 巻 石 川 巖 著 ★★

儀 悔 錄 下 巻 石 川 巖 著 ★★

獨 逸 國 民 に 告 ぐ フ ァ イ ヒ テ 著 ★★

文 明 論 の 概 略 羅 蘭 論 著 著 ★★

法 律 ・ 社 會 ・ 政 治 ・ 經 濟

ア リ ス ト テ ラ イ 原 因 論 著 ★★

法 の 精 神 上 巻 モンテスキエ著 ★★

法 の 精 神 下 巻 モンテスキエ著 ★★

民 約 論 平 林 初 之 輔 著 ★★

ス ミ 國 富 論 上 巻 氣 賀 勲 著 ★★

トオマス・マン短編集 實吉健郎譯 ★
 祖 妣 ^{グリバルツエル作} 岡本隆助譯 ★
 み れ ^{シニツツラ作} 森 顯外譯 ★★
 ア ナ ト ー ル ^{シニツツラ作} 小宮登陸譯 ★★
 青 い 鳥 ^{メーナルリク作} 若月紫蘭譯 ★★
 ポリウクト ^{コルネイユ作} 木村太郎譯 ★★
 人間 嫌 ひ ^{モリエール作} 關口存男譯 ★★
 マノン・レスコオ ^{アベ・プレウ作} 河盛好藏譯 ★★
 從兄ボンス 上巻 ^{バルザック作} 水野 亮譯 ★★
 從兄ボンス 下巻 ^{バルザック作} 水野 亮譯 ★★
 知られざる傑作 ^{バルザック作} 水野 亮譯 ★★
 カ ル メ ^{（他五篇）} 杉 健夫譯 ★★
 エトルリアの壺 ^{（外五篇）} 杉 健夫譯 ★★
 日の 出 前 ^{ハヴトマン作} 坂本忠夫譯 ★★
 希臘の 春 ^{ハヴトマン作} 城田皓一譯 ★★
 ソアーナの異教徒 ^{ハヴトマン作} 奥津彦重譯 ★★
 水 の 上 ^{モリエール作} 吉江隆敏譯 ★★

ビエルとジャン ^{モウパッサン作} 館田 異譯 ★★
 お 菊 さ ん ^{ビエル・ロチ作} 野上豊一譯 ★★
 氷 島 の 漁 夫 ^{ビエル・ロチ作} 吉江隆敏譯 ★★
 若き日の手紙 ^{フイリツツ作} 外山橋夫譯 ★★
 愛と死との戯れ ^{ロマン・ロラン作} 片山敏彦譯 ★★
 法王廳の 抜 穴 ^{アドルフ・シュツ作} 石川 洋譯 ★★
 ク オ レ ^{愛の上巻} 前田 見譯 ★★
 ク オ レ ^{愛の下巻} 前田 見譯 ★★
 恐ろしき 媒 ^{ホセ・エネガライ作} 永田寛定譯 ★★
 作り上げた利害 ^{ベナベンテ作} 永田寛定譯 ★★
 子 守 唄 ^{シエルラ作} 永田寛定譯 ★★
 希臘羅馬神話 ^{バルフィニ作} 野上彌生子譯 ★★
 フォースタス博士 ^{（ミロウ作）} 松尾 相譯 ★★
 パーリンズ詩集 中村篤治譯 ★★
 エヴァンジェリン ^{ロシエフエロウ作} 齊藤悦子譯 ★★
 クリスマス・カロール ^{ディッケンズ作} 森田草平譯 ★★
 プラウ サウル ^{（ミロウ作）} 齊藤 勇譯 ★★

フレイク抒情詩抄 露岳文章譯 ★★
 小 公 子 ^{ババネット著} 若松賤子譯 ★★
 人 と 超 人 ^{バナーディン作} 市川又彦譯 ★★
 鰥 夫 の 家 ^{バナーディン作} 市川又彦譯 ★★
 緋 文 字 ^{ホーソン作} 佐 藤 清譯 ★★
 哲學・自然科學・文學・宗教・教育
 ブラソクラテスの辯明久保 勉譯 ★★
 トンク リート ^{（阿部次郎譯）} 阿部次郎譯 ★★
 プラプロタゴラス 柳池英一譯 ★★
 カン 純粹理性批判上巻 天野貞祐譯 ★★
 カン 實踐理性批判 波多野精一譯 ★★
 トン 實踐理性批判 宮本和吉譯 ★★
 カン プロレゴメナ 桑木貞賢譯 ★★
 スピノ 哲學體系 小尾篤治譯 ★★
 スピノ 知性改善論 島中尚志譯 ★★
 哲學とは何か、ゲインデルバンド著
 イマヌエル・カント 河 東 瀧譯 ★★
 歴史と自然科學・道 威インデルバンド著
 徳の原理に就て 藤田英雄譯 ★★
 認識の對象 山内得立譯 ★★

ラッパ労働者綱領 小泉信三郎註 ★

カス哲學の貧困 淺野 吳 著 ★★

資本論初版鈔 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★

マルクス本人問題を論ず 久留間啓造 細川 嘉六 著 ★

エンゲルスの自然辯證法上巻 加藤 正 著 ★★

エンゲルスの自然辯證法下巻 加藤 正 著 ★★

住宅問題 エンゲルス著 加田 哲二 譯 ★★

エンゲルスの政治經濟史考 カウツキ著 喜多野清一 譯 ★★

家族私有財産の起源 エンゲルス著 雅雄 譯 ★★

フオイエールバハ論 エンゲルス著 佐野 文夫 譯 ★★

反デューリング論 エンゲルス著 長谷部文雄譯 近刊

エンゲルスの空想より科學へ 佐野 吳 譯 ★★

マルクス・エンゲルスの傳 リヤヂノフ著 長谷部文雄譯 ★★

マルクス・ドイッチェ・エンゲルスのイデオロギー 三木 清 譯 ★★

ニニ帝國主義 長谷部文雄譯 ★★

ニニ唯物論と經驗批 佐野 文夫 譯 ★★

ニニ唯物論と經驗批 佐野 文夫 譯 ★★

ニニ唯物論と經驗批 下巻 佐野 文夫 譯 ★★

ニニ何を爲すべきか 平田 貞 著 ★★

經濟學及課税の原理 リカ・アドア著 小泉信三 譯 ★★

道徳の經濟的基礎 シュタウデンガー著 草間 平 譯 ★★

建築の七燈 ラスキ著 高橋 松州 譯 ★★

この後の者にも ラスキ著 西本 正 譯 ★★

地代論 ラスキ著 山口 正 譯 ★★

ベリ婦人論 上巻 草間 平 譯 ★★

ベリ婦人論 下巻 草間 平 譯 ★★

近代民主政治 一 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 二 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 三 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 四 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 五 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 六 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 七 三 松山 武 譯 ★★

近代民主政治 八 三 松山 武 譯 ★★

經濟要錄 佐藤 信 著 ★★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。

□内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於て最善を期します。

□最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を含める形式を採りました。

□購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。

□體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀

□活字は八ボイントを用ひました。

□約百頁を單位として星一つを以てそれと現はし、★一つ毎に二十銭の定價です。

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

れる様に、小さい形の中に、深山の内
容を盛る形式を採りました。

□購求の自由 しかも讀者が全く自由に
欲しい本を隨時求められる自由選擇の
方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢
等の實際的方面に於ても亦最善を期し
ます。

□體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯
裝幀

□活字は八ポイントを用ひました。

□約百頁を單位として星一つを以てそれ
を現はし、★一つ毎に二十錢の定價で
す。

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を
通めてゆきます。

□番號はただ發行順に従つて之を追ふも
のであります。

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は
三百頁の本一冊なることを示し、百頁
づつの分冊ではありません。

□送料及び定價は左表の通りです。

★	定價二十錢	送料二錢
★★	四十錢	四錢
★★★	六十錢	四錢
★★★★	八十錢	六錢

★★★★★ 一冊 六錢

□御註文は前金で御願ひ致します。小さ
い本で極度の廉價なのでから必ず送
料はお添へ下さい。切手代用は一割増
に願ひます。

◇ 岩波文庫新刊書目 ◇

源氏物語 四 島津久基校訂 ★★

三條西榮花物語中巻 三條西公正校訂 ★★

煤煙 森田草平作 ★★

支那通俗古今奇觀 青木正兒校訂 ★

獅子座の流星群 ロマン・ロラン作 ★

マルクス神聖家族或は
エンゲルス批判的批判 三堂清倫譯 ★★

史科學的に見たる
科學的宇宙觀の變遷 スワンテ・アーレニウス著
寺田寅彦譯 ★★

今村富太郎

